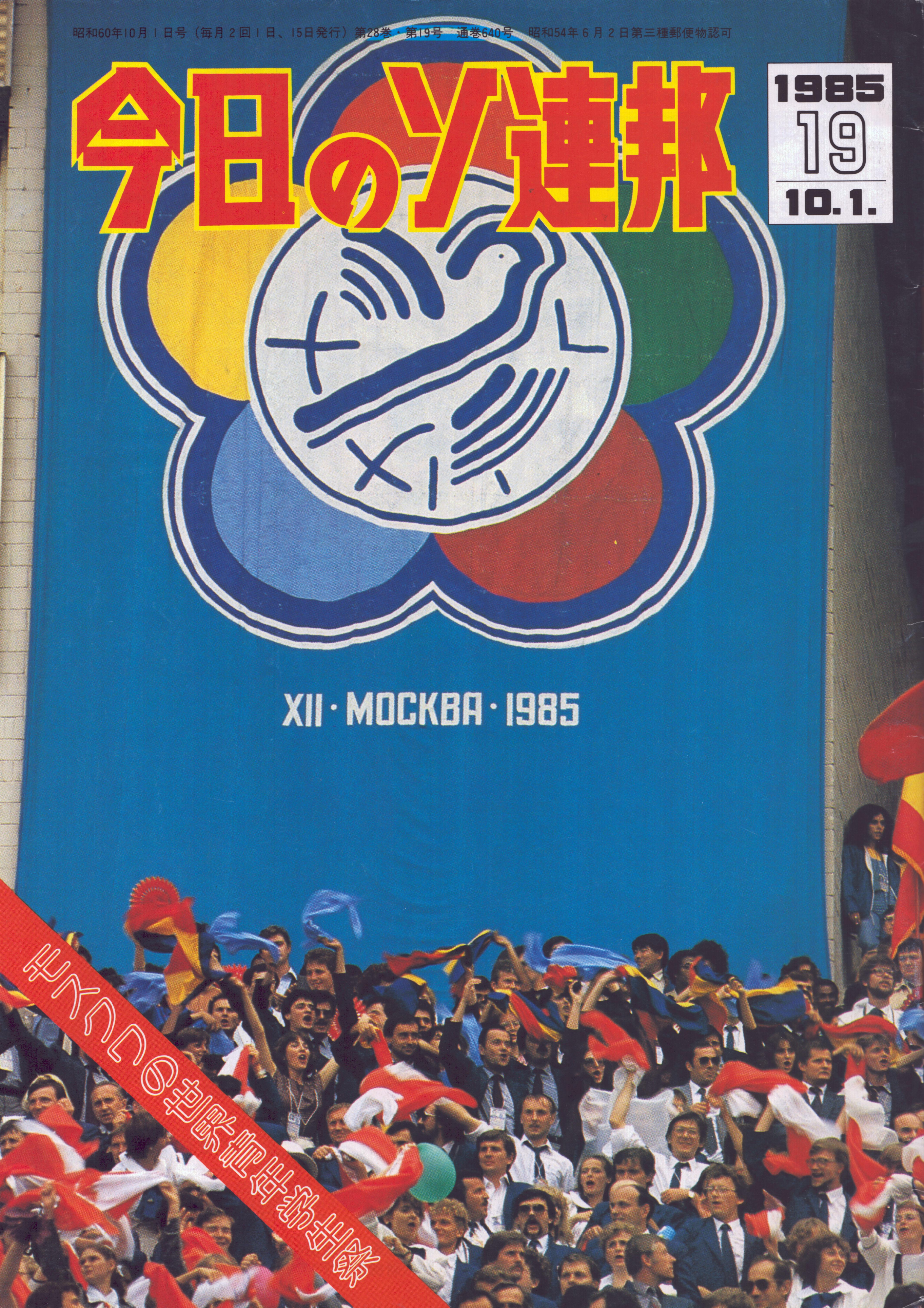
昭和60年10月1日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第19号　通巻640号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
19
10.1.



モスクワの世界青年学生祭

第19号　1985年10月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　"平和、友好、フェスティバル"——これらの単語は第12回世界青年学生祭の開催中、モスクワ市内のいたる所で聞かれた。（カメラ　B・ババノフ）

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

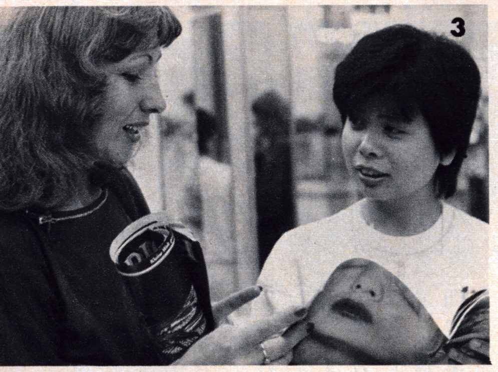
本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



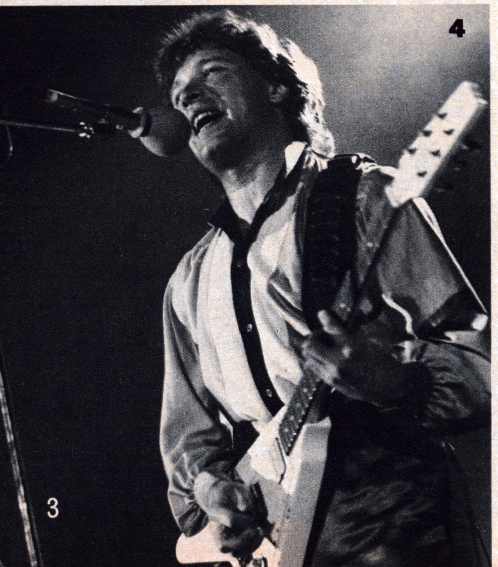
1



2



3



4

1　ダンスを通じて親善を深める。

2　スカンジナビア諸国代表団クラブの開所式には、スウェーデンをはじめさまざまな国の青年が出席して現代の運動の問題を討議した。

3　岩手県の中学教師菅沼妙子さんにはモスクワで新しい知人が大勢できた。

4　「平和をめざしてたたかうロック」に出演したロックグループ「地球人」のソリスト、イーゴリ・ロマノフ



7月27日、レーニン中央スタジアムで行われた第12回祭典の開会式

モスクワの第12回世界青年学生祭

本誌記者　D・グルシコフ　V・ルスカノフ

カメラ　B・ババノフ　I・ミハレフ　A・ヤコブレフ



祭典開会式で祝辞を述べるM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長

M・S・ゴルバチョフの祝辞

親愛な友人の皆さん、尊敬する来賓の皆さん！

わが国の国民を代表して、みなさんをソビエト社会主義共和国連邦の首都モスクワに歓迎する。第12回世界青年学生祭の開幕おめでとう。

このような青年学生祭はつねに大きなお祭りであり、大きな国際的出来事である。お祭りだというのは、すべての大陸の若い代表たち、さまざまな世界観や民族的伝統をもつ人々が一堂に会するからだ。それぞれの国民の精神的宝庫におさめられているすべての最高のものを分かちあうために一堂に会し、それによって相互理解と友好への最短の道を開こうとしているのだ。ソ連の人々はこの催しを心から喜び、皆さんを歓迎している。

しかし、もちろん青年学生祭は単にお祭りというだけではない。実生活の諸問題は年長の世代と同様若者にも鋭く関わっており、関心を集めている。若者は若さの全熱情をかけて社会正義と真の自由をめざすたたかいに、地上の幸福と文明の恵沢に万人が浴せるようにし、各人と人類の生活から暴力と人種差別主義、不平等と抑圧、軍国主義と侵略が姿を消すようにするたたかいに立ち上がろうとしている。

親愛な友人の皆さん、明日の世界、きたるべき次の世紀の世界は、皆さんの世界だ。それがどんなものになるかは、多くの点で今日の皆さんの考えや行動によって決まる。

ここ、偉大なレーニンの祖国で、皆さんはわが国の若者がヒューマニズムと平和と社会主義の崇高な理想にいかに忠実であるかをじかに感じとることができる。

いま人類には平和を守り固めること以上に重要で緊要な課題はないという点でわれわれ全員の意見は一致すると思う。未来を考えることによっても過去をふりかえることによってもわれわれはこのことを義務づけられている。

みなさんのフォーラムは、ヒトラー・ファシズムと日本軍国主義の壊滅40周年、最も多くの血が流された激しい戦争であった第2次世界大戦の終結40周年の年に開かれる。戦後多くの苦しみや悲しみが残り、それがすでにここ数世代の生活に影響を及ぼしており、このような不幸のくりかえしを許さないようわれわれに強く求めている。

諸国民は、40年前世界が最初の原爆の炸裂に戦慄したことも忘れはしない。この炸裂の反響は、あらゆる誠実な人の良心と理性に訴えかけている。

そして各人はこう自らに問わなければならない。核兵器がこれ以上決して――地上でも宇宙でも使われないように、核兵器が完全に永久に廃絶されるようにするために、自分は何をしたのか。われわれの共通の家である地球のために自分ができることを問い、実行しなければならない。

残念ながら、皆さんもご存じのように、反動勢力がいまだに活発に活動を続けており、戦争と軍拡競争がそれらに巨額の利潤をもたらしている。これらの勢力は、歴史の歩みを逆戻りさせ、自分たちの権力と特権を保ち、自分たちの意思を諸国民に押しつけたがっている。

ソ連について言うなら、もう一度はっきりと言うが、戦争と武器のない世界、善隣と誠実な協力の世界、諸国民の友好の世界が社会主義の理想であり、われわれの政策の目的である。

われわれは軍拡競争に終止符を打つことを自らの課題としており、核兵器問題の最も抜本的な解決――その完全禁止と廃絶を、口先ではなく行動で支持している。

われわれは、人々の力やエネルギー、人類の英知が、次々と新たな破壊手段の開発にではなく、飢えや貧困、病いの根絶に、繁栄と平和な発展の目的に向けられることを求める。われわれは、脅しと暴力の政策、生存権や働く権利といった神聖な権利をはじめとする人権の侵害の政策に反対であり、解放された諸国や発展途上諸国が独占体の金もうけの源に変えられ、軍事基地と侵略の橋頭堡として利用されることに反対する。

われわれは包みかくさずはっきりと言う、ソ連は自由と民族独立、社会的公正をめざしてたたかう者の味方である。

親愛な友人の皆さん！ ソ連の人々は平和な創造的労働に従事している。われわれは多くの成果をあげ、多くのものを築きあげた。しかしさらに多くのことを成し遂げなければならない。ソ連の若者たちには、自分たちの手を貸し、自分たちの知識を注ぐ場がある。われわれは今日のソ連国民の事業に対する若者の貢献を高く評価している。そして、わが国の若者が、われわれの社会の建設を続行するという高い使命に、今後もみごとにこたえるであろうと強く確信している。

祭典参加者の皆さん、青年男女の皆さん、あなたがたは人類の春を、それぞれの国の国民の進歩と期待を具現している。

だから戦争や暴力、抑圧のない人類の現在と未来をめざしてねばり強くたたかおうではないか！

第12回世界青年学生祭を、連帯や、平和と諸国民間の友好への忠実さを納得のいくように示すものにしようではないか！

皆さんの成功と幸福を祈る！

7月27日から8月3日までモスクワで開催された第12回世界青年学生祭は、国際的な一大イベントとなった。この世界祭典には世界一五七ヵ国と西ベルリンから、さまざまな政見、哲学観、信教の代表二万人以上が参加し、交流の輪を広げることを願い、平和・軍縮・自由・正義、諸国民の友好と協力のための共同行動をめざしてたたかおうと願う、青年の共通の意思を示威した。

荘厳な祭典のシンフォニーが鳴り止んで、代表たちはクレムリンの壁のわきの無名兵士の墓の永遠の火から採った祭典の聖火のぬくみを身につけ、それぞれ家路に散った。そして祭典を総括し、青年祭運動ならびに国際生活全体を彩る前例のない大規模な行事となったこんどの祭典の意義を考え、理解する時が来たようだ。もちろん、われわれは本誌で、モスクワで討議された諸問題にまた戻るつもりであるが、いまはとりあえず肝心なことを取り上げておきたい。

まず初めに幾つか数字を挙げておこう。モスクワ祭典とはアフリカ、アジア、中東、ラテンアメリカの諸民族との57の連帯集会（一〇〇万人余りが参加）であり、15のテーマ別センター（70の討論会と55の円卓会議が行われた）である。これらの討論会などでは代表の約$\frac{1}{4}$に当たる五〇〇〇人が発言した。またモスクワ祭典とは延べ七五八一時間17分（三一五日）に及ぶ三一四五の各種行事であった。もしこれに予定外の会談や討議を加えると、8日間の祭典にまる1年分の行事が収まったと言っても言い過ぎではないだろう。さらに祭典は反帝連帯・平和・友好の〝1年〟であった。しかし祭典は未来へ進む途上の新しい段階の始まりであるから、過去形で祭典のことを話すのは、正しいことだろうか。

いま未来の世紀が誕生する

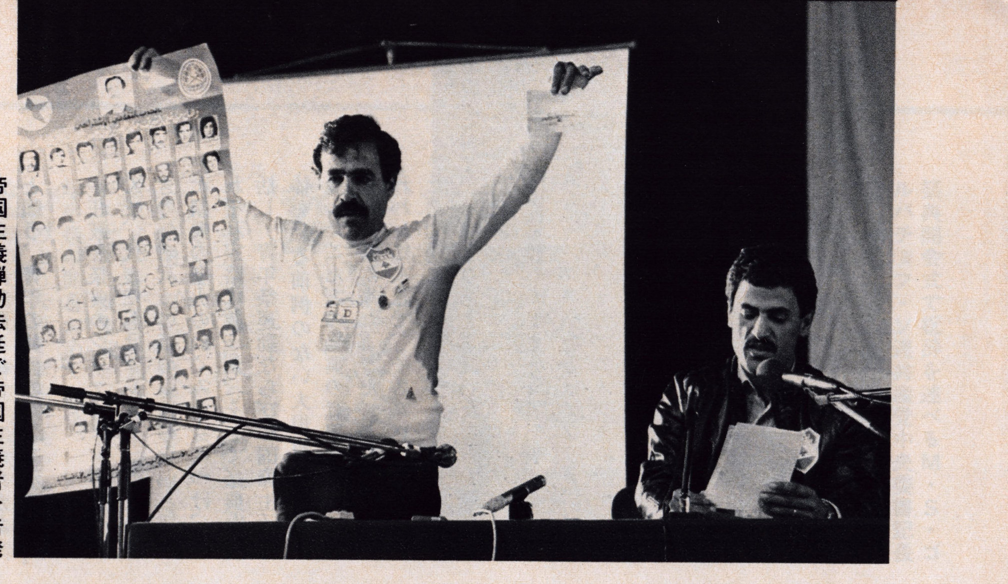
周知のとおり、ことしは国際青年年である。国連がことしを国際青年年としたことは、現代世界における青年男女の役割が向上したことを物語っている。M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は祭典代表への祝辞のなかで「親愛な友人の皆さん、明日の世界、きたるべき次の世紀の世界は皆さんの世界だ。それがどんな世界になるかは、多くの点で今日の皆さんの考えや行動によって決まる」と述べた。

しかしその明日が到来するには、明日をめざして今日たたかわねばならない。そしてソ連や他の社会主義諸国の青年も、何百万という若いアメリカ人、日本人、フランス人、アフリカ人、ラテンアメリカの人々も、このことをよくわきまえている。

モスクワ祭典は平和を守る人々の極めて幅広いフォーラムとなった。祭典を通じて人々は、たとえば英国のグリーナム・コモン米軍基地のゲートわきのあの伝説的な〝平和キャンプ〟で



祭典開会式場を行進する祭典旗



帝国主義弾劾法廷で帝国主義者を告発するレバノン代表



帝国主義弾劾法廷が開かれたコスモス・ホテルのホール

たたかっている鉱員の娘フランシス・エプリャードさんやギリシャのNATO脱退をめざす同じ年頃の人々のたたかいについて話したギリシャ女性のアーロン・ディミトリスさん、そして北欧の非核地帯化運動を支援する北方諸国センターの青年同盟連合代表のフィンランド人のキルス・マルチカイネンさん……を知った。

誰も彼もが平和を望んでいるのだ。いまは〝タカ派の人々〟さえも平和を望む人々の姿を装っている。この〝衣替え〟の術によりワシントンは、資本主義諸国の一部の青年団体をまどわし、これらの団体の代表に祭典で発言させて、国際緊張激化の責任は米ソが同等に負うべきだという考えをもぐり込ませた。だが結局これらの代表は孤立した。

注目の的となった ソ連の平和提案

祭典の圧倒的大多数の代表は、戦争の脅威の源はワシントンであり、平和への現実の道は、全般的完全軍縮、核兵器の実験禁止と廃絶、宇宙の軍事化防止を通らねばならないという点で、意見が一致した。

祭典に参加した青年たちはいわゆる〝スターウォーズ〟計画にとくに強い不安と危惧を抱いた。このことと関連して思い出すのは、一九六二年のヘルシンキ祭典に名誉来賓として参加した世界最初の宇宙飛行士ユーリー・ガガーリンが集会の一つで「われわれは地球上だけでなく、宇宙でも仲よくするつもりだ」と述べた言葉である。

それ以来20余年の間にソ連は、地球周辺の空間の平和的開発で大きく前進した。ソ連の宇宙飛行士とともに、社会主義共同体諸国やインド、フランスの代表も宇宙を飛行した。フランスの宇宙飛行士ジャン・ルー・クレチアンは来賓として第12回世界祭典に参加したが、一九八五年にフランスの宇宙飛行士第1号が平和な宇宙のことを話すよりもむしろ、宇宙の軍事化計画についてコメントしなければならなかったのは、いかにも不安なことだった。「まったく狂気の沙汰です」とクレチアン氏はモスクワで語った。

世界の進歩的青年の立場がはっきり現れたのは、八〇〇人の代表が参加した軍縮と平和の問題（中心的討論の一つ）の討議のときであった。このとき引用された数々の事実は次のようなものであった。つまり現在世界に蓄積されている核弾薬は五万五〇〇〇発で、その総威力は広島に投下された爆弾の威力の数百万倍に達している。また15分ごとに軍拡という機関車のカマで二八〇〇万ドルが燃やされている。このような〝平和状態〟維持の方法、もっと正確に言えば恐怖状態維持の方法は、世界の青年から断固拒否されている。

広島・長崎被爆40周年記念集会「広島、長崎は警告する――悲劇は繰り返されてはならない」で、アジア仏教徒平和会議の代表の熱のこもった呼びか



7月28日、ルムンバ民族友好大学で祭典の反帝連帯センターが開所した。

日本代表の印象(1)

モスクワの第12回世界青年学生祭には日本から三〇〇余人の代表が参加した。記者は日本の4名の代表に祭典の印象を聞いた。（聞き手 A・シェベレフ、I・フェドレンコ本誌記者）

安岡秀輿さん（日本社青同国際委員会委員）

世界青年祭がソ連の首都で催されたことは、とても印象的だと思います。ソ連政府はたえず平和を守り固める提案を出していますし、ソ連の青年は自分たちを国際反戦運動の前衛と見ています。だからほかならぬこのモスクワに世界のさまざまな国の代表が集まり、力を合わせて世界の平和な未来をめざしてたたかおうとしているのです。

ソ連側の祭典準備委員会は、とても世話のやけるこの国際行事を見事に組織しました。開催に骨を折られた皆さんのご苦労に拍手を送りたいものです。主催者側は代表や来賓が不便だと思うことがないよう、十分な手配りをしてくれました。

私は前にもソ連に来たことがありますが、ソ連と日本の国民には共通点が多いことをあらためて確認しました。その共通点とはまず人と仲よくし、お客を歓待することです。とくに目についたのは、モスクワ市民が私たちお客にいつでもお手伝いしますという態度で接してくれたことです。もう一つ気付いたのは、ソ連の人々が一つにまとまった仲のよい家族のように暮らしていることです。だから祭典でも私たちは、ほんとうに自分の家にいるような感じで、落ちつけました。

菅原英哉さん（自治労気仙沼市職労青年部長）

こんどの祭典は世界平和をスローガンに掲げたすばらしいフェスティバルでした。日本から来た代表は皆、祭典を準備したソ連の青年のご苦労を感じとりました。この一週間を最善のものにするために、ソ連の青年は2年間いろいろと用意してきたのです。

私は軍縮問題の討論が行われた第一テーマセンターの議事に出席しました。モスクワ祭典では意見を十分に自由に交換でき、主催者に深く感謝しています。

ついでですが、ソ連の青年の視野の広さを強調しておきたいと思います。彼らは資本主義諸国や発展途上諸国の生活についてよく知っていましたが、これはソ連の教育制度の成果だと思います。

おもしろかったのは、政治に関する議論だけではありませんでした。たとえば私は水工設計研究所の技師の家にお邪魔したのですが、その家の人々は

35ヵ国の2,000人が参加した平和のランニング



けが、平和大通りのオリンピック総合施設前にはっきり響き渡った。「偉大な仏陀はわれわれにこうおさとしになっている。戦いを望めば人間の頭脳は堕落し、暴力を唱えれば人格は下落する」

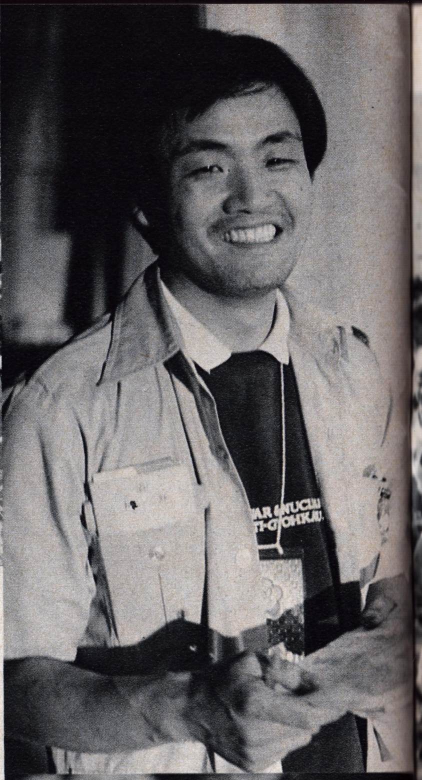
今ならまだ平和を救うことができる──こうした気持ちを胸に抱いて祭典の代表たちは原爆犠牲者たちとの会合に出席した。石田明・全国原爆被爆教職員の会会長や江種祐司・同教職員の会会員が訴えた被爆の恐ろしい実相を、人々は息をつめて聞きいった。

モスクワ祭典は、世界の青年が政見、信教、哲学観の違いを乗り越えて、世界を核戦争の脅威から救うという一つの目的のもとに団結できることをはっきり示した。世界の青年はこの責任ある使命を前にして、戦術の違いや自分たちの当面の政治的な考えを棚上げしている。第12回祭典は、参加者の顔ぶれの幅の広さや参加国の数から見て全くユニークな青年フォーラムとして、青年祭運動史を飾るだろう。まさに現代の民主的青年運動に参加しているあらゆる人々が、フェスティバルの旗のもとに集まったのであり、かつてなかった画期的なことだった。

平和・軍縮センターでの討論終了後、インド代表で、インド国会議員のグルダス・カマト氏は「ここで述べられた意見は、デタントを固め、平和な未来を確保するうえで大きな意義をもつだろう。核実験のモラトリアムに関するソ連の新しい提案は、核軍拡を抑制する現実的道を開くものだ、とわれわれは確信している」と語った。









右上　祭典に出席した社青同国際部の安岡秀興さん

右下　7月27日、レーニン・スタジアムに10万人の大群集を集めて開かれた祭典の開会式は、興奮のるつぼとなった。

上　7月28日、モスクワのレーニン丘のピオネール宮殿に祭典の児童センターが開かれた。写真はアスファルトに描く児童画のコンクール

上左　祭典の国際芸術公園（ゴーリキー公園）でベロルシア共和国の伝統民芸品のわら細工づくりを実演するガリーナ・サプーン（中央の女性）

新しい経済秩序を求める若い世代

世界青年学生祭は、いま全世界の青年たちが平和闘争を、自分の経済的、社会的、政治的権利を求める闘争と結びつけていることをはっきり示した。新型兵器開発のために使われている金をヒューマンな目的に使えと要求する声が一斉にモスクワで上がった。

国連の資料によると、現在発展途上国の一〇億余りの人々（発展途上諸国の全人口の半分以上）が食糧難にあえいでいる。しかもこの数字の大半は子供と未成年者であり、発展途上国の子供の死亡率は工業先進国の6倍ないし10倍にのぼっている。

いわゆる〝第三世界〟の資本主義諸国に対する債務は八〇〇〇億ドル強という途方もない数字に達した。一番ひどいのがラテンアメリカで、対外債務は三六〇〇億ドルになっている。ラテンアメリカでは子供がひとり生まれた瞬間から外国の銀行、主に米国の銀行から平均一〇〇〇ドルの〝債務を負う〟勘定になっている。その子供が一人前の大人になる頃にはこの〝借金〟は2倍、3倍、4倍になりかねない……

第12回世界青年学生祭が、対外債務

ロシアの民芸品を収集するのが趣味で、コレクションを私に見せて、それらにまつわる面白い話をしてくれました。それは自分の国、伝説と芸術を愛している証拠だと言えます。実に気持ちのいい、たのしい家庭で、ソ連の家の部屋は日本の同じような家庭の家よりもはるかに大きいのをうらやましく思いました。

菅沼妙子さん（岩手県の中学教師、日本社青同員）

とてもすばらしい祭典でした。開会式のとき日本代表団の仲に入ってレーニン中央スタジアムを行進したとき、私も連帯という強大な力のひとコマだと感じ、思わず胸を張りました。会場の人々からとても温かい歓迎を受けました。祭典の雰囲気はきわめてよく、実に友好的でした。

私たちの泊まったコスモス・ホテルはソ連国民経済成果博の並びだったので、思い立って成果博に行って見ました。すると、たちまち市民に取り巻かれ、日本のことをいろいろ聞かれました。それからバッジや一寸したみやげものをプレゼントされたり、記念写真を撮ったりしました。どこへ行っても大体こうでした。

もちろんそれぞれの国の青年は、それぞれ特殊な問題を抱えています。しかし肝心な問題は──祭典でとくにはっきりつかんだことですが──平和・軍拡抑止の闘争が必要だということです。この問題で若い人々が積極的態度をとるかどうかは、多分に教育しだいだと思います。子供の時から善、平和、反戦の思想を植えつけなければなりません。ソ連ではそれがとても重視されていて、うれしく思いました。ソ連の学校では「平和の授業」が行われており、戦争がいかに恐ろしい悪かを子供たちに教えているとのことでした。中学の教師として私は、それはとても重要で正しいことだと見ています。それだからソ連の青年は反戦運動でいつもリーダー役を演じているのだと思います。

私は労組会館円柱の間の広島・長崎被爆者追悼の夕べと日本代表団クラブの集会に出ました。その席で驚いたのは、ソ連の青年男女が一九四五年8月の恐ろしい出来事のことをよく知っていたことです。私はソ連の青年たちの深い痛みやこの悲劇の再発を阻止したいという強い意志を感じとりました。祭典で私は、ソ連の青年の反核闘争の決意は、空文句ではなく、平和運動への現実的貢献であると確信しました。

全般的に言って、フェスティバルは、おそかれ早かれ平和の善が戦争の悪に打ち勝つという信念を私に植えつけてくれました。平和を守るというけだかい共同の目的のもとに結集した世界の進歩的青年こそ、非常に大きな力であるとしみじみ感じました。



モスクワのすべての通り、広場、公園が祭り一色に塗りつぶされた。



祭典参加者を歓迎するモスクワの青年たち

祭典の閉会式は忘れられない強烈な印象を青年たちの胸に刻んだ。





モスクワのアーチストたちのロシア舞踊

祭典開会式の日本青年代表団





下右　モスクワのコムソモリスキー大通りを行く日本代表の一風変わったみやげ物は、市民の微笑を誘った。

問題に関するラテンアメリカ大陸会議がハバナで行われたのと時間的に一致したのは、意味深長だ。この会議には30以上のラテンアメリカ諸国の主立った政治家、経済専門家が出席した。モスクワ祭典の代表の多くはこの会議の内容に明らかな興味を示した。一方、キューバの代表たちは、この問題に対してキューバとその指導者フィデル・カストロがとっている立場をモスクワで説明するのに努めた。キューバ共産青年同盟（ＵＪＣ）のカルロス・ラーヘ第一書記が演説のひとつで述べたように、現在の国際経済秩序は不公正で非人間的である。泥棒にとられた自分の金の利子を泥棒に払うのは馬鹿げた話だというのである。

こういう態度は圧倒的大多数の代表、なかでもとくにメキシコ、アルジェリア、ギリシャ、イタリア、ドイツ連邦共和国、米国の代表から熱烈な支持を受けた。

〃帝国主義を有罪とする〃

一九七二年、米軍機のナパーム弾で焼き払われた自分の村から泣き叫びながら逃げ出すベトナムの少女キム・ヒーフンの写真が世界中に広がった。この少女の姿は帝国主義の犯罪の独特の象徴となった。

数年間ずっとキム・ヒーフンは病床に寝たきりだった。あのときの火傷が治らなかったのである。彼女が本当の治療を受けられたのは、南ベトナムが解放されてからだった。彼女は学校へ通い、卒業した。いまはホーチミン市の医科大学の学生である。キム・ヒーフンさんはベトナム代表団の一員としてモスクワの祭典にやってきた。帝国主義弾劾法廷で発言するために。

3日間にわたったこの弾劾法廷の審理はこんどの祭典の一番感動的なイベントだったと言えよう。世界中のいろいろな国から何十人もの証人が出廷し、



組合会館円柱の間で行われた広島・長崎被爆40周年記念討論会に出席した被爆者の江種祐司さん（左）と石田明さん



組合会館の円柱の間で開かれた広島被爆者との集会に集まった代表やジャーナリスト



アジア諸国の諸民族、青年学生の闘争との連帯集会でサインをするスリランカの青年代表



赤の広場を撮る日本の代表たち

スライド、ビデオ、それから帝国主義の犠牲となった人たちの書面の陳述など動かぬ証拠が提出された。その一つ一つの具体的ケースについて、いろいろな国の代表7人から構成された委員会が審議して、帝国主義を告発する断が下された――「帝国主義を有罪とする」

青年学生祭の開会式に出席した人たちに強い印象を残したのは、エルサルバドルの愛国者たちの代表だった。その多くはつい最近に受けた傷も癒えぬままにモスクワに着いた人々で、会場のレーニン中央スタジアム内の移動も担架に乗らなければならなかったほどだった。帝国主義弾劾法廷でもファラ

日本代表の印象(2)

佐野　明さん（総評青年局長）

第12回世界青年学生祭は非常に感動的で、熱の入ったセレモニーで閉幕しました。きっと日本代表団は全員、開会式、種々の行事、閉会式の印象を胸にしっかり刻んで帰国することでしょう。

このように多くの国の代表が一致して米帝国主義の政策を非難したことも、私の大きな印象の一つです。祭典には米帝国主義の内政干渉とたたかっているニカラグアその他の国々の代表も参加していました。

ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長が祭典参加者に祝辞を述べ、祭典を重視されたことも指摘しておく必要があると思います。祭典開催中に彼は核軍縮をめざすソ連の新しい提案を発表しました。ソ連の核実験のモラトリアムが日本人に忘れることのできない8月6日に発効することも注目すべきことです。ソ連のこの提案は現状打開の道をさし示すと同時に、すべての国の平和運動を力づける強力な刺激となるでしょう。

日本代表の大多数の人は、きっと他の国々の代表もそうでしょうが――世界祭典に初めて参加しました。そして祭典は彼らにとって闘争と連帯の真の学校になりました。ここで得た体験は、われわれ労働運動または平和運動の参加者が、祖国で社会活動をするのに役立つでしょう。このことはフェスティバルの大きな意義と成功のいま一つの現れだと思います。



祭典の開会式で9.000人が描いた人文字「ノー・モア・ヒロシマズ」は祭典期間中青年たちの口からたびたび聞かれた。

ブンド・マルチ民族解放戦線（FMLN）の闘士ギレルモ・カストロ氏は、ワシントンから経済・軍事援助を受けているカイライ政府との戦いでエルサルバドルの愛国者が何千人も死んだと陳述した。

アフガニスタンの12歳のアブドラ・サビル少年はカブールで反革命暴徒が撒いた米国製万年筆を拾いあげた。その万年筆には爆発物が詰まっていた。アブドラは爆発のために両手とも手首から先を吹き飛ばされた。彼は帝国主義の犠牲者として、またその生き証人として帝国主義弾劾法廷の審理に招かれたのである。この少年が判事や記者たちに、手首から先がなくなった両手を見せたとき、法廷にいた人たちはぞっとなって、シーンと静まりかえった。「子供がひどい目に会うのは他人事ではない」ことがまたもや確認されたのである。

犠牲となる国に違いはあるが、こうした犯罪をおかす手はただ一つ、それは帝国主義の凶手だ。全世界の青年は自分たちの主な敵が誰かということに一点の疑いも残していない。これこそ、夏のモスクワでの8日間が、すべての大陸の青年男女が帝国主義に反対するために連帯していることを果てしなく誇示する舞台となった理由なのだ。一例を挙げれば、イズマイロボ公園のキューバ代表のクラブでの一夜は忘れようとしても忘れることができない。その夜超満員のホールの舞台に、米国の青年祭準備全国委員会の代表委員ジェームズ・スチール氏が登壇し、高く拳を振り上げて、米国の若者を代表したあたかも誓いの言葉のように「われわれはキューバと戦わない。ニカラグアとも戦わない。われわれはソ連と戦わない」と言ったが、その場にいた数百人の出席者は、自分たち青年の全世界にまたがる友好的団結感を味わって、嵐のような拍手を爆発させた。

モスクワでの交歓

世界中の遠い国から、また近い国からモスクワへやってきた青年の代表たちは、ソ連に関する真実を国への土産としてモスクワから去って行った。第12回世界青年学生祭のおかげで、青年たちは世界最初の社会主義の国で達成されたものを自分の目で見、ソ連共産党の平和愛好的外交政策の目的や、ソビエト社会の経済、社会面での大きな変革について直接の情報を得る機会に恵まれたのであった。

青年学生祭のメーン・イベントの一つとなった「ソ連デー」は、新しい社会をつくりだすうえで、青年が果たした役割について多くの人の目を開いた。ソ連は青年の国なのだ。なにしろ、30歳以下の者が全人口の約半分を占めている。最高立法機関であるソ連最高会議の代議員総数の22%は青年である。国民経済面で働いている若い労働者、エンジニア、コルホーズ農民、事務職員は三五〇〇万人いる。ソ連の青年はほかの社会主義国の青年たちと手をたずさえて、反帝連帯、平和、友好のための闘いの先頭を進んでいる。

ソビエトの歌で三〇年代から愛唱されている有名な歌がある。その歌詞に「モスクワで会った友だちを忘れられない」というくだりがある。この文句の正しさがこんどの祭典でもう一度確かめられた。モスクワの通りでも公園でもクラブでも至るところで、地球上のいろいろな場所からやってきた若い男女が微笑と記念品と住所を交換したり、言葉のちがいを乗り越え手ぶり足ぶりでにぎやかに話し合っている姿が見られた。

「ぼくの国、フランスでは周りの人間にもっと冷淡ですよ。まあ、誰でも内向的な人間になり、ストレスに苦しんでいますね」――こう言ったのはフランスの労組運動の活動家シルビオ・デ・ジャサント氏。「モスクワでぼくが見たものは、ぼくの心にたいへんな情熱を注いでくれました。親しみを込めてしっかり握り合わされた何千もの手！　相互理解の空気！　一つになった共通の目的！　国へ戻ったら、この感じを友だちに伝えてやりますよ」

◇　◇　◇

こうして、第12回世界青年学生祭は終わった。だが、この祭典に終止符を打つのはまだ早い。1年たち、2年、3年が過ぎても、モスクワ青年学生祭の新鮮な風は、全世界の若い世代にフェスティバルの理想の若々しい力を贈り続けるだろう。救い出された平和、それこそ一九八五年の夏モスクワに集まったすべての若者の夢の実現となるだろう。

世界の青年、学生へのアピール

親愛な友人の皆さん！

一九八五年7月27日から8月3日までソ連の首都モスクワで「反帝連帯、平和と友好をめざして！」をスローガンに開かれた第12回世界青年学生祭の代表一同は皆さんに呼びかける。

互いをより身近に知り、よりよく理解し、現代の最も緊要な問題を解決するために各国民の若い世代が担っている使命をともに考えようという意欲が、世界一五七カ国と西ベルリンから政治的・哲学的・宗教的見解を異にする二万人余りの若い人々を祭典フォーラムに参加させた導きの理念となった。

これほど大きなフォーラムでは当然の、個々の問題に関する見解や意見の相違は、われわれが祭典期間中に、今日若い世代の広範な民主的で進歩的な平和を愛する勢力の協力と共同行動の基本となる最も重要なこと――平和と自由のもとで暮らすという各人の奪うことのできない権利をあらゆる場所で実現することをめざす闘争に結集するのを妨げはしなかった。

40年前、自由を愛する諸国民は統一した努力によってヒトラー・ファシズムに対する勝利を収めた。隷属に対して自由が、圧制に対して民主主義が、野蛮さに対してヒューマニズムが収めたこの偉大な勝利のために恐ろしい犠牲が払われた。祭典でわれわれは諸国民を隷属化から解放したすべての勢力――ヒトラー・ファシズムの粉砕にすぐれた貢献を加えたソ連国民、その他の反ヒトラー連合諸国の国民、パルチザン、レジスタンス運動の戦士、反ファシズムの闘士、民主主義者、戦場でたおれた何百万人もの自由の戦士、拷問室や強制収容所の中や、町や村の廃虚の下で死んだすべての人々の輝かしい記憶と不滅の偉業をたたえた。

第2次世界大戦の悲劇的教訓は、今日と明日の世界の運命に対して少なからぬ責任を双肩に担っている時代の若い世代に戦争が始まる前に戦争に反対する断固たる闘争を義務づけている。

だからこそわれわれは、政治、哲学、宗教上の信条にかかわりなくすべての国の若者たちに対し、軍国主義と侵略の勢力を阻止し、力を合わせて破局を防止し、地上での核軍備、通常軍備の拡張競争に終止符を打ち、その宇宙空間での開始を容認せず、核その他の種類の大量殺りく兵器の全面禁止と廃絶を達成するために全力を尽くすよう呼びかける。

今年40周年を迎えた広島と長崎の悲劇が繰り返されてはならない！

欧州安全協力会議の成功裏の終了の10周年の今年、われわれは祭典の演壇から、その最終文書、それに盛り込まれた国家間関係の原則の精神と字句に対するわれわれの忠誠や、そのすべての条項の実現、デタント政策の復活、体制の異なる国同士の互恵の協力の確立に貢献しようというわれわれの意欲を改めて確認する。

われわれは、すべての係争問題を交渉のテーブルに就いて平和的に解決することを支持し、必ず緊張と紛争につながらずにはおかない不公正と暴力のないもっと公正で人道的な国際関係システムを支持している。ここでは非同盟運動も肯定的な役割を果たしている。

第12回世界青年学生祭は、中南米、カリブ海、アジア、アフリカ、とくにアフリカ南部、地中海、中東の諸国民や青年学生をはじめとして、諸国民の自由と独立、主権、自決権、自分たちの運命を自分たちで決める権利の侵害に反対し、植民地主義や拡張主義の遺物に反対し、アパルトヘイトやあらゆる形態の人種主義と人種差別、ファシズム・独裁体制に反対してたたかうすべての人々との大きな反帝連帯の明確な意志表示の場となった。

われわれは、経済的立ち後れの克服、真の経済的独立、新植民地主義的搾取と支配と抑圧の停止、それらに関連する低開発諸国の支払い不能な対外債務の問題の解決、新しい国際経済秩序の確立を求めている。

われわれは、先進諸国と発展途上諸国が平等の原則にもとづいて自分たちの協同行動を根本的に改善し、それによっていまある紛争の緩和と、環境保護、飢えや病気の撲滅、文盲の根絶といった最も切実な社会、経済、エコロジーその他の現代世界のグローバルな問題のすみやかな解決を促進するべきだ、と考える。

国際連合創立40周年の今年、われわれはその目的と原則に忠実であることを確認する。

「参加、開発、平和」のスローガンを掲げて国連が宣言した国際青年年は、国際世論の関心を若い世代のニーズや問題、期待に引きつけることができた。

われわれは、若者たちにはよりよい未来があり得るし、あるはずだと確信する。それを達成するためにわれわれは、各人が明日への確信や、仕事と人間らしい生活の権利、普通・職業教育を受け、国家と社会の管理に参加する権利、社会的、経済的、政治的、市民的基本権と人権を実現する可能性をもつことをめざして共同で努力する必要がある。

われわれは8日間ソ連の若者と国民の客だった。われわれは彼らが祭典開催のためにつくり出したすばらしい条件に心からの感謝の念を表明し、ソ連の人々の温かい好意や善意、連帯、友好についての最良の思い出をいだいて第12回世界祭典の首都を立ち去る。

参加者の幅広さで比類のない第12回世界青年学生祭は、接触・交流を発展させ、平和や軍縮、諸国民間の新たな友好協力関係のための自由と公正をめざす共同行動を支持するさまざまな政治的見解をもつ全世界の若者たちの共通の意欲を示した。

反帝連帯、平和と友好万歳！

新たな祭典で会おう！

モスクワ、一九八五年8月3日

世界各国の国会議員に対するソ連国会議員グループの呼びかけ

(一九八五年8月20日)

続行される核軍拡競争を深く憂慮して、ソ連国会議員グループは他の諸国の国会議員に対し、核兵器のこれ以上の増強とその改良を停止させるために積極的に行動するよう呼びかける。

周知のように、M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、本年8月6日からあらゆる核爆発を一方的に停止するむねのソ連の決定を明らかにした。このモラトリアムは本年末まで実施されるが、もし米国側も核爆発の実施を差し控えるなら、その後も効力を保つだろう。

ソ連のこの思い切った決定には、平和をめざすソ連国民の意思、実際の行動によって核の脅威を減らし、ひいては、核兵器を完全にあらゆる場所で廃絶することに協力しようとの決意が表明されている。

核爆発の一方的モラトリアムを実施することによって、ソ連は真っ先に実際的な一歩を踏み出した。米国が同様の挙に出るならば、双務的なモラトリアムが確立され、他の核保有諸国にとっても見習うべき手本となりうるだろう。

核兵器実験の完全全面停止が今日、特に緊要なものとなっていることは明らかである。これらの実験は、次々に新しい型の核軍備を開発し、すでに存在するものを改良するために実施されているものだからである。実験が行われなくなれば、核軍拡競争にブレーキがかかり、やがてこの競争はそもそも不可能となるだろう。

核軍拡競争は世界文明全体の将来にとって絶大な危険をはらんでいる。それは国際緊張と戦争の脅威の増大をもたらし、膨大な知的、物的資源を創造的な目的から引き離している。

このゆえに核実験の禁止は、すべての国家、すべての国民の利益に関わる問題である。この問題での立場は、諸国家の意図、その政策の方向を示す指標でもある。ここでは何人も傍観者であってはならない。

核保有国であると非核保有国であるとを問わず、大国であると小国であるとを問わず、すべての国の国会議員の責務は、核兵器実験の続行に反対する明確な立場に立つことである。広島と長崎の悲劇を銘記して、国会議員は原子の灰が二度とわれわれの大地に積もることのないようにするためにも力を合わせなければならない。

この呼びかけを行うにあたり、ソ連国会議員グループは、すべての国の国会議員が核兵器実験の完全全面禁止を断固主張し、この目的をめざす措置を支持されることを期待する。

ソ連国会議員グループ

モスクワ、一九八五年8月20日

ソ連共産党第27回大会に向けて

経済と科学技術進歩の諸問題に関するソ連の新聞論調

経済効率の向上と科学技術進歩の促進は、いまソ連の新聞論説の中心テーマの一つである。来年2月に開かれるソ連共産党第27回大会の準備が進められ、一九八六—九〇年度と二〇〇〇年までの期間のソ連の社会・経済的発展の基本方向が策定されているいま、新聞は国民経済の改善の道と方法の論議をとくに重視している。

戦前、戦後にソ連につくられた経済メカニズムのおかげで、ソ連は世界最大級の工業国になり、一九二〇年代に1%であった世界の工業生産高に占める比率は、八〇年代には20%に上がった。しかし、経済機構は不変の固定したものでありえないし、必ず条件や要求の変化、社会の高まりゆく要求に応じて変わらねばならない。ソ連経済は、生産手段の社会的所有、経済の計画化、恐慌がないこと、完全雇用、決定的な部署に資源を集中できることなどの根本原則を堅持しつつ、いま質的改善の段階を歩んでいる。

経済発展の最も重要なテコの一つは、科学技術進歩のテンポの促進であり、この問題はさる6月の党中央委員会の会議で取り上げられた。

プラウダ紙はこれと関連する「主張」を載せ、ミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は会議の報告の中で「科学技術進歩に基づいてソ連の社会・経済発展を促進する必要性と可能性」を示したと、指摘している。「問題は単に国民経済の成長率を引き上げることではなく、われわれの発展の新しい質、戦略的に重要な方向での急速な前進、生産構造の組み替え、集約化への転換、経済機構や管理システム全体のつっこんだ改組が問題なのである」

イズベスチヤ紙の「主張」は、科学技術の進歩を促進するには「新しい機械、技術あるいは新しい生産管理形態を採用するだけでよいと考えているとすればまちがいだ。社会的課題を達成することや生産参加者全員の心理の切り替えも大事である」と指摘している。「人間的要因」こそ活動全体の決定的要因である、と「主張」は強調している。

ソビエト・ロシア紙の論説は「ソ連経済の成果は、社会主義とその計画経済の優越性をはっきり示したものである。しかし、われわれは膨大な可能性を持ってはいるが、それらを十分に使いこなしているとはまだ言えない」と述べ、現在の条件下でとくに大きな意義をもっているのは、上部から始まる全管理体制の改善であると書いている。問題は、とくにゴスプラン(国家計画委員会)、省などの管理機関が技術政策の長期計画の立案と作成に力を注ぐ一方、企業と生産合同が日常の仕事や技術的近代化と従業員に対する刺激のための資金の使用などで、十分に自主性を発揮できるようにすることである。

ソ連の新聞は科学と生産における労働報酬および刺激システム全体の改善に注目している。たとえば労組の中央紙トルードは、現段階ではとくに技術・科学要員の役割が高まっていると書いている。いま技術労働の報酬水準を、技術労働の成果の程度に応じて引き上げる措置が定められている。しかしこの面でまだやるべきことは沢山ある。またトルード紙は、ソ連の科学技術進歩は、何百万という人々が取り組んでいる技術創作活動のように大衆的基盤をもっていると指摘し、発明家と合理化運動家の仕事をもっと積極的に支援し、最も有用な新技術を選ぶ形態を見付け、それらの新しい技術をいち早く実用化しなければならない、と述べている。

各紙とも、現在および将来、成長率と投資の面で最優先の扱いを受けるのは、科学技術革命のカギを握る機械工業部門でなければならないと強調している。

社会主義工業紙は次のように述べている。「機械工業従業員は、労働生産性を数倍に引き上げ、生産過程のすべての段階の自動化への道を開くことのできる新世代の機械を大量生産する態勢を整えなければならない。この課題が首尾よく解決されるかどうかは、マイクロ電子工業、計算機工業、計装工業、情報産業全体の発達の促進いかんに大きくかかっている」

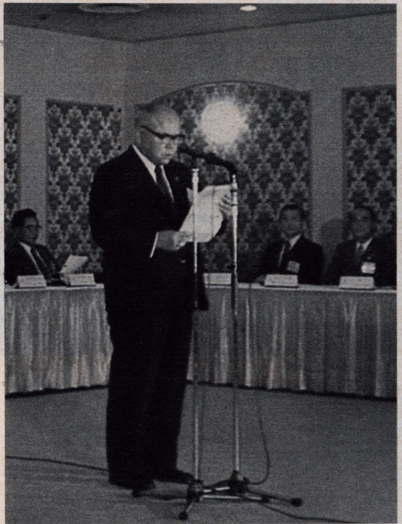
イズベスチヤ紙は、技術進歩の戦略を左右する企業、生産施設の仕事の例を挙げ、とくにことしの初めからモスクワの工作機械工場「赤いプロレタリア」で始まった産業用ロボットの自動化生産を紹介している。この工場のロボットの年間生産予定台数は六〇〇〇台である。また同紙は、ソ連の工業と科学技術は世界市場での競争力を高める可能性を実際にもっていると指摘している。このことはパリ航空ショーにおけるソ連の航空機工業の最近の成功が裏書きしている。航空ショーで公開された世界最大のソ連の輸送機AN—二四(前号で紹介)へリコプターMI26は、専門家の注目を集めた。

各紙は、ソ連の産業建設の壮大な規模を指摘すると同時に、建設計画や投資政策の重点を企業の新設から既設企業の根本的な近代化へ切り替えることの重要性を強調している。経済新聞が指摘しているとおり、近年中に投資総額中の改装費の割合を投資総額の$\frac{1}{3}$から少なくとも半分にまで増やす必要がある。これは経済を発展の粗放的な道から集約的な道に移す重要な手段である。また原料資源の採取と消費のような重要分野でも、集約的な方法が主体にならなければならない。いまソ連の原料採取の規模はきわめて大きい。さらに規模を大きくするには、今までよりももっと支出を増やさねばならない。何分いま開発されている原料資源は、ソ連の遠隔の人里離れた地区にあるからだ。さていま肝心なのは、資源を節約する製造技術を広く採用し、二次資源を生かすことである。こうすれば、社会の燃料、原料、資材の需要を75—80%増やすことができよう。

各紙が強調しているとおり、現在行われている意見の交換や成功と未解決の問題の分析は、来年初めのソ連共産党第27回大会の綱領的文書、まず次期5カ年計画と二〇〇〇年までの国の社会・経済的発展の基本方向に、国民経済の高率の急上昇とソビエト経済の集約化への転換を確保する体制を定めるのに役立つだろう。

第10回日ソ沿岸市長会議開催

8月25、26の両日、新潟市で第10回日ソ沿岸市長会議が開かれた。以下はこの会議で採択されたコミュニケと、パンチェンコ・ソ連代表団長（ハバロフスク市長）へのインタビュー。



コミュニケを読み上げる金澤忠雄・山形市長



第10回日ソ沿岸市長会議の会議風景 ▶

第10回日ソ沿岸市長会議コミュニケ

日ソ沿岸市長会の招待により、一九八五年8月23日から30日まで、A・S・パンチェンコ・ハバロフスク市執行委員会議長を団長とするソ連東シベリア・極東の市執行委員会議長代表団が日本に滞在した。

新潟市において、記念すべき第10回日ソ沿岸市長会議が開催された。

会議には、日本側から、稚内市長浜森辰雄、釧路市助役坂本　茂、青森市長工藤　正、秋田市長高田景次、男鹿市助役船木通春、本荘市長小番宜一、山形市長金澤忠雄、酒田市長相馬大作、新潟市長若杉元喜、豊栄市長石井耕一、柏崎市長今井哲夫、上越市助役佐藤英一、富山市商工労働部長竹林五郎、新湊市長渡辺一雄、高岡市商工労働部長密田　宏、金沢市長江川　昇、七尾市助役川尻久雄、福井市長大武幸夫、敦賀市長高木孝一、舞鶴市長町井正登、ソ連東欧貿易会調査部長小川和男が、ソ連側からハバロフスク市執行委員会議長A・S・パンチェンコ、ウランウデ市執行委員会議長V・K・アガロフ、イルクーツク市執行委員会議長Y・A・シクロパト、ユジノサハリンスク市執行委員会議長O・N・チュブコフ、ブラーツク市執行委員会議長T・T・セレブリャコフ、ジェレズノゴルスク・イリムスキー市執行委員会議長V・I・ビノクロフ、ナホトカ市執行委員会議長A・A・トカチョフ、ネベリスク市執行委員会議長K・V・アルヒポフ、ポロナイスク市執行委員会議長A・N・ラチロフ、ホルムスク市執行委員会議長A・A・メドベーデフ、シェレホフ市執行委員会副議長A・N・カラシ、ロシア連邦共和国閣僚会議副部長A・A・スミルノフ、ロシア連邦共和国外務省参事官Y・A・シャチーロフ、ハバロフスク地方執行委員会副議長P・L・モロゾフ、ソ連外国貿易省極東全権I・N・スハチョフ、ソ日協会事務局長A・I・コロマクが参加した。

友好・相互理解そして実務的な雰囲気のもとに行われた会議では、日ソ両国都市間の友好・文化関係の発展、両地域の経済協力、とりわけバイカル・アムール鉄道の経済協力の拡大のために果たす役割、そして都市と青年についてが審議された。

会議参加者は、日ソ両国都市間の全般的な友好協力の発展、日ソ両国間の善隣関係の強化は、両国民の長期的・基本的利益にかない、現実に極東地域の信頼と善意、そしてこの地域の平和と安全を確立することを促すとの意見の一致を見た。

両地域間の交流の中で、日ソ両国の年毎に強化・発展している伝統的な姉妹都市交流が、全体として、日ソ両国都市間の相互交流を拡大するため良き基礎を作り上げることで特別な意味を持つものであることが、強調された。

日ソ両国都市の代表は、日本の日本海沿岸地域とソ連の東シベリア・極東地域との間の経済関係、なかんずく沿岸貿易の一層の発展の重要性を強調した。

バイカル・アムール鉄道の操業が、日ソ間の実務的協力と交通網の拡大を活発化させるため大きな可能性を持っていることが指摘された。

都市の代表は、都市の発展と双方の関係を一層拡大するために青年の役割を高めるための条件作りが重要であると意見の一致をみた。

会議参加者は、日ソ沿岸市長会と全ソ対外都市交流協会との間の関係強化と交流を実現していくことは、有益であると認めた。

日ソ両国都市の代表は、日本海に面する両地域間の友好関係の強化が極東と全世界の平和を保障することを促すとの確信を表明した。

ソ連側代表団は日本において示された暖かい友好的な歓迎に感謝の意を表した。

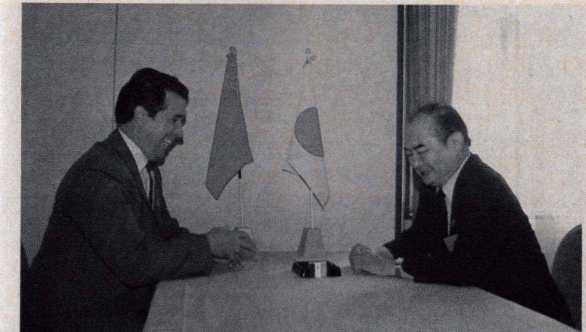
記念すべき第10回会議の参加者は、日ソ両国都市間の全般的な友好関係が、この会議の第1回会議以降15年間にわたって著しく拡大・強化されたとの意見の一致をみた。

双方は、日ソ両国都市間の関係を発展させるため、同会議が有益かつ必要であることを認め、第11回会議を一九八七年にソ連邦において開催することに同意した。

一九八五年8月26日、新潟市



共同コミュニケを交換するA・パンチェンコ・ハバロフスク市長と若杉元喜・新潟市長



▲A・トカチョフ・ナホトカ市長と町井正登・舞鶴市長



Y・シクロパト・イルクーツク市長と江川昇・金沢市長



K・アルヒポフ・ネベリスク市長と浜森辰雄・稚内市長

A・パンチェンコ・ソ連代表団長に聞く



第10回日ソ沿岸市長会議に出席するため来日し、8月23日から30日まで滞在したソ連代表団の団長、A・パンチェンコ・ハバロフスク市執行委員会議長（市長、写真）に、帰国を前にM・エフィーモフ本誌記者がインタビューした。

——ハバロフスクでは善隣をめざす運動はどう発展しているかお話し願いたい。

ハバロフスクは日本との善隣関係の確立をめざす運動のパイオニア的存在だ、とわれわれは正当に考えている。一九七〇年にわが市で、東シベリアとソ連極東の諸都市の執行委員会議長（市長）と日本の日本海沿岸諸都市の市長が会談するという、すばらしい伝統の基礎が置かれた。現在、ソ連極東の18の都市が日本の20の都市と友好関係を維持している。今回の日ソ沿岸市長会議は第10回目に当たる記念すべきものだった。われわれはそれが、地域レベルにおける友好関係の発展にとって大きな意義を持っただけでなく、ソ日関係全体の空気に好ましい影響を与えるものと期待している。

——ハバロフスクの平和運動はどう行われているか？

わが市民は戦争とは何かをよく知っている。少し前われわれは、ドイツ・ファシズムと日本軍国主義との闘争に命を捧げた一万五〇〇〇人のハバロフスク市民の記念碑を除幕した。

平和をめざす闘争にはさまざまな形態がある。その一つはソ連平和基金への自発的な寄付だ。ハバロフスク地方の勤労者だけでも、毎年この基金に約二〇〇万ルーブル納めている。今年の4月にハバロフスクを訪れた日本の平和運動家たちが総額一〇〇万円を寄付したことを指摘しておく必要がある。

今年の5月にはハバロフスクで平和行進が行われ、これに日本の平和運動家たちが初めて参加した。この9月にはハバロフスクで、日本軍国主義の壊滅をテーマにしたアジア・太平洋諸国国際会議が開かれる。これには日本を含む30カ国の代表が参加する。過去の教訓を覚えていることは、そのくり返しを許さないことを意味する。戦争の脅威に対しては、それが迫る前に断固闘わなければならない。

——ハバロフスクは新潟の姉妹都市だが、両都市間の交流はどのように発展しているか？



第10回日ソ沿岸市長会議参加者全員の記念撮影

われわれは定期的に代表団を交換している。相互の利益が、さまざまな年齢や職業のより広範な人々を交流に引き入れることを可能にしている、ということをぜひ指摘しておきたい。芸術家集団、スポーツマンや学童、子どものグループが親善訪問旅行に参加することがよい伝統になっている。展覧会、写真、映画など、さまざまな交換が行われている。

今年、ハバロフスクと新潟で姉妹都市提携20周年が祝われた。わが市ではソ日協会の団体会員である企業の力で、たくさんの行事が行われた。行事には新潟からのお客さんも参加した。

——実務的関係はどう発展しているか？

この3年間にハバロフスク商工会議所で日本の実業界や民間団体の代表との会談が一八六回行われた。これらの会談ではバム鉄道の建設終了と今後の経済関係の展望に関連して、協力の新しい形態を探る問題が討議された。

そのほか、ハバロフスクで漁業分野の専門家の会議を開くことで合意が達成された。そこではサケマス資源の状態と太平洋北西部でのサケマス漁操業可能水域の問題が話し合われる。

——ソ連と日本の諸都市間の友好関係がいっそう活発になる可能性はどうか？

企業や学校でソ連の市民と日本の市民の会合をもっと数多く組織する必要があると思う。われわれは写真展や児童画展の交換を組織するよう提案した。子どもたちをもっとたくさん休暇に受け入れる必要がある。この意味で私は、衆議院議員で新潟県日ソ親善協会幹事長の関山信之氏の「子どもはわれわれの未来である。幼時からソ連国民に対する関心を呼び起こすことによって、われわれは両国間の友好の絆を強化している」という言葉を熱烈に支持する。

残念ながら、いまのところハバロフスクと新潟の4組の集団しか姉妹関係を結んでいない。ハバロフスク・ピオネール宮殿の〝幸福な幼年時代〟アンサンブルと新潟バレエスクール、ハバロフスク第51中等学校と赤塚小学校、第34中等学校と白新小学校、第13中等学校と白山小学校である。このような例がもっと増えることを望みたい。

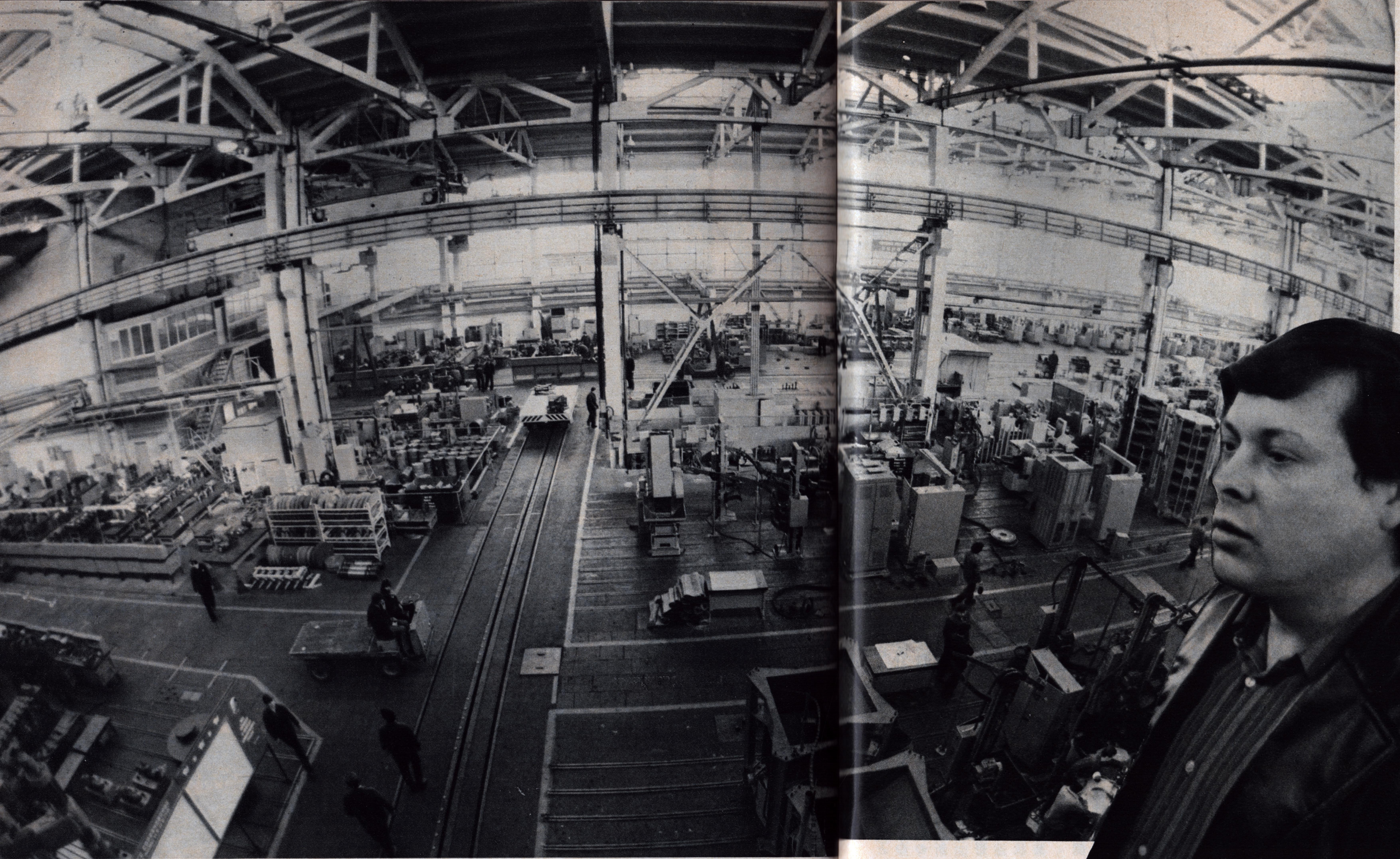
——今回の日ソ沿岸市長会議の結果をどう評価するか？

ソ連代表団は満足している。日程に掲げられていたすべての問題を審議することができた。関係を強化、発展させようということでわれわれは一致した。われわれ代表団一同は祖国へ帰ったら、共同コミュニケに盛り込まれた決定を実行するために努力する。そのほか、参加者は発言の中で、多くの興味深い考えや提案を述べた。それらを全面的に研究する必要がある。全体としては、第10回日ソ沿岸市長会議は最も盛大なものだったと言いたい。この会議で初めて、経済の重要な諸問題が討議された。私個人としては、都市と青年の位置づけの問題がいちばん興味深く、気に入った。このテーマは日本側から提起されたものだ。

——ハバロフスクで第1回日ソ沿岸市長会議が開かれてから15年たった。この期間の成果をどう評価するか？個人的には満足しているか？

15年間にわれわれの関係は文句なく強まった。会議の参加者もほぼ4倍に増えた。私が〝友好の空の架け橋〟と呼んでいるハバロフスク—新潟間定期航空路も順調に機能している。発展している協力の例はほかにもたくさん挙げることができる。だが私には、われわれは可能性を十分に汲み尽くしていないように思われる。全ソ対外都市交流協会ハバロフスク支部と日ソ沿岸市長会の交流を強化し、あらゆる方向での関係を発展させることから始める必要がある。地理的条件そのものがわれわれに融和と善隣のもとで暮らすことを要求している。日本のことわざも言っている——遠くの親類より近くの他人、と。

普通の労働者から職区長に




ユーリー・ソーシンは37歳のごく普通の労働者。すでに20年間モスクワの"スタンコリーニア"工場で働いている。ソ連にはユーリーのような労働者は何百万人もいる。現代の世代の典型とも言える。

ユーリーは職業技術学校を卒業して、この工場へやって来た。職業技術学校では旋盤を学んだが、スタンコリーニア工場では仕上げ・組立て工になった。当時この工場はNC（数値制御）工作機械の生産体制に入ったばかりで、ユーリーはこの新しい仕事に参加したかったからである。

旋盤工としては高い技能資格を持つユーリーも、組立て職場では、文字通りゼロから

▲ユーリー・ソーシン（右）が職区長として働いている組み立て職場。ソ連や外国の重機工場用の工作機械を製作している。



44人の部下を指導する職区長はあらゆる問題に通じていなければならない。

始めなければならなかった。知らないこと、できないことはすべてマスターしようとした。いまユーリーは三つの技能資格を持っている——仕上げ・調整工、仕上げ・組立て工、機械組立て・仕上げ工である。彼はあらゆる工作機械を組み立て、調整、修理することができる。

ユーリーは工場に来て2年目に、新型工作機械の設計ミスを発見した。設計者は長い間ユーリーの主張を認めなかった。職業技術学校を出たばかりの若い労働者ユーリーは頑張って、ついに設計者を説得した。

仕事は忙しかった。交替時間が終わって、次の交替時間が始まっていることに気がつかないこともしばしばだった。あるときユーリーは工場長に呼び出された。ユーリーが職区長に決まったことを伝えるためだった。それは責任ある仕事だった。何しろ44人の部下を指導することになったのだから。

それはうれしい知らせでもあり、不安な知らせでもあった。ユーリーは中等専門教育も高等教育も受けていない。のちに、それが杞憂ではなかったことを納得した。しばしば知識が不足したからである。独学で知識を身につけようとしたが、体系立ったものではなかった。そこで機械工業中等専門学校へ入学することに決めた。学校は工場から歩いて5分のところにあった。もちろん、昼働いて夜学ぶのは楽ではなかった。

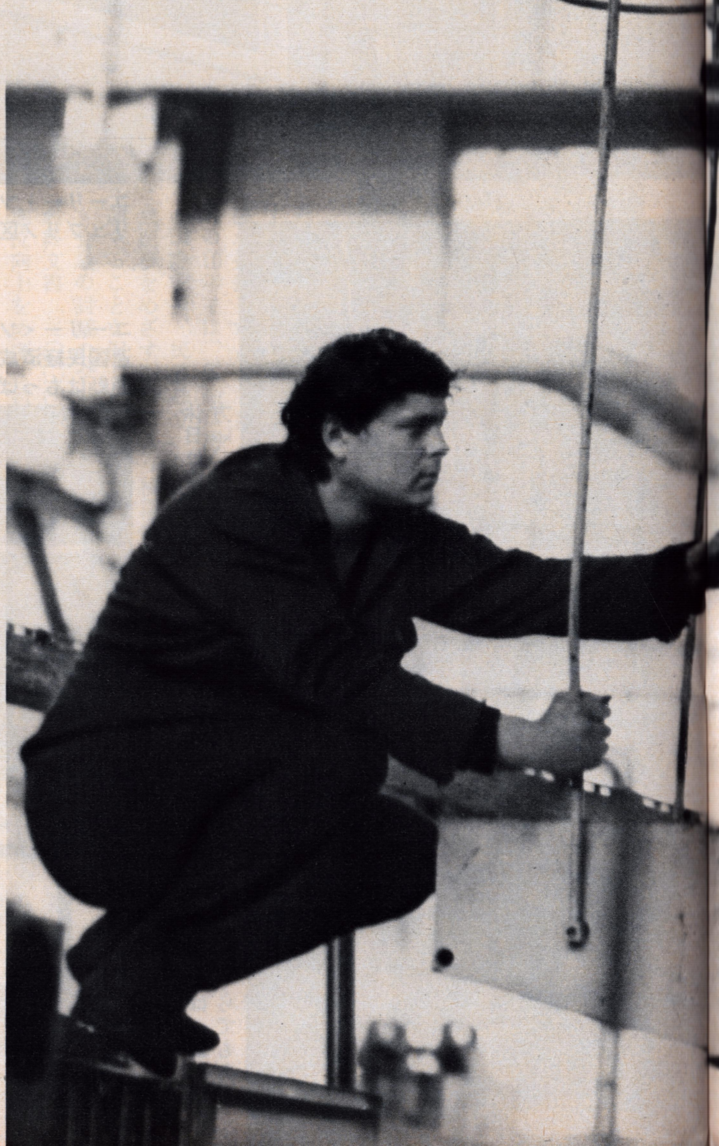
ユーリーの賃金は悪くない。月額一八〇ルーブル。それに製品引き渡しのプレミアムが毎月平均一〇〇—一五〇ルーブル、さらにいわゆる累進割増——計画の超過達成に対する奨励金（平均して賃金の約34%）が追加される。こうして、全国の平均賃金の2倍以上の約四〇〇ルーブルが手に入る。

ユーリーの妻は仕事に出ないで家庭で2人の子どもの面倒を見ているが、ユーリーの賃金だけで十分にやって行ける。5年前に2番目の娘が生まれたあと、ユーリーは工場の労働組合委員会に、もっと広い住宅を提供してくれるよう申請を出した。半年後、彼には二つの案が提示された。彼はその一方を選び、現在、74平方mの3部屋のフラットに住んでいる。

いまユーリーは以前どおり、非常に重要な職区の長として働いている。その目ざましい仕事ぶりに対して、彼は政府の賞——3級労働栄誉勲章を授与された。



◀注文主の要求を全部実現するためには、しばしば職区長が直接に断を下さなければならないようなさまざまな問題が生じる。




▶稼働中のラインの調整にはしばしばアクロバット的な仕事が要求される。

←



ユーリー・ソーシンの家族が住んでいるフラットがあるモスクワ市リュブリノ区のアパート



休日は家族や友人と一緒に森へ行くのが最高。モスクワには一四二平方km、市域の17%の緑地があるので、森はすぐ近くにいくらでもある。



ユーリー・ソーシンは工場での積極的な合理化推進運動に対してソ連国民経済成果博の本部委員会から贈られた乗用車を持っているが、通勤はもっぱら徒歩。



国際婦人運動の大きな成果

――ナイロビの世界婦人会議に出席して

ソ連宇宙飛行士
ソ連婦人委員会議長　ワレンチナ・テレシコワ

ケニアの首都ナイロビでこの7月に行われた世界婦人会議は、国際生活の重要な出来事であった。一九七五年に国連が宣言した「国連婦人の10年」の成果を総括するこの会議には、一五七ヵ国の代表団、民族解放運動と多くの国際組織の代表が参加した。

会議で強調されたように「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の作成と締結は、「婦人の10年」の重要な成果であった。一九八五年の7月までにこの条約の加盟国は70ヵ国以上にもなった。同時に注目すべきことは、婦人の同権の保障に関する（法律も含めた）実効ある措置を当然とらなければならない条約加盟国の中に、口先ではひじょうに熱心に人権を擁護する米国や他の若干の国々が入っていないことである。また、これに関連して思い出さないわけにはいかないのは、米国では憲法に男女同権を保障する修正条項がいまだに加えられていないことである。

「婦人の10年」の期間に作成された極めて重要な国際文書としては、一九八二年の第37回国連総会で採択された「国際平和・協力促進事業への婦人の参加に関する宣言」がある。この宣言には、平和擁護・軍拡競争反対の闘いにおける婦人のたえず高まりつつある役割への理解、基本的な政治・社会問題の解決の客観的な必要性への理解が反映されている。

ナイロビ会議の全体討議では、ある社会で婦人の諸権利が保障されうるのは、その社会がすべての成員に基本的な諸権利、まず何よりも生活権を保障できる場合だけであるという意見に関心が集まった。また平和、核戦争の脅威の防止、地上の軍拡競争の停止、軍拡競争を宇宙へ広げないことを訴える呼びかけ、アパルトヘイト（人種隔離政策）と人種差別主義に反対し、公平な基盤に立った国際経済関係の再構築をめざして闘おうというアピールが会議の壇上から響きわたった。

すべての大陸の代表たちは今日、「国連婦人の10年」のスローガンである〝平等、発展、平和〟の実現を妨げる主な障害が、人類を核破局の瀬戸際に押しやっている帝国主義層の政策であることを知っている。こうした状況下にあって、婦人の関心を引きつけているすべての問題の中で主要な課題となっているのは、核戦争の脅威を阻止することである。会議での発言の大多数が指摘したことであるが、「国連婦人の10年」は、広範な層の婦人が平和と国際安全、民族独立、民主主義と社会進歩をめざす闘争により積極的に参加することを促した。

会議の討議の全過程を見ても、また最終文書「二〇〇〇年に向けた婦人の地位向上をめざす将来戦略」の作成作業を見てもはっきりと分かる通り、この会議を非政治化しようとする米国の試みは失敗に終わった。米国はシオニズム擁護を試み、さらに米国代表団（事実上、一カ国だけ）は「将来戦略」の中にアパルトヘイトとの闘争、南アフリカ共和国に対する経済制裁の適用、イスラエルに占領されているアラブ領土におけるパレスチナの婦人・子供の状態について触れた章を入れることに反対した。このことは会議参加者の大きな怒りをかった。米国とそれに最も近い同盟諸国の代表団は完全に孤立し、そのため彼らは票決ぬきで文書全体を支持せざるを得なくなった。

会議が「将来戦略」を採択したことは国際婦人運動とこの分野における国連の全活動の大きな成果である。この文書は内容の深さと多面性ですぐれている。その中では特に、一九七五年のメキシコと中間年のコペンハーゲンの二つの会議で採択された決議の継承性が強調され、平等、発展、平和という三位一体のすべての成分の切り離せない関係が確認された。

ナイロビでは国連の世界婦人会議と平行して、ソ連婦人委員会など一万五〇〇〇の国際、地域、各国の婦人団体の代表が参加して非政府組織の会議〝フォーラム'85〟も開かれた。フォーラムでもやはり、女性の地位問題の政治的重要性を低めようとする試みがなされたが、議論が集中したのは反帝・反植民地主義闘争、あらゆる形態の迫害・人種差別反対闘争、緊張緩和と平和をめざす闘いなど現代の最重要の諸問題だった。

ナイロビの世界婦人会議とフォーラム'85の開催、その活動の全過程と性格は、婦人の地位向上と真の同権をめざす運動が新段階に入ったこと、世界の婦人が平等、発展、平和という崇高な目的を達成する上でますます高まる役割を果たしていることを示している。



砲声の止んだしばしの時間を利用して、慰問に来たアーチストの歌を聴く兵士たち。

大祖国戦争中の文化人

本誌記者 エカテリーナ・タラソワ

地上に武器の音が鳴り響く時、ミューズは沈黙す、と古代ローマ人は断言していた。実際、大砲が撃たれ、血が流れる時、優しく繊細なミューズの女神たちが、詩人やアーチストに霊感を与えることができるだろうか？

この問いに対する完全な答えが出されたのは20世紀半ばのことである。

さまざまな戦争がある。老若の別なく国民全体が自分の祖国を守る戦いに立ち上がる時、戦争は聖なる、正義の、祖国戦争と呼ばれる。勝利のために貢献する――これは誠実な市民ひとりひとりの義務である。ソ連国民の対ドイツ・ファシズム戦（一九四一－四五年）の最中、わが国の文化人、芸術家が〝沈黙〟せず、新たな強力な精神力を自分自身の中に見いだしたのもそのためである。彼らは祖国を解放するための戦いに持てる才能と創造力のすべてを注ぎ込んだ。

「国民の大部分を占める労働者、農民が自分たちの守っているのが自分たちのソビエト政権――勤労者の政権であり、自分たちの守っているのが、その勝利によって自分や自分らの子供たちに文化のすべての財貨、人間の労働のすべての創造物を利用できるようにしてくれる事業だということを知り、感じ、目のあたりに見ている――そういう国民を打ち負かすことは決してできない」――レーニンはこう語った。大祖国戦争の歴史は、ソビエト文化が社会主義革命の獲得物を守る事業において決定的要因の一つになり、反ファシズム闘争における国民の偉大な武器になったことを示した。

ソ連国民の大祖国戦争勝利40周年にあたり、編集部は日本の読者から、反ファシズム戦争におけるソビエト知識人の活動を紹介してほしいとの要望を受けた。このテーマは幅が広く、多様だ。最も興味深いと思われる若干の事実についてだけお話ししよう。



クラスナヤ・ズベズダ紙の特派員として活躍した作家イリヤ・エレンブルグ（ブリャンスク戦線、1943年）



戦場の陽気な踊りは、兵士たちに故郷の町や村の祭りを思い出させた……。



左 戦闘機のパイロットと語る作家アレクセイ・トルストイ（一九四三年）

大祖国戦争は直ちにソビエト知識人のいどころを、全国民あげての闘争の最先端に定めた。戦いがどこで行われようと、あらゆる大戦場において兵士と指揮官はしばしば、忠実なる仲間の兵士の隣に、カメラマン、記者、作家、画家、俳優の姿を認めた。自分自身の作品によって彼らは兵士とともに最も人道的な理想を守り、自分たちの祖国の大地を守り通したのである。

文学の能動的で人々を動員する役目、大衆に及ぼす影響は戦争中、はかり知れないほど増大した。戦列にあり、また銃後で働く人の中で、あらゆる困難と窮乏を分かちあいながら、ソビエトの作家たちは戦火の中から創造の力を汲み取った。戦争の真っ最中に、現在もなおその芸術的価値を失わず、真に世界的名声を得ている諸作品が書かれた。

侵略者との戦い、敵への憎悪は、最もアクチュアルなテーマの一つである。「われわれは一つの意志、一つの感情、

笑いは病を癒すというが、有名な道化師が医者の役を演じれば、傷の治りももっと早くなる（軍の病院で）。



一つの考え——死と隷属をもたらすヒトラーとその軍隊を破り、壊滅させること……に団結せねばならない」——ソ連の偉大な作家アレクセイ・トルストイ（一八八三—一九四五）はプラウダ紙にこう書いた。そのためには憎しみが、″魂をずたずたにしてしまう黒い憎悪ではなく、明るく、清らかな″憎しみが必要だ……と。

　戦争初期にいろいろな世代の詩人、ニコライ・チーホノフ、ミハイル・スベトロフ、アレクサンドル・トワルドフスキー、コンスタンチン・シーモノフ、エブゲニー・ドルマトフスキーその他が前線に向けて発った。彼らは軍や師団が発行する新聞の前線特派員になった。前線ルポや戦況報告と一緒に詩人たちの新作も編集部に送られて来た。戦う兵士の魂の繊細な理解力、共通の考え、心配、不安が詩人に、どの人の心にも一番必要で、一番近い言葉を見つけるのを助けた。戦時下の最初の冬、プラウダ紙に載った詩が全国に響きわたり、やがて戦線からの何百万もの兵士の手紙にこの、コンスタンチン・シーモノフの詩『おれを待っててくれ』が書き写されるようになった。

待っててくれ、おれは戻る、
すべての死に面当てに。
おれを待たなかったやつ、
そいつには″あの人、運がよかったのね″と言わせてやる。
待たなかったやつには分かるまい、
戦火の真っただ中で
おれを救ったのは、
待っていてくれるお前だったということを。

　愛についての、女性の操についてのこの数行が、死と向きあった人々にとって、戦死から身を守る魔除けのようなものになったのだった。

　きのうまでの作家、批評家たちが主要紙、タス通信、ソビエト情報局、ラジオの従軍報道員になった。その中にはイリヤ・エレンブルグ、ミハイル・ショーロホフ、コンスタンチン・フェージン、フセボロド・ビシネフスキーなど有名な作家もいた。アレクセイ・トルストイは新しい時評や戦況報告を携えて軍の新聞「クラスナヤ・ズベズダ」の編集局にちょくちょく足を運んだ。A・トルストイは同紙の依頼をいちいち戦闘命令のように聞き入れ、拒否することなく、多くの記事を書いた。

「戦時中、新聞は空気であった——近しい友人の手紙を開く前にまず人々は新聞を広げた。新聞は今や個人的に一人ひとりにあてられた手紙であった」——エレンブルグはこう書いた。記者、作家の言葉は前線と銃後を結ぶ鎖の環になり、前線からのニュースを待ち望む銃後の人々は新聞を通じて軍の戦闘生活に参加し、前線の兵士たちは全国民の熱い支援を感じた。エレンブルグの熱情に燃える社会時評が掲載された新聞はその当時、最良のアジ用資料になり、すみからすみまで読まれた。この作家のペン先は正に自動小銃より威力があった。

　大祖国戦争の悲劇的、英雄的事件に対するソ連の作曲家たちの反響も大きかった。当時の創作音楽は驚くほどバラエティーに富んでいた。まず第一に挙げたいのは歌である。歌は国民の感情と考えを最も鮮やかに反映していた。戦争初期につくられた秀作の一つがアレクサンドル・アレクサンドロフの作曲した『聖なる戦争』である。その不安に満ち、同時に厳粛なメロディーと、



▼前線に向かう兵士たちを激励する人気女優リュボーフィ・オルロワ（一九四三年）



荷馬車に乗って前線へ慰問に来たアーチストたち

的確で深みのある歌詞は、国民一人ひとりの胸にしみ込み、高い愛国心を呼び起こした。「崇高な怒りを波のように沸き立たせよ。人民の聖なる戦争が行われている」とうたうこの歌は、戦争から40年が過ぎた今も、戦後の平和な時代に生まれた人たちですら平静な気持ちで聴くことができない。

　ヒロイックな歌とともに、『ともしび』、『青いショール』、『暗い夜』、『前線に接する森の中で』のような、家のこと、家族や愛する人たちのことをうたった新しい叙情歌も生まれた。これらの歌を聴き、あるいは歌い、兵士は塹壕生活の冷たい風で凍えた自分の心を温めたのであった。今でも愛唱されているこれらのすばらしい歌を作曲したのはニキータ・ボゴスロフスキー、マトベイ・ブランテル、ワシリー・ソロビヨフ＝セドイである。

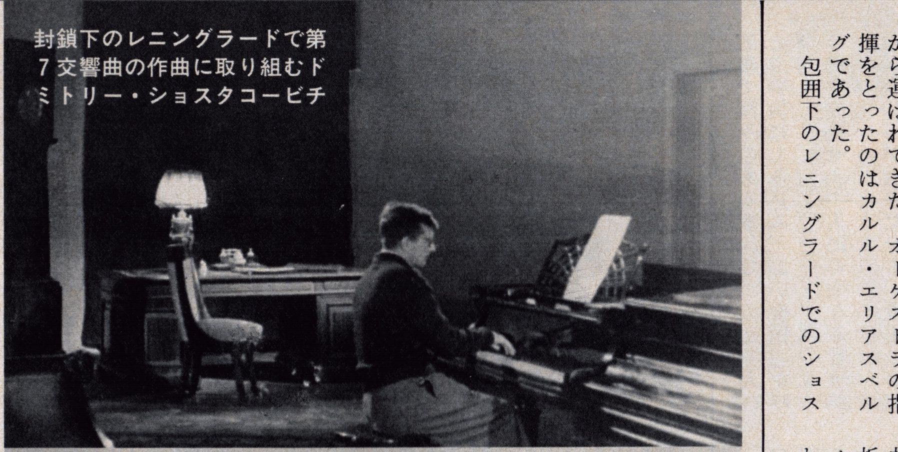
　現代音楽の巨匠セルゲイ・プロコフィエフ（一八九一—一九五三）とドミトリー・ショスタコービチ（一九〇六—七五）は戦争の試練の中で特に豊かな創作活動を展開した。プロコフィエフはこの困難な時代にセルゲイ・エイゼンシュテイン監督の映画『イワン雷帝』の音楽を書き、オペラ『戦争と平和』の初稿、バレエ『シンデレラ』を作曲した。

　九〇〇日にわたる封鎖と防衛の期間中のレニングラード市民の生活と闘いは、ヒロイズムと忍耐と勇気の模範として歴史に名高いが、その毎日の砲撃と爆撃の中で、寒さと飢えに苦しみながら、レニングラードの学者、詩人、美術家、作曲家、博物館員、図書館員たちは創造的な活動を続けていた。

　一九四二年、レニングラードとソ連全国の音楽生活で特筆すべき出来事が起こった。封鎖下でほとんど全部（四部のうち三部）書き上げられたショスタコービチの第7（レニングラード）交響曲が完成したのである。「ファシズムとのわれわれの闘いに、われわれの来るべき勝利に、わが故郷のまちレニングラードに捧げる」——作曲家はスコアにこう書いた。

　レニングラードの音楽家たちはこの交響曲の演奏を、それもいますぐ、ほかでもないレニングラードで演奏することを熱望した。これほどの大曲を演奏するにはオーケストラのメンバーを増やす必要があった。多数の演奏家がそのために部隊から一時的に派遣されてきた。レニングラード放送交響楽団がリハーサルを開始した。全員が奮起してこの曲に取り組んだ。封鎖されたレニングラードで第7交響曲を演奏することがどういう意味を持つか、理解していたからである。

　一九四二年8月9日レニングラード市民は第7交響曲を聴いた。この曲は孤立したレニングラードではなく、戦


封鎖下のレニングラードで第7交響曲の作曲に取り組むドミトリー・ショスタコービチ


ドミトリー・ショスタコービチもレニングラードの建物の屋上で消防隊員と一緒にファシストの焼夷弾の消火にあたった。

線の彼方のロシア〝本土〟で仕上げられたので、スコアは飛行機で〝本土〟から運ばれてきた。オーケストラの指揮をとったのはカルル・エリアスベルグであった。

包囲下のレニングラードでのショスタコービチの新曲の演奏は、生と不屈と勝利のシンボルとして鳴り響いた。曲を演奏した人々も、演奏の実現に骨折った人々もこの曲をそういうシンボルと見ており、感激も一入だった。これは現代の最高の作曲家とその同僚の音楽家たちがやってのけた偉業であった。

戦時中の演劇人の活動もめざましかった。ドラマ劇場や音楽劇場の舞台では、ソ連の劇作家や作曲家の最新作や古典が上演され、演奏された。また劇場やコンサートにこられない人々に芸術を直接味わってもらうために、芸能人たちの巡回公演がさかんに行われ、その足跡は工場や機関、病院や退避壕などあらゆる場所に及んだ。軽演劇、サーカス、演劇、映画の芸能人や高等音楽院の学生でコンサート隊が組まれ、前線や部隊を慰問した。戦闘のあいだを縫って、芸能人たちは芸術で、疲れた将兵に喜びを与え、士気を高めた。

ウラジーミル・コラリが率い、歌手のクラウジア・シュリジェンコが参加したジャズ・アンサンブルのコンサートは人気が高く、このアンサンブルの演奏した叙情歌『青いショール』は、当時の愛唱歌の一つになった。ロシア民謡の歌手リジア・ルスラノワも、前線の将兵の大歓迎を受けた。

戦時中にモスクワから七〇〇の演劇、コンサート班が、レニングラードからは五〇九の演芸班が前線に派遣された。一九四二年には前線劇団も出現した。前線の将兵は数多くの手紙の中で、コンサートだけでなく、きちんとした芝居も見たいとリクエストした。モスクワのワフタンゴフ劇場のスタッフが結成した前線劇団は最も人気があった。芝居の舞台は普通トラックの荷台か、森の中の空き地か、無事に残った建物であった。幕の代わりに防水天幕が使われた。いつも陽気で元気な出演者たちは観客の拍手を浴びた。前線劇団のレパートリーの中心は、ソ連の作家の作品とロシアの古典であった。ニコライ・ポゴージンの『銃を手にする人』、コンスタンチン・シーモノフの『ロシアの人々』、アレクサンドル・コルネイチュクの『戦線』の上演は、とくに好評であった。アレクサンドル・プーシキン、レフ・トルストイ、マクシム


ベルリンのブランデンブルグ門のそばで前線ニュースの最後のショットを撮影するカメラマンのロマン・カルメン（1945年）



ドイツ国会議事堂の正面階段に響くロシア民謡。歌うのはリジア・ルスラノワ（ベルリン、1945年5月）


右　「こちらはモスクワです。ソビエト情報局の発表では……」――マイクに向かう有名なアナウンサーのユーリー・レビタン（一九四一年）

・ゴーリキー、アントン・チェーホフらの古典作家の詩や小説も必ず朗読された。

戦時中の映画は人気が高く、短編の劇映画は最も広く普及した形態であった。これらの映画は、ソビエト情報局の発表や新聞のルポ、物語を題材にしており、『戦闘映画集』の中にまとめて入れられた。映画の製作にはグリゴリー・アレクサンドロフ、イワン・プイリエフ、フセボロド・プドフキンらの巨匠が参加し、戦前のスーパースター、リュボーフィ・オルロワらの有名な俳優が出演した。

記録映画のカメラマンたちは、ソビエト軍部隊に従軍して、前線の苦しくつらい道を歩んだ。彼らの労働、勇敢

さ、才能によって前線の貴重な記録映画がつくられ、その不滅のシーンは当時の多くの記録映画の土台となり、今の世代にソ連国民の対ファシズム戦の全貌を伝える映画年代記となっている。

ソ連の名監督ロマン・カルメン指揮のもとにつくられた映画叙情詩『大祖国戦争』の公開は、世界の大きな反響を呼んだ。この映画は歴史の不滅のシーンを撮った無名の英雄的カメラマンたちを再び人々の脳裏によみがえらせた。ロマン・カルメン自身は戦時中ほとんどずっとカメラマンとして活躍し、ベルリン攻撃戦の撮影で自分の前線の映画年代記を完結した。

ソ連のラジオ放送のアナウンサーたちの献身的労働も決して忘れられないだろう。ソ連全土の人々はユーリー・レビタン、オリガ・ブイソツカヤ、ウラジーミル・ゲルツィク、オリガ・フリデンソンの声に聴き入った。全国民にとって彼らアナウンサーの声は一つに合して、国民に抗戦し、勝利する活力を与えたモスクワの声となった。モスクワの声は塹壕や退避壕の人々の耳にも、パルチザンの壕舎やはるか西欧のレジスタンス戦士の耳にも届いた。その声は世界の人々に真実を届けた。ソ連の放送記者たちは兵士と共に最前線に出て、そこからルポを送った。戦時中ラジオ放送は終日休まず放送し、放送関係者は時を忘れて働いた。モスクワのアナウンサーは、文字通り数日間もマイクの前を離れなかった。封鎖下のレニングラードのアナウンサーの活躍も英雄的だった。レニングラードが一番苦しかった時にアナウンサーとして働いた人気女性詩人オリガ・ベルゴリツの低いささやくような声は、多くの市民に明日への自信を植え付けた。

ソ連の苦しい時期にソ連の文学者や芸術家は、あらん限りの才能をふるって国民に作品を提供したばかりでなく、心の命ずるところに従って自分の市民的責務を果たした。封鎖下のレニングラードの建物の炎上する屋上で、例えばドミトリー・ショスタコービチは、消防隊員とともに、ドイツ軍の焼夷弾を消し止めた……マールイ劇場の俳優や従業員の献金で数機の戦闘機が製作されて、パイロットたちに引き渡され、ドイツ軍を撃滅した勝利のあかつきはぜひ劇場に来てほしいとのメッセージが伝えられた。

子供から愛された作家のアルカジー・ガイダールは名誉の戦死を遂げた。風刺小説『黄金の子牛』や『12の椅子』の作者の一人エブゲニー・ペトロフは、包囲下のセバストーポリから帰る途中航空事故で死んだ。

無事生き残ったら、さぞかし名作を書いたろうと思われる多くの若い作家と詩人が戦死した。

祖国のために戦って死んだ人々が、いま生きている人々に贈った平和は、戦死したすべての人々を追悼する立派な記念碑と言うべきである。



宇宙で予想されるあらゆる事態に備えて、地上で訓練中のサビヌイフ(左)、ジャニベコフ両飛行士。

故障した軌道ステーション、サリュート7号の修理

ソ連宇宙飛行士、工学博士
コンスタンチン・フェオクチストフ

6月6日ソユーズT13号で打ち上げられた二人の宇宙飛行士ウラジーミル・ジャニベコフ、ビクトル・サビヌイフは、一九八二年4月19日以来飛行を続けている軌道ステーション、サリュート7号の故障を修理する危険な作業を宇宙でやってのけた。

基本クルー第3組（レオニード・キジム、ウラジーミル・ソロビヨフ、オレグ・アチコフ）が軌道コンプレクス、サリュート7号＝ソユーズT12号で、二三七日という宇宙長期滞在記録を樹立し、作業を終えたあと、一九八四年10月2日からステーションは自動飛行に切り替えられた。ステーションはモスボール（長期保存の形でしまい込まれる）され、5カ月間ステーションと地上の間で点検の無線交信が行われてきた。

定期交信のさい、地球からの無線指令が経由するステーションの無線システムのブロックの一つが故障していることが分かった。その後この故障のため、ステーションとの無線連絡が途絶し、ステーション内のシステムの状態を伝えるデータが入らなくなった。つまり、軌道上のステーションの位置がコントロールできなくなり、輸送船との接近、ドッキングの確保に使われる装置や姿勢制御用エンジンが使えなくなった。

ステーションを正常に戻すには、ステーションに乗員を移乗させなければならないことが分かった。しかしそのためには、姿勢を制御できないで宇宙空間を飛んでいる沈黙したままのステーションへ輸送船を打ち上げる態勢を組み、輸送船と乗員を飛行とこの難しい課題の達成へ向けて準備し、修理作業に必要な新しい設備を輸送船にのせ、接近の新しい弾道図式を作成し、飛行管制センターの専門家のトレーニングを実施する必要があった。

理論研究

ステーションに近づくために考え出された方法は次のようなものであった。すなわち乗員は約10kmの距離から光学計器を使って、輸送船の軸の一つの照準をステーションに向け、輸送船の選ばれた軸がステーションを“見ている”という信号を船上のコンピューターに入力する。

船上のコンピューターに記憶させるこうした幾つかの“測定データ”のおかげで、コンピューターはステーションの近くを輸送船ソユーズが通る実際の軌道の情報を入手し、必要な計算をして、輸送船に軌道の修正を命じ、ソユーズをステーションに誘導する。

もし正常に接近してステーションから2―3kmのところに来たら、乗員は手動でステーションに近づき、周囲を回ってドッキングユニットに結合しなければならない。

これらの作業を実施するために照準器、レーザー距離測定器、夜間透視器などから成る計器コンプレクスが用意された。

3月から輸送船の準備が始まり、輸送船をステーションに近付け、その周囲を回り、ドッキングするための乗員と管制センターの作業の方法、体制、プログラムが作成され、さまざまなテスト場で乗員の特別訓練が行われ、新しい計器類に乗員を習熟させる練習が実施された。

ドッキング

6月6日、V・ジャニベコフとV・サビヌイフが乗り込んだソユーズT13号が軌道に打ち上げられた。ソユーズT13号は軌道を修正した後、6月8日朝宇宙ステーションに2・5kmまで近付いて、手動に移った。

約二〇〇mの距離で乗員はソユーズT13号をとめたあと、V・ジャニベコフはソユーズT13号をステーションに近付け、ホバリング態勢をとり、ステーションの周囲を回って必要なドッキングユニットを追いかけ、見事ドッキングをやってのけた。

サリュート7号への接近とドッキングはすばらしい技術的成果と言える。この方法は有人宇宙飛行を発展させるうえに大きな意義をもっている。点検ないしは必要な修理・故障防止作業をするために、衛星に近付くことが可能になったのだ。技術的原因で地球へ帰れなくなった有人宇宙船の乗員救出の場合、この作業はもっと大きな意義をもつ。

宇宙の突発的事故

乗員を含めてこんどの飛行の準備と実施に参加したすべての人々は大喜びだった。文句のない成果、そして勝利とさえ言えたからだ。ところが思いがけないことが起こった。ソユーズT13号がステーションに近付いているときすでに、管制センターのテレビの画面で、ステーションに並行に取り付けられている太陽電池の二つのパネルの方向がずれ、相対角度が約70―90度になっていることが分かった。これは太陽電池の姿勢制御系統が動いていないことを意味した。

ステーションとソユーズT13号の電気コネクターを結合したあと、ステーションの状態を示す若干のパラメータ（これらのパラメータのコントロールは密閉性の点検とソユーズからステーションへの移乗の過程で行われる）を点検しなければならなかった。ステーションのセンサーはドッキング電気コネクターを通じてソユーズの表示システムに連結される。点検の結果、センサーがソユーズの回路につながっていないことが確認された。センサーの切り換え装置への給電はステーションの電源系統から行われている。だから、これもステーションの電源系統がとまっている証拠であった。

すぐさま沢山の問題が出てきた。電源がだめならば、サリュート7号もそのなかの何もかも凍りついてしまっているはずであり、水や食物だけでなく、プラスの温度のもとで動くことになっている計器や装置、機器まで、みんな凍りついて動かなくなってしまっていることになる。ということは、サリュート7号内のガスの成分を保障し、監視するシステムが働かなくなっているわけで、サリュート7号の内部で乗員が生存できるかどうかも分からない。サリュート内部のガスの成分が分からないから、無線通信手段が故障した原因は火事かもしれないということも考えられる。これはあり得ることであり、その場合乗員はガスマスクをつけなければならなくなるのだが……

乗員の緊急措置

そこでサリュート7号の作業室に入

る前に、まず気圧調節弁を開き、地上から運びこんでおいた装置を取りつけ、その装置を使ってサリュート7号内の空気のサンプルを採って、ガスの成分を分析してみた。乗員による分析の結果、サリュート内の空気に有害な混合物や毒性物質は含まれていないことが分かった。そしてはじめて宇宙飛行士たちはサリュートの出入口のハッチを開け、作業室に乗り移った。作業室の気温は摂氏0度を下回っていた。

まだ移乗室にいる間に、ジャニベコフ宇宙飛行士がコンセントの一つの電圧を調べてみると、電圧はゼロで、最悪の危険状態にあることが確認された。しかし、それでも作業室で指令パネルをテストしたところ、まったく通じない。電源系統の緩衝蓄電池の容量計を見ると、主な蓄電池の容量がゼロだった。

何が起こったのか。サリュート7号はどういう状態に置かれているのか。サリュート7号の空気の浄化ができないのに（電圧が足りないから、再生装置をオンにして作動することができない）、どうしたらサリュート7号内で作業ができるのか。乗員がこのなかに約1昼夜いると、炭酸ガスの濃度は生命に危険なまでに増える。でも、動かしてみなければならない。そうしなければ、何が起こったのか、これから先どうするのか、分からない。地上の管制センターからの勧告に従って二人の乗員は応急の換気系統の配線を組み立て、第一の再生装置のスイッチを入れた。

地上からの支援

地上のエンジニアたちは山ほどの問題にぶつかった。まず最初に、電源系統を作動させねばならない。地上の管制センターで考えだした方法に従って、乗員は蓄電池を給電線につなぐ配線を分解して、故障している蓄電池を配線から除き、使わないようにした。故障している蓄電池はそう多くなく、8個のうち2個であった。残りの蓄電池は太陽電池に直接つなげば充電する望みが出てきた。地上からの指令によって乗員は蓄電池と太陽電池をつなぐのに必要なケーブルをつくった。そして、6月10日最初の蓄電池の充電がはじまった。

サリュート7号は操縦システムと操縦用ジェットエンジンを使って蓄電池と連結されている太陽電池を太陽光線の方向にむけた。数時間後、第1蓄電池が部分的に充電されたので、これを電源系統の給電線に接続した。ここではじめて、宇宙飛行士が指令パネルから指示を送って遠隔測定装置を始動させることも、また地上で得た情報に基づいてサリュート7号のいろいろな装置や連結部分の状態と温度状況を判断することもできるようになった。

どのようにしてサリュートを〝暖めた〟か？

われわれを心配させたのは、電源系統が故障したことのほかに、重要な構造部分の温度がゼロ前後になったことだ。サリュート7号に積みこんであった水は凍ってしまっていた。2日目になってジャニベコフ、サビヌイフ両宇宙飛行士がロドニク（泉）給水装置を動かそうとしたが、作動しなかった。ところで、サリュート7号はいつになったら暖かくなるのか。計算によると、数昼夜から1カ月までかかる。7号の貯水量は8昼夜分だった。つまり6月14日に水が切れるはずだった。故障があった場合の非常用の貯水を使っても足りるのは6月21―23日までのはずだった。

ところが、サリュート7号はその日付けより前に〝暖まり〟はじめた。第1蓄電池の充電が終わると、残りの蓄電池も同じやり方で充電された。その残りの電池を充電している過程で、電源系統が故障して作動しなくなった原因も明らかになった。蓄電池の一つの、蓄電池が完全に充電されていることを示すセンサーが故障していたのであった。この故障しているセンサーから出た信号に従って、太陽電池と緩衝電池との接続が断たれて充電が止まったのである。そして、プログラム・タイム装置の指令によって、7号が軌道を一周するつど、一度ずつ太陽電池との回路と接続せよという指令が出されると、先の故障したセンサーがすかさず作動して、この回路を断ってしまうのであった。残った蓄電池も次第に蓄電容量が減りゼロにまでなった。こうして7号の機器装置は残らず作動しなくなってしまった。電力がなくなったからである。

ジャニベコフ、サビヌイフ両宇宙飛行士は緩衝電池の充電を終えてから、電気回路を正常に戻した。すると、電源系統、太陽電池の姿勢制御装置、温度調節装置、遠隔操縦装置が作動しはじめた。二人が指令用無線装置の故障を直すと、照明がつき、温度が上がってきた。6月16日、〝水が出はじめて〟、ロドニク給水装置内の氷を解かしはじめた。危機が去ったのである。

それよりも前の6月13日、姿勢制御装置、接近装置とエンジン装置のテストが行われた。これらの装置が作動しないと、貨物運搬船を動かせなくなる。運搬船はサリュート7号の自動装置と一緒に自動的に作動してはじめて、サリュートに接近できる。もし接近できなければ、乗員は研究を中断して地上に戻らなければならない。だがテストは無事に行われた。

サリュート7号に水を届ける貨物運搬船の打ち上げ準備を大至急することになった。きわめて短時日のあいだに運搬船と運搬ロケットのテスト、整備、打ち上げ準備をしなければならなかった。6月23日の未明、プログレス24号がサリュート7号とドッキングした。

もちろん、サリュート7号の機器装置は苦しい試練のもとに置かれていた。そこで、電源系統が直ってから、前から予定していたその他の修理作業や予防修理作業もやっておかねばならなかった。

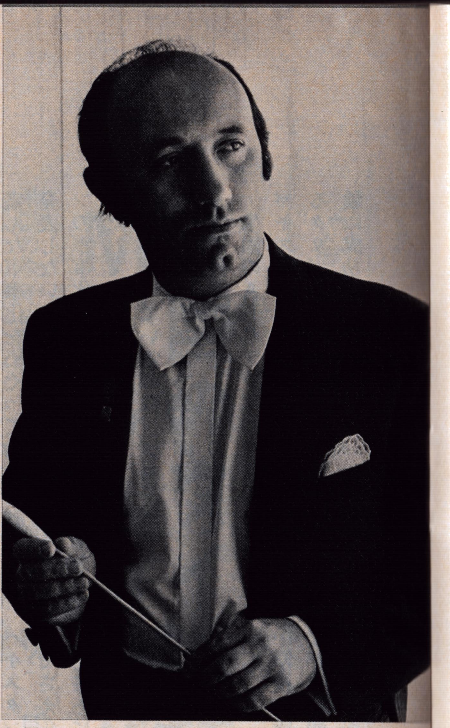
プログレス24号で新しい蓄電池が届けられ、古い蓄電池の一部がこれと接続して作動しはじめた。またこれからさき有人宇宙飛行を行うのに必要な水、燃料、設備類も届けられた。

二人の宇宙飛行士や地上の管制センターのスタッフ、サリュート7号の活動を回復させる作業計画や作業方法をつくりあげたすべてのエンジニアたちの献身的な働きも、ここで特筆しておきたい。

これまでの飛行で、宇宙における宇宙ステーションの修復作業や、このような複雑な修理作業を行う可能性に関する貴重なデータと経験が得られた。データによれば、9月上旬現在サリュート7号は正常に作動している。



演奏中の国立ロシア民族オーケストラ



オシポフ記念国立ロシア民族オーケストラの首席指揮者・芸術監督ニコライ・カリーニン

来日するオシポフ記念ロシア民族オーケストラ

本誌記者　マリナ・ルイクリナ

民族楽器で編成するオシポフ記念国立アカデミー・ロシア民族オーケストラが民音の招きで来日し、9月30日から10月28日まで日本各地で公演する。同オーケストラの日本での公演は一九七五年に次いで2回目。

今回の日本公演にはボリショイ劇場のソリスト、イリーナ・ジュリナ（ソプラノ）、レニングラード・オペラ劇場のソリスト、ウラジーミル・パンクラートフ（バス）、ナジェジダ・バブキナをリーダーとするボーカル・アンサンブル「ロシアの歌」が共演する。

18世紀にロシアにピアノ、バイオリン、チェロといったヨーロッパの楽器が現れると、ロシアの民族楽器は後方に追いやられた。ロシアの民族楽器は農村に残り、都市の聴衆はヨーロッパの楽器で演奏されたロシアの音楽を聴くようになった。

一八八八年、ペテルブルグ（現在のレニングラード）で、著名な音楽家であり作曲家であったワシリー・アンドレーエフ（一八六一―一九一八）がロシア民族楽器オーケストラを結成した。このオーケストラのレパートリーにはロシア民謡や民衆のメロディーのほかに、ロシアとヨーロッパの作曲家の交響曲も入っていた。このようにしてアンドレーエフは、ドムラ（撥弦楽器。半球形の胴体で3弦または4弦）、バラライカ（ロシアで広く普及している三角胴の撥弦楽器）、バヤン（ロシアのアコーデオン）など昔からのロシアの楽器が十分ヨーロッパの楽器によるオーケストラと対抗できることを示した。

一九一九年、アンドレーエフの経験を生かしてボリス・トロヤノフスキー（一八八三―一九五一。バラライカのロシア流派の創始者）がモスクワに最初のプロのロシア民族楽器アンサンブルを結成した。その後時の流れとともに指揮者、楽器の構成、演奏者の数は変わったが、アンサンブルはひき継がれ、一九四〇年、著名な音楽家でありバラライカの名演奏家であったニコライ・オシポフ（一九〇一―一九四五）が指導するようになった。

オシポフはまさに指導者であり、改革者であった。彼は新しい、いや正確にいえば古いが、忘れられていた民族楽器を掘りおこし、アンサンブルに加えることによって演奏の可能性を広げたのである。

一九四二年、アンサンブルは国立ロシア民族オーケストラと改称された。

現在のオーケストラのメンバーは75名で、大多数が男性。全員が高等教育を受けており、グネシン記念国立音楽教育大学ロシア民族楽器学部やモスクワその他の都市の音楽院の卒業生で占められている。楽団員の平均年齢は30歳。

一九七五年、ニコライ・カリーニン（現在41歳。モスクワ音楽院打楽器科卒）が指揮者になるとアンサンブルのプログラムは一新した。彼はこう語っている――「ロシアの民族楽器はコンサートの楽器としてすでに確立され、ロシア人だけでなく海外の聴衆をも魅了してきた。わがオーケストラは欧州の多くの国、米国、メキシコ、オーストラリアで公演し、成功を収めている。いまわれわれが力を注いでいるのは民族音楽やわがオーケストラ用に特別に作られた作品がもっと多く演奏されるようにプログラムを組むことだ」

日本公演のプログラムはロシアの曲や民謡で始まる。第1部ではソビエトの作曲家がこのオーケストラのために作った曲も演奏される。

プログラム第2部では、チャイコフスキー、ムソルグスキー、ラフマニノフらのロシアの作曲家、ショスタコービチ、スビリドフ、ハチャトゥリャンらソビエトの作曲家の作品が日本の聴衆の皆さんに紹介されるだろう。リストやブラームスの作品も入る予定だ。（日本公演についてのお問い合わせは、民音予約センター〈電話03・363・9151〉か各地民音事務局へ）

ノーボスチ通信 特派員報告

プロジェクト七〇六号はアジアの安全の脅威

V・トプチャン記者（ニューデリー）

この頃インドの世論はパキスタンからのニュースに不安をつのらせている。インドの報道機関が隣国パキスタンの盛んな軍事化をめぐって論文や評論を発表しない日は一日もない。パキスタンの軍事化には米国が積極的な役割を果たしているのだが、とくに当地の不安をさそっているのは、プロジェクト七〇六号、すなわち原爆開発プロジェクトの作業が終了したとの報道だ。

米国のABCテレビの資料によると、パキスタンは原爆の信管として使われるクリプトロン（電子スイッチ）の実験に成功したといわれる。当地の専門家筋は、パキスタンは予備的な地下実験をしなくても核大国になれると指摘している。

1年前米国防総省核兵器管理局長宛ての報告書の内容が漏洩したことがある。この報告書は米国の学者、政府の専門家90人の手になるものだが、そのなかに、パキスタンは「年間に数セットの核兵器を生産できるだけのソフトウェア・設備・工場・人員をもっている」という箇所がある。やはりその頃のことだが、米国の上院外交委員会のメンバーのアラン・クランストン議員が議会で、パキスタンの原爆生産活動に補助金を出したのはホワイトハウスにほかならないと証言したことがある。

またインドのパトリオト紙は、パキスタンの軍事化の第一目標はインドだと指摘しているが、アフガニスタン方面からパキスタンが〝脅威〟を受けているとか、限られた数のソ連軍部隊がアフガニスタンにいるとかいう口実は、パキスタンの軍事化を正当化する理由にはならない。

パキスタンが核戦力をもつことは、ただでさえ危うい南アジアの力のバランスをさらに変えることになる。

中学校で〝平和〟の授業

I・ドロフェーエフ記者（オタワ）

中学校の講堂。舞台にいる一人の、頭髪が黒く顔も浅黒い少年の緊張した顔をライトが照らしている。

「ぼくたちは〝平和のために闘う子供たち〟という団体のメンバーです」と少年がしゃべっている。「戦争と平和の問題について議論したり、平和を守るためにいろいろな行事をしている団体です。その一つが、これから上演する日本の広島の少女佐々木禎子さんと折り鶴の劇です」。ライトが消え、また点いた、6年生と7年生の生徒による芝居がはじまった……

芝居は広島の女子中学生の痛ましい話が内容だ。芝居が終わっても四五〇人の、普段は元気がよすぎて落ち付きのない生徒が水を打ったようにシーンとなって、緊張した視線を舞台に注いでいる。芝居を企画・上演した一人、7年生のサラディン・ノービン少年が姿を現した。彼の甲高い声が講堂のせき一つ聞こえない静けさのなかで呼びかけのように聞こえる。「8月6日のきょう、日本中の小学生や中学生は禎子を追悼して折り鶴を折りつづけています。全世界の子供たちが絶対に戦争の恐ろしさを味わわないように」

記者は校長のそばに行って、生徒の反戦活動をどう思うかときいてみた。

「本校の全教員と同じく私もこの立派なことを支持します。ソ連の中学校では新学年の第一日目に〝平和〟の授業をやっているそうですが、そういうやり方が世界中に広まったら、たいへんよいと思いますね」――校長はこう答えた。

電算機で灌漑を制御

G・アバロフ記者（ブカレスト）

ルーマニアの年間農地灌漑面積は四〇〇万haで、欧州で3位、全世界では4位である。国家計画によると、一九八五年までに灌漑予定面積は五五〇万haになり、全国農地の1/2余りに達するという。水資源はいくらでもあるので、専門家筋では目下経費が少なくてすむ近代的灌漑方法を研究中だ。この灌漑方法の対象となるのは主に土壌や水文学的条件のそれぞれちがう4、5種類の農作物の栽培農地で、作物が必要な水分をどう取るか、収穫の質と量を左右する土壌の湿度にどう早く反応させるか、強力な揚水ポンプやスプリンクラーを動かす電力をどううまく使うかが問題になる。

これらの問題への解答を出してくれるのが、チルチェというコンピューターを使って最適の灌漑方法を割り出すきわめて独創的な装置である。この装置は10―15日前に具体的な灌漑計画や勧告を割り出すだけでなく、灌漑過程そのものを管理し、気象の変化に敏感に反応して、土壌中の水の量を計算する。この装置はブカレスト近くの試験圃場（二五〇ha）で使用され、専門家の間で非常に評判がよかった。

「今日のソ連邦」昭和60年10月1日号（第28巻・第19号・通巻六四〇号）付録

米国のタイム誌に対するM・S・ゴルバチョフの回答

米国のタイム誌はM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長に対し、一連の質問に答え、H・グルンワルド同誌編集主幹、R・ケイブ編集長、R・ダンカン副編集長、J・ジャクソン・モスクワ支局長と会見してほしいと要請してきた。会見は8月28日に行われた。以下はM・S・ゴルバチョフの回答（書面）と彼の米国記者との会見内容の全文である。

問い ソ米関係の現状をどう見るか。いまこの関係を決定している主要な出来事は？

答え この質問が2カ月ほど前に出されていたら、私はこう言っただろう。両国関係の現状はやや好転し、前向きの変化へのなにがしかの期待が現れている、と。

全く残念なことだが、今日ではもうこのように言うことはできない。真実を直視する必要がある。ジュネーブで交渉が始まり、首脳会談の合意が成立したにもかかわらず、両国間の関係は悪化し続けており、軍拡競争は激化し、戦争の脅威は減っていない。これはどういうことなのか、なぜこういう事態が進展しているのか？ 私と同僚たちは自分自身の活動に、――国内活動ばかりでなく対外活動にも、十分にきびしく自己批判的な態度をとっている。そしてわれわれは何度となくこう自問している。もしかしたらこれは、なんらかの形でわれわれの行動と結びついているのではなかろうか、と。

だがこの場合、われわれはどういう点で自らを責めることができようか？ 現下の責任重大な情勢の中でモスクワは米国に関する発言で自制を保つよう努め、反米キャンペーンに訴えておらず、ましてや貴国に対する憎悪をあおるようなことはやっていないではないか。政治的先鋭化の時点においてさえ、米国民に対するソ連人の伝統的な尊敬の念をうちこわさないようにすることが、非常に重要だとわれわれは考えている。私が判断しうる限りでは、この感情は多くの点で相互的なものだ。

軍縮交渉が再開され、6年の中断の後初めての首脳会談の準備が進められているという条件下で、悪循環を断ち切り、軍備制限プロセスの行き詰まりを打開する方法を粘り強く探し求めているのは、いったい悪いことだろうか？ ほかならぬそうした目的をめざしているのは、たとえば核爆発に対するわれわれのモラトリアム、それに加わり、核実験完全禁止交渉を再開するようにという米国への提案、および宇宙での平和協力と軍拡競争防止に関する提案である。現在の複雑な状況からの出口を一緒にみつける必要があるとわれわれは確信している。

そして、われわれの提案が米国の責任ある活動家たちになぜあれほど露骨な不満を引き起こしたのか、理解できない。それらを純然たる宣伝であって、それ以上のものではないとみせかける試みがなされたのは周知のことだ。

ほんの少しでも問題の本質を知っている人なら、われわれの提案の背後にあるのは最も真剣な意図であって、世論に影響を与えようとする試みとやらではないことを、たやすく見てとるだろう。核軍備制限のあらゆる現実的な努力は、実験の禁止から始まった。この道での最初の大きな一歩となった一九六三年の条約〔部分核停条約〕を思い起こしていただきたい。核実験の完全停止は、質的にみて最も危険な方向で核軍拡競争をおしとどめるだろう。そればかりでなく、核兵器不拡散体制の維持と強化への重要な寄与となるだろう。

われわれがやっているすべてのことをもっぱら宣伝にすぎないと見るのなら、なぜ〝目には目、歯には歯〟の原則でそれにこたえないのか？ われわれは核爆発を停止した。あなたが

しい道を歩んでいると確認している。これらの問題の解決の機は熟しており、それらを解決しなければならない。国民と接触した結果到達する最も主要な結論は、われわれの提案や実際の措置が熱い支持を受けているということである。その上、党内にも国民の間にも、もっと迅速に行動してほしいというやむにやまれぬ要望が表れている。勇気と決断力、と同時に慎重さを発揮する必要があると思う。われわれは今後も、わが国民に対して高い責任感をもって行動する。一方、人々はわれわれが言行不一致のない確固たる政策を実施することを要求している。だからその意味でわれわれは厳しく監視されているわけだ。現在われわれが一段と公開性を推進して活動しているということは、われわれの民主主義をよりいっそう発揮しているということだ。したがって人々は恐れているどころか、逆にわれわれのやり方を歓迎しているのだ。

かといって、まるで私がすべてをバラ色に描き出そうとしているかのように思ってもらいたくはない。ソ連ではわれわれ全員に大きな改革を求める深いプロセスが進行中である。当然それは人々や幹部にかかわってくるし、全員の活動方法にかかわってくる。若干の幹部交替が行われていることは、わが国がある特別な状況下にあることを意味しない。これは当然のプロセスだ。悪いのはこのプロセスが滞るときだけだ。

従って問題は、若干の人事異動が、現在われわれが解決にあたっている諸問題をめぐる何らかの政治闘争の反映であるといったことではない。すべての人がいたる所で――われわれも、各共和国でも、州でも、各労働集団でも改革をしなければならないとわれわれは考えている。もちろんこれには党の大きな努力が必要だ。しかしわれわれがとっている路線は差し迫った要求を反映しているので、この路線はわが国民の断固とした支持を受けている。それはわれわれが正しい行動をとっているという確信をわれわれに与えている。

最後にこのインタビュー全体の要点と見ることができる一つの考えを述べたい。対外政策は国内政策の続きであると言われているが、その通りだ。とすれば、ひとつ考えていただきたいのだが、自分たちのためにこんな大規模な内政計画を立てているわれわれにとって、一体どんな外的条件が望ましいだろうか？ 答えはあなたがたのために残しておこう。

H・グルンワルドは会見とインタビューに対してM・S・ゴルバチョフに心から感謝した。

（プラウダ、一九八五年9月2日号）

『今日のソ連邦』一九八五年10月1日号付録
発行人 加藤宣幸
編集 ソ連大使館広報部
（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03―447―3536）
印刷・発行所 （株）新時代社
（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1―44・電話03―293―4881）

ソ連の新聞記事から

（一九八五年8月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、モスクワで行われた第12回世界青年学生祭に関する報告を聴取した。会議は、モスクワ祭典は、帝国主義の侵略政策に反対し、諸国民の平和と安全を守る闘争における青年の結束を促進した、国際的な意義を持つ大イベントになった、と指摘し、ソ連の青年団体と諸外国の進歩的、民主的青年団体との協力がさらに発展したことは、重要な意義をもつと強調した。

政治局は穀物その他の農作物の収穫と畜産用飼料の調達の進展状況を検討した。実った農産物を全部ロスを出さずに取り入れ、加工し、冬季保存用にまわし、特に集約的な農法によって、よい秋まき穀物の播種を適時に実施し、農業経営に化学肥料と農薬を供給するために、秋の農作業のテンポを著しく速める必要があることに注意が向けられた。

政治局は沿カスピ海石油ガス・コンプレクスを設立する措置を審議した。ソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の決定によると、カスピ海沿岸地方の石油・ガス鉱床の試掘を促進し、その開発システムを改善し、貴重な化学生産物を生産する炭化水素原料の総合加工の組織を改善することになっている。必要な設備や計器を製造し、このためにしかるべき生産施設をつくるという課題が定められた。また住宅、社会・文化生活サービス施設が建設される予定であり、さらにこのコンプレックス区域で石油・ガス鉱床の開発に携る企業や組織での人員確保に関する他の措置も決められた。

政治局はきたるべき第40回国連総会に関わる諸問題を検討した。ソ連が、平和の有効な手段としての国連を重視していることが確認された。ソ連は、40年前に国連創設の基礎となった公正な民主的原則が、実際の国際関係に具現されるよう今後とも努力するだろう。国連憲章に明記された主要課題――平和の維持と強化の課題に基づいて、ソ連はきたるべき国連総会でも、国連総会の議事で軍拡競争中止問題が主要な地位を占めるよう努力するだろう。同時にソ連は、これまで同様、宇宙空間の非軍事化の条件のもとでの宇宙空間の平和的開発をも含め、さまざまな分野での国際協力を平等の原則に立って発展させることに努めるだろう。

政治局は朝鮮民主主義人民共和国における朝鮮解放40周年記念祝賀行事へのソ連の党・国家代表団の参加に関するG・A・アリエフ同志の報告を聴取した。金日成・朝鮮労働党中央委総書記・朝鮮民主主義人民共和国主席、その他の朝鮮の指導者たちとのソ連代表団の会談の結果が承認された。この会談では全面的な交流を深め、国際情勢の健全化と平和の強化をめざす闘争で相互協力を拡大しようとの両党と両国の決意が確認された。

（プラウダ紙8月23日号）

ソ連共産党中央委員会の会議

8月23日、ソ連共産党中央委員会で一九八六年度と第12次5カ年計画のソ連の経済・社会発展諸計画の策定問題に関する会議が開かれた。

会議にはソ連閣僚会議副議長（複数）、省庁の党委員会の指導者と書記、ソ連共産党中央委員会、ソ連閣僚会議、全ソ労働組合中央評議会、コムソモール中央委員会の責任者が参加した。

N・K・バイバコフ・ソ連国家計画委員会議長が諸計画の策定の進展状況を報告した。

M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は会議で演説し、いま全党、全国民は第27回共産党大会の重要な準備期に入っていると指摘した。年度諸計画中に具体的に盛り込まれる第12次5カ年計画と二〇〇〇年までの期間の国の経済・社会発展の基本方向は大会の最重要文書の一つになろう。

（プラウダ紙8月24日号）



――思い切って打ち込んでくれ。
――いやいや、まず君からお先に。
（A・セムチェンコ作、トルード紙8月22日号）

天文学者のシンポジウム

8月下旬ドシャンベ（タジク共和国の首都）で「全地球流星観測システム」計画の第1回国際シンポジウムが開かれ、ソ連、米国、ドイツ民主共和国、インド、カナダ、オーストラリア、日本、イタリア、チェコスロバキアなどの専門家が参加した。

この学術フォーラムがドシャンベで開かれた理由についてV・スルコフ・イズベスチヤ紙記者は次のように報じている。

タジク共和国科学アカデミー天体物理学研究所は流星地球物理学と天文学に関する総合研究センターである。このセンターは数万分の1秒の露出時間で撮った世界最初の流星の写真によって大気中の流星体の崩壊の性格を明らかにしたし、またこのセンターは初めて同時に流星の写真観測とレーダ観測を行った。（イズベスチヤ紙8月26日号）

モスクワ大学に学んで(1)

芸術学博士候補　新田　喜代見



筆者



▶モスクワのレーニン丘にあるモスクワ大学の高層校舎。ここには大学本部、自然科学系の学部、会議場、実験室、学生寮、プール、食堂、商店などがある。

モスクワ大学歴史学部大学院美術史科で5年間学び、このほど芸術学博士候補の学位を受けた新田喜代見さんの留学記を本号から3回にわたって連載します（なお、新田さんの学位論文審査については本誌ことしの4号参照）。

私がモスクワ大学の大学院に入ったのは秋だった。白樺の葉が色づき、〝黄金の秋〟とも言われる九月末のことである。私が籍をおいた歴史学部美術史科には、西洋美術史講座とロシア・ソビエト美術史講座がある。

私は一九世紀末から二〇世紀初頭のロシア美術の研究を希望した。この分野の専門家はロシア・ソビエト美術史講座の主任教授ドミトリー・ウラジーミロビチ・サラビヤーノフであったので、私は教授を訪ねた。私が部屋に入ると、教授はすぐ立って、大きな手を差しのべた。それは暖かい手であった。教授はメガネをかけ、やさしい東洋的な面立ちで、身体のがっちりした学者タイプに見えた。私の希望する研究テーマを注意深く聞いたあと、教授は私を快く受け入れる返事をしてくれた。この日以来五年間、私はサラビヤーノフ教授に師事した。

授業内容

モスクワ大学の歴史学部美術史科は五年制（夜間部は六年）で、毎年二五人の学生を採用している。ソ連では、私のように大学時代に専攻した課目を変更して大学院（三年制）に入る場合、二年間新しい専門分野での準備・研究期間が与えられる。私は最初の二年間で、学生が受ける美術に関する講義をすべて聴講することになった。朝九時から夕方六時過ぎまで、出席できる授業に片っぱしから出た。美術史入門・古代から現代にいたる西洋美術史・東洋美術史・ロシア＝ソビエト美術史・美学史・芸術評論史・芸術理論・芸術学の方法論・建築記念物の修復・修復（主に聖像画、絵画）・博物館学などがあった。講義の大半は、黒いカーテンで窓を覆った教室で、スライドを見ながら行われる。そのような教室では、筆記しやすいように、それぞれの机にいくつか豆ランプがつけられている。

一年の課目に〝美術品の記述と分析〟がある。毎週木曜日が一日この授業にあてられている。初めの一カ月余りは、モスクワ郊外にある古代ロシア建築を見学に行き、そこで授業が行われる。それが終わると、主にモスクワのプーシキン美術館で作品を前に、古代エジプト、古代オリエント、古代ギリシャ・ローマから西欧中世を経て、現代までの美術史を学ぶ。この美術館でモスクワ大学美術史科の学生の授業が行われるのは、すでに伝統的なものとなっている。プーシキン美術館の歴史は古く、一八四八年にモスクワ大学の教育補助施設として設立されることが決められてから始まった。初期の収集品は、古代ギリシャ・ローマを中心とした彫像の複製コレクション（石膏製）がその大部分を占めていた。今では、それらのコレクションは、古代エジプト・古代オリエントをはじめ、広く西欧中世を含める大きなもので、その質の高さでは定評がある。

現在のボルホンカ通りにプーシキン美術館が完成し、一般公開されたのは一九一二年だった。それは、モスクワ大学の美術講座の主任教授I・V・ツベターエフ（一八四七～一九一三）の努力のたまものであった。完成後は、



▲高層校舎の近く、キャンパスの奥まったところにある人文科学系学部の校舎。美術史の学生、院生たちもここで学んでいる。

レニングラードのエルミタージュ美術館の所蔵品をはじめ、さまざまな西洋美術のコレクションがプーシキン美術館に収められ、今もその作品点数は増え続けている。とくに、印象派・後期印象派の名作、モネ、マネ、ドガ、ルノワールの他、ゴーギャンのタヒチ時代の力作、バン・ゴッホ、セザンヌ、マチスの初期の傑作、ピカソの青の時代、ピンクの時代、キュービスムの大作が展観されていることでは世界的に有名だ。これらの作品のほとんどは、一九世紀末から二〇世紀初めにかけて活躍したモスクワのコレクターS・I・シューキン（一八五四〜一九三六）とI・A・モロゾフ（一八七一〜一九二一）が収集した。西欧で印象派・後期印象派の画家たちが正当に評価されなかった当時、この二人のコレクターは彼らの作品の価値を認め、それらの収集に情熱を燃やした。

プーシキン美術館での授業は、朝一〇時頃から午後四時過ぎまで（三〇分にも満たない休憩をはさむだけ）、作品を前にその記述と分析方法を直接学ぶ。初めの数回は、主に先生が説明し、学生に質問することが多いが、そのうちこの授業はゼミナールの形式をとる。毎週何人かの報告者が予定され、割り当てられた作品の記述と分析を行う。その後で、それぞれの学生が報告に対する意見を述べてゆく。

この授業に関連して、月に二回、建築史専攻の大学院生が日曜日を利用して、モスクワの古代ロシア建築めぐりを組織する。たいてい目的地に近いメトロの駅で待ち合わせて、半日がかりでゆっくりと見てまわる。院生は建物の歴史や概観、内部空間、インテリアの特徴などを詳しく説明し、質問に答える。学生はメモをとったり、簡単にスケッチしたり、建物の見取り図を描写することに慣れてゆく。これらの"歩く"授業に参加すると、美術研究をめざす者は、とくに頑健で忍耐強くなければならないことも教えられる。

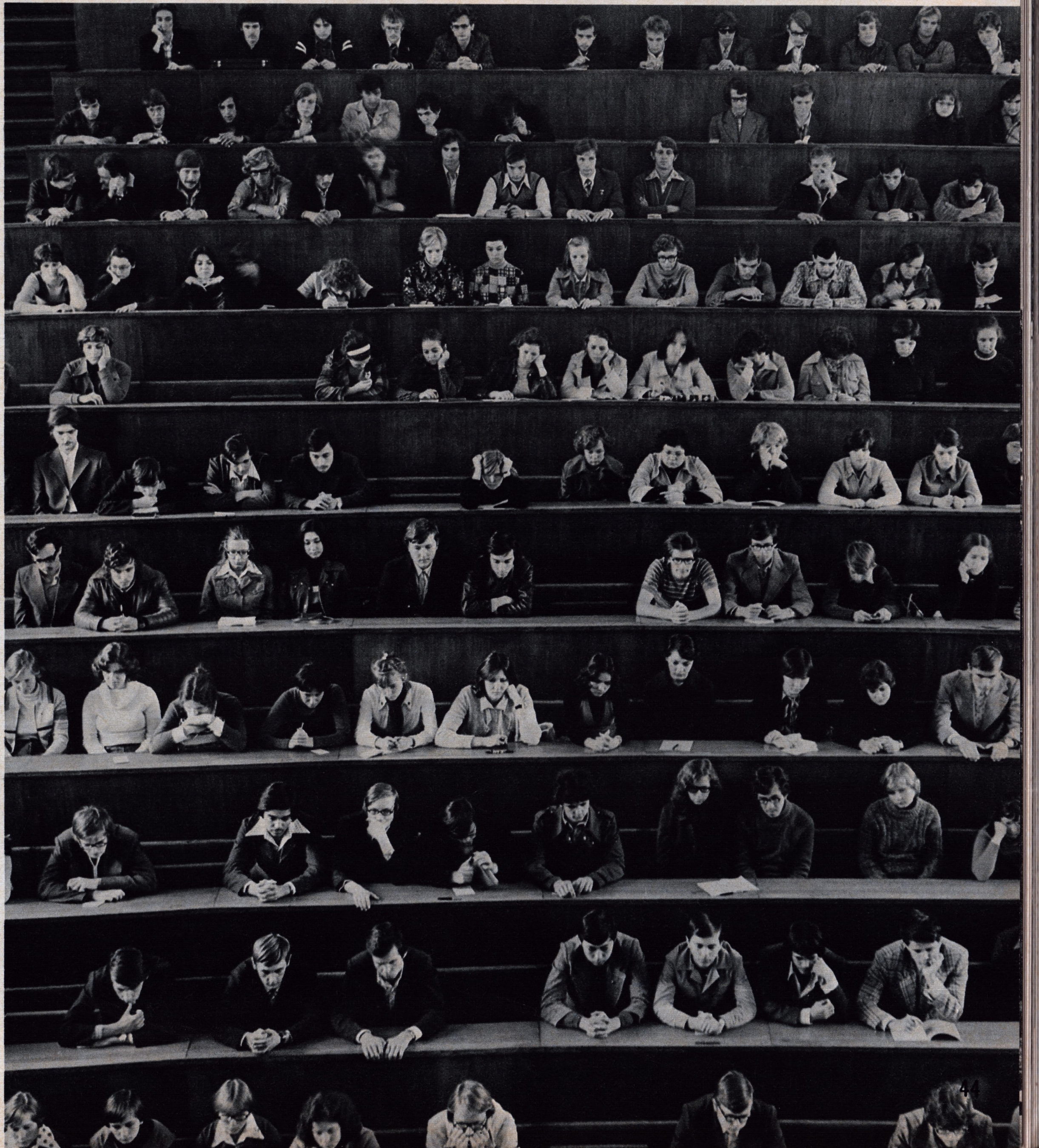
大学一年の前・後期と二年の前期にかけて"美術の技法"がある。これは主に絵画技法を理論的、実践的に学ぶ。一年では週二回三コマ（一コマは八〇分）、二年では一コマがあてられる。



選挙で選ばれる学生の自治機関――学生評議会。勉学、日常生活、研究活動、余暇の問題に取り組んでおり、外国人学生も評議会の活動に参加している。

一年の初めの授業は、最初の一コマで構図、遠近法、色、形、陰影等々について理論的な説明があり、続いて、エンピツ・コンテ・サンギーナ・ペン・パステル・グワッシュ・水彩絵具・油絵具などを順番に使って学生が実際に描写する。最初は、教室内にある野菜・果物（模造品）・箱・瓶・壺・三角形・四角形・円柱・円錐形などを組み合わせた静物画や鳥の剝製、石膏像をデッサンする。ある時、からすの剝製をペンで描く課題が出た。モスクワのからすは、図体が大きい上に、黒とねずみのツートンカラーだ。担任のザイツェフ先生は、授業中生徒のデッサンを見ながら、色々とアドバイスをする。私がからすの絵をほとんど書き終えた頃、ザイツェフ先生がそばに来て「きみの描いたからすは、ずいぶん日本的でやさしいね」と言って笑った。そう言われて、まわりにいるソ連人学生のからすを見ると、どれも獰猛な鳥に描かれている。子供の頃から日本人は「からす、なぜなくの……」の童謡を聞いて育ち、からすに対しては、一種独特の親近感を覚えるが、ソ連人に言わせると、からすは猛禽を思わせる要素の方が強いそうだ。

この授業は、二年生になると、油絵、木版画や銅版画の製作で終了する。美術史専攻の学生の中には、美術英才学校を卒業したり、すでに建築・絵画の



大教室で行われる学年共通の講義



美術史科の学生や院生にとってモスクワの美術館は実習授業の場であるだけではない。美術は彼らの生活の一部になっており、暇さえあれば美術館を訪れている（トレチャコフ美術館で）



▶トレチャコフ美術館の聖像画展示室

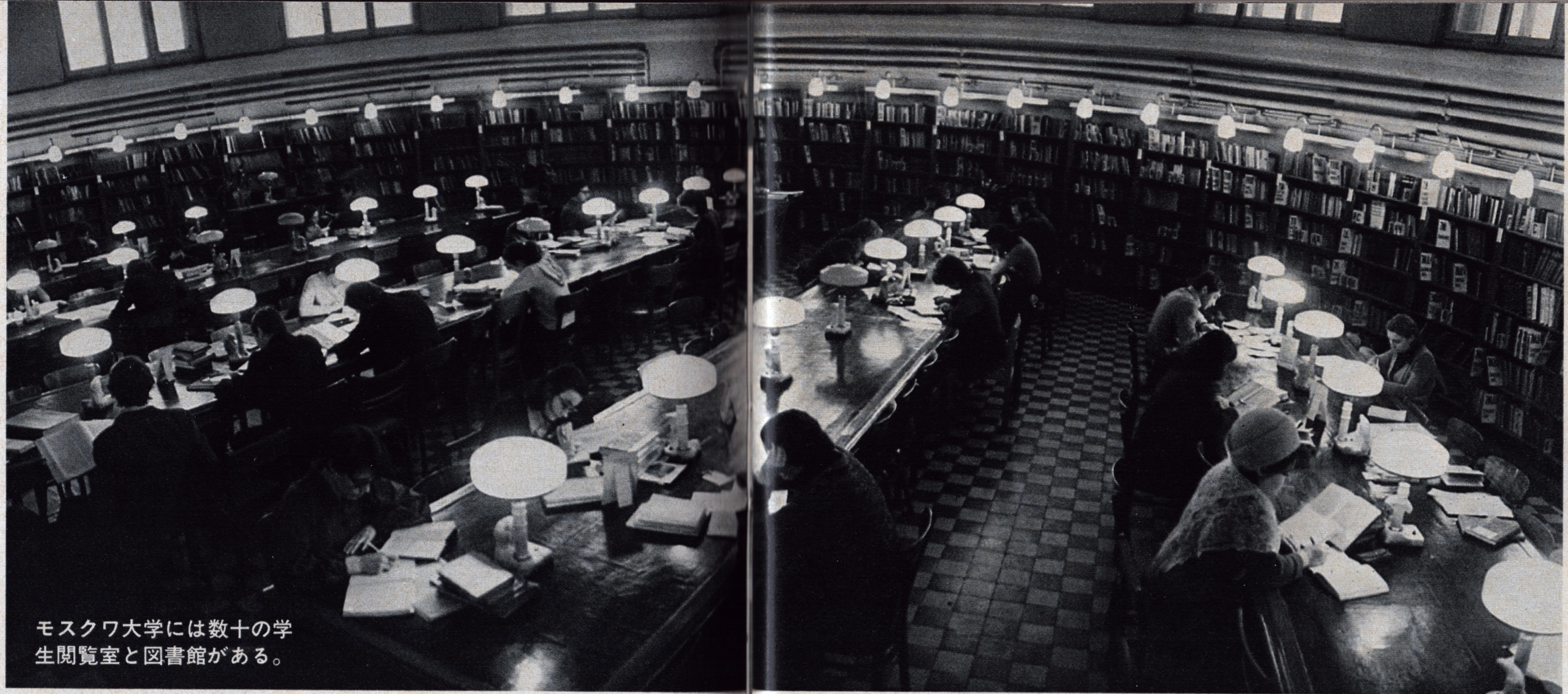
修復に携わったり、博物館・美術館で働いてきた人たちもいる。とくに、美術学校を卒業した学生には、この授業が免除される。夜間部に通う学生の中には、芸術関係の職場で働きながら学んでいる人が多い。彼らの授業は、夕方七時から九時五五分までである。長いモスクワの冬、零下三〇度前後の凍寒にもめげず通いつめている学生を見ると、頭の下がる思いがする。この授業で描かれた作品で優秀なものは、さまざまな機会を利用して、校内に展示されたりもする。

サラビヤーノフ教授に師事

大学院生は指導教授と密接に連絡をとり合い、独自のプログラムにそって博士候補学位論文を完成させる。ふつう、最初の二年間で図書館、研究機関、美術館、博物館などへ通って資料を集め、国家試験（社会科学・外国語・専門科目）を受験する。三年目は論文を書きあげ、国家審査を受ける。

サラビヤーノフ教授の指導を受けながら、私は初めの二年間（準備・研究期間）は、大学の教室と図書館、美術館の間を往復した。この期間に、院生に義務づけられている三つの国家試験を受けてもよいことになっている。一年目は社会科学と外国語（露語）、二年目は専門科目を受験した。また、一九世紀末から二〇世紀初めのロシア美術の基本文献を読破することに重点を置き、論文の具体的テーマを決めることに努力した。

準備・研究期間が終わる頃学位論文のテーマ〝一九世紀末から二〇世紀初頭のロシア絵画における民族芸術の伝統の利用の諸問題〟も決まり、本格的な私の大学院生生活が始まった。サラビヤーノフ教授に師事しながら、私は図書館通いの他に、モスクワのトレチャコフ美術館、歴史博物館、レニングラードのエルミタージュ美術館、ロシア美術館、ソ連邦民族博物館などを中心に資料集めに専念した。大学院生は毎年一回、学位論文の研究・資料集めを目的とするソ連国内の出張に対し



モスクワ大学には数十の学生閲覧室と図書館がある。

て、国から旅費全額と経費の一部が支給される。

サラビャーノフ教授に会う機会も多くなった。膨大な蔵書に囲まれた教授の書斎で指導を受けるのが常だった。玄関のブザーを押すと、いつも教授がドアを開けてくれる。書斎に入ると、客用の机の上はすでに本が用意されている。その本は、次の指導を受けるまでに、私が読まなければいけない書物の一部だ。教授は誰にでも惜しみなく本を借す。どの教え子もこの書斎を出るときは、両手にいっぱい本をぶらさげている。教授は気さくな人で、ユーモアに富み、彼の口から時々ジョークも飛び出す。仕事の話が終わると、教授は自らお茶やコーヒーを運んで来てごちそうしてくれる。教授の奥さんのエレーナ・ボリノブナさんも美術研究家である。つい最近『バン・ゴッホ』を出版した。お茶の時間には奥さんも話に加わり、会話がはずむ。

私は七、八月の夏休みは、主にヨーロッパの美術館めぐりをした。日本を出発する時「いい専門家になろうと思ったら、良い作品も悪い作品も出来るだけたくさん見ることだ」と、ある専門家が言った。最初は南仏とローマ・北イタリアを中心にまわり、二回目は西ドイツ、オランダ、ベルギーを旅し、三回目はフランス、スペイン、イギリスを旅行した。大学院生の場合、こういう旅行は、指導教授の許可がないと出来ない。サラビャーノフ教授はいつも美術館めぐりのアドバイスをしてくれた。これらの旅行は、私にとって実習授業の延長のようなもので、夢中で見てまわった。



◀世界美術を専攻する学生たちはプーシキン美術館もよく訪れる。ここの西欧絵画と彫刻は世界的に有名だ。

催し物のお知らせ

☆九州・エルミタージュ美術館展

9月7日（土）――10月10日（木）（月曜休館、午前9時30分～午後5時）

▽場所：福岡市美術館（福岡市中央区大濠公園1－6）

▽入場料：一般900円、高・大学生600円、小・中学生300円

▽お問い合わせは福岡市美術館（電話092・714・6051）、西日本新聞（電話092・711・5510）へ。

☆オシポフ記念国立ロシア民族オーケストラの公演

東京厚生年金会館（9月30日）、小樽市民会館（10月2日）、北海道厚生年金会館（3日）、秋田市文化会館（5日）、宮城県民会館（6日）、埼玉会館（7日）、神奈川県民ホール（8日）、沼津市民文化センター（9日）、四日市市文化会館（10日）、高松市民会館（11日）、鹿児島市民文化ホール（14日）、熊本市民会館（15日）、九州厚生年金会館（16日）、長崎市公会堂（17日）、下関市民会館（18日）、福岡市民会館（19日）、岩国市民会館（20日）、京都会館第1ホール（21日）、神戸国際会館（22日）、大阪フェスティバルホール（24日）、静岡市民文化会館（25日）、名古屋市民会館（26日）、長野県民文化会館（27日）、富山市公会堂（28日）

▽電話予約・お問い合わせ先／民音・予約センター（電話03・363・9151）、各地民音事務局

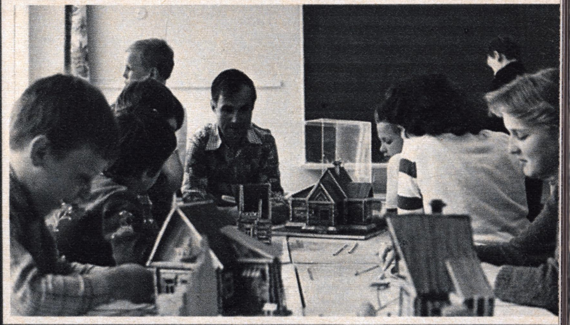
☆ミハイル・プレトニョフ・ピアノコンサート

東京文化会館（10月22日）、伊那市民会館（10月25日）、刈谷市民会館（10月26日）、大阪・シンフォニー・ホール（10月28日）、東京・昭和女子大学人見記念講堂（10月30日）、東京・新宿文化センター（10月31日）、松本・松本音楽文化ホール（11月1日）、東京文化会館（11月7日）、浦和・埼玉会館（11月8日）

▽お問い合わせはジャパン・アーツ（電話03・235・1661）へ。

麦ワラの大寺院

カメラ　Y・マスリャエフ



ビクトル・バハレフは自分の技術を〝自然と創造〟クラブ（モスクワ自然保護協会付属）で惜しみなく人に教えている。



大作のボスクレセンスキー寺院（ムルマンスク州）を前に。



構想が次々と具体化されていく。



制作用にバハレフは特別な彫刻刀を考案した。

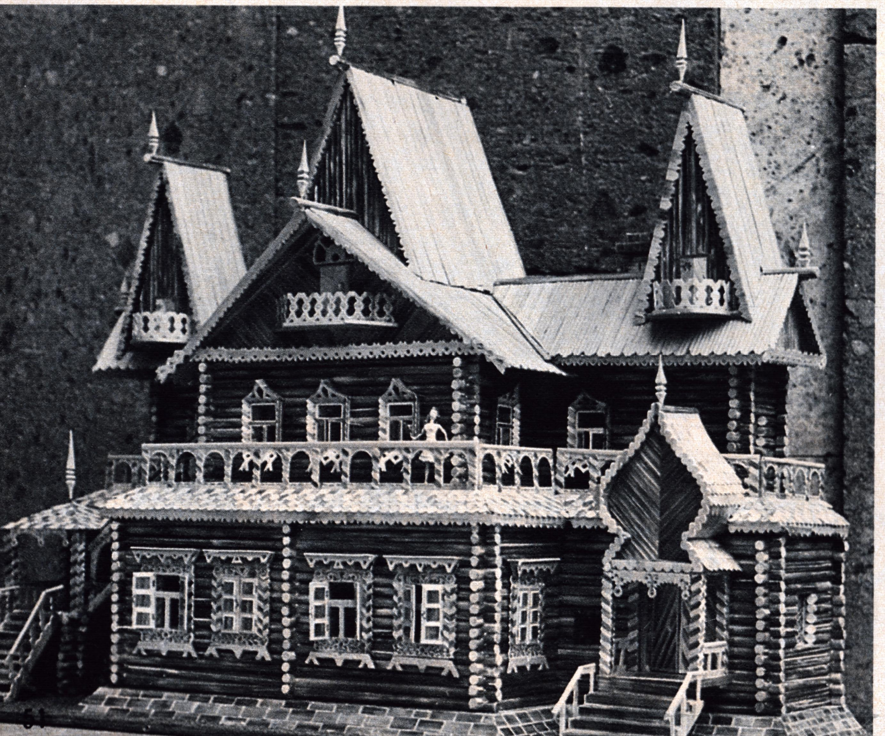
ソ連には建築に興味をもっている人が少なくない。ロシアや世界の名建築物の写真集や解説書を集めている人もいれば、絵はがきやスライドを集めている人もいる。ここに紹介するモスクワの電気技術者ビクトル・バハレフ（49歳）は、昔の建物を自分で建ててしまう……

バハレフの部屋は古いロシアの御殿、城、家や教会で埋まっている。と言ってもそれはロシアの歴史と文化の遺産とも言うべき名建築物のミニチュアで、その実物が今も残っているものから、戦争や時の流れによって失われてしまい、昔の版画をもとに再現されたものまである。

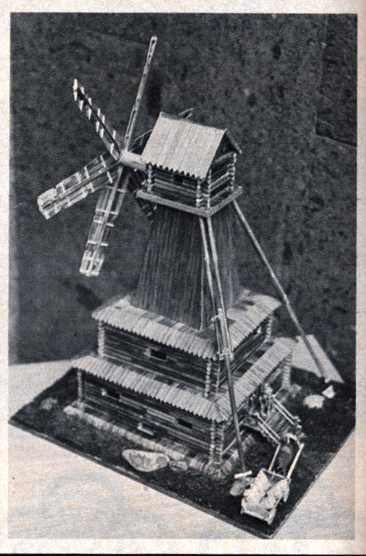
バハレフが模型の題材を探すのは本や写真集からだけではない。休日にはよくカメラを携え、車で古いロシアの町や村に出かけ、歴史的な建物のフラグメントや彫刻その他の装飾の細部を見て回る。

ロシアの木造建築物の美しさを伝えるためにバハレフが選んだ方法は一風変わっている――彼は麦ワラを使って模型を作っているのだ。麦ワラは本物の木の感じを正確に伝え、時間がたっても古びることがないし、美しい飾りの加工が自由にできる。

彼のこの趣味はひょんなことから始まった。8年前に娘オクサーナが生まれた。店にはいろいろな玩具が山と積まれていたが、自分の手で娘に何か作ってやりたいと思った。最初は簡単なおもちゃの家だったが、次第に手が込んできて、結局はご覧の通り。今ではオクサーナも大きくなって、父親のこの独特の創作活動を手伝っている。



◀イワン雷帝時代の貴族の館。16世紀の版画をもとにして作った。



風車小屋

話題を拾う

速く走れる靴





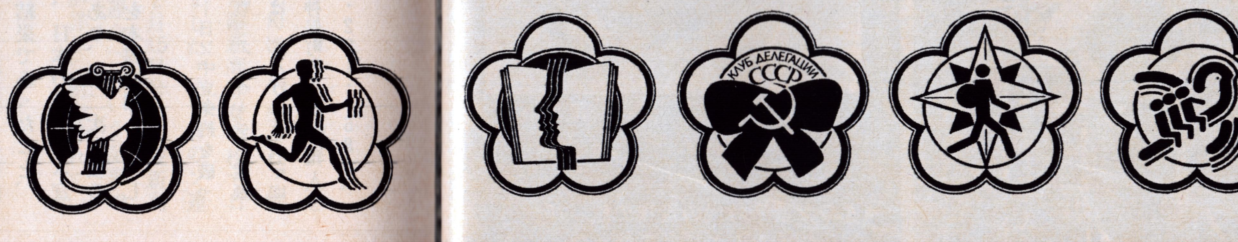
まったく新しい種類の"個人用輸送機関"がバシキール自治共和国の首都ウファにある航空大学の技師と学生たちによって開発された。これは人間の足に装着する内燃機関つき1対の装置。

入念な作業の末、これまで4組の装置が製造され、試験台のテストにパスした後、人間によって試験された。最もよい結果を示したのは4号機。装置の作動原理はこうだ。走るか、装置の底を急激に押すかすると、エンジンが作動し、足にキックを伝える。このため人間は走った時のように、大部分の時間を飛行状態で空中にいることになる。この装置を用いれば、特に努力せずに荷物を持って走ったり、小さな障害物を跳び越えたり、高く跳ぶことができる。エンジンは効率的で、70ccの燃料があればこの装置は1時間動く。目下、さらに装置の改良が進められている。

青年学生祭のマーク

モスクワの第12回世界青年学生祭のサービス部は祭典に備えて美術家たちに通訳なしでどこの国の人にも分かるマーク、ポスター、標識を注文した。これらは青年学生祭の16のセンターと六つの特別プログラムの組織者たちに必要だったので、美術家たちはその制作に大わらわだった。

下のマークは左から第12回世界青年学生祭の文化クラブ、スポーツクラブ、学生クラブ、ソ連代表団クラブ、観光センター、国際プレスセンター、児童センターのマークとして使われたもの。



徒歩で青年学生祭へ



グルジア共和国功労教師ラジェン・チャントゥリヤさん(71歳)は誰よりも早くモスクワの世界青年学生祭に向けて出発した。故郷のガリ町(アブハジア自治共和国)を出たのは5月9日。そしてフェスティバルが始まる数日前にモスクワへ到着した。この約2カ月半の間に体育教師のチャントゥリヤさんはほぼ2000kmの距離を徒歩で踏破したのだった。

"空飛ぶクレーン"を使って



6月29日午前6時、モスクワのロシア連邦共和国閣僚会議ビルの屋上で、著名なパイロット、G・マリツェフが操縦するヘリコプターMI10Kの助けを借りて重量約8tのエレベーターの据え付けが行われた。事実上市の最中心部で行われたこの複雑な作業は、わずか7分で終了した。

新刊紹介



◀『熟柿戦略の破綻』のカバー表紙

A・コシキン著
『熟柿戦略の破綻』

国際親善交流センター　**伏田　昌義**

第二次世界大戦での日本軍国主義壊滅四〇周年を記念して、東京のにんげん社から『熟柿戦略の破綻――日ソ中立条約を破ったのは誰か――』（アナトリー・コシキン著）が出版された。

日本の反動的歴史家や右翼的マスコミが、一九四一年の日ソ中立条約をあたかもソ連が破ったかのように描き出し、日本軍国主義を正当化しようとしている中で、本書は、日本支配層の対ソ戦準備の全過程を豊富な日本語原資料を引用しながら分析し、日ソ中立条約の正確な評価を与えている。防共協定、三国同盟、独ソ不可侵条約、日ソ中立条約といった、緊迫した事件の頻発と急テンポかつ劇的な局面の展開の中で、日ソ中立条約の正確な評価は、広い視野から日本の対ソ侵略戦争の準備の全プロセスを包括的に解明してはじめて可能となる。当時の日本支配層の狙いをコシキン氏は次のように分析している。

「一方では対ソ侵略戦争準備のかくれみのに利用し、他方では侵略開始時期の自主的決定のための手段として利用した」。シベリア武力干渉、張鼓峰地区の対ソ武力挑発、ノモンハンでの武力侵略、満州侵略、対中国侵略戦争、太平洋戦争、ソ連参戦――そして日本軍国主義の壊滅に至る時期の対ソ侵略戦争の準備を、日本帝国主義の対外政策の不可避的な所産であることを暴露することに、著者の狙いがこめられている。

マルクス・レーニン主義の歴史的方法論に正確に則り、かつ日本語資料を縦横に駆使して論証を進めていく著者のアナトリー・コシキン氏は、一九四六年にモスクワで生まれ、モスクワ国立大学歴史学部、同大学院を卒業。歴史学博士候補であり、ソ連科学アカデミー付属東洋学研究所研究員を務めた。一九七九年五月から八五年五月まで全ソ労評機関紙「トルード」東京特派員として日本に滞在。ソ連ジャーナリスト同盟会員の気鋭のジャーナリストでもある。

本書の内容は、第一章で一九一七年のロシア革命以降、ノモンハンに至る日本の対ソ政策が分析されている。生まれたばかりのソビエト共和国を第一次大戦の同盟国と共に侵略した日本は、武力干渉に失敗したあとも、ソ連侵略計画をやめようとしなかった。一九二五年の日ソ外交関係の成立後、ソ連の不可侵条約の提案を拒否し、サハリンから沿海州、カムチャツカ、バイカル以東を占領しようとした日本支配層の対ソ戦略が明らかにされている。日本の最終戦略目標である対ソ戦争の観点から分析してはじめて満州侵略、対中国侵略戦争の意味が明らかにされている。

第二章では、第二次大戦初期の対ソ政策が明らかにされている。ノモンハン（ハルハ河）の敗北にもかかわらず、日本の戦略目標は変更されることなく、外交的手法で時間的引き延ばしをはかりつつ、対ソ戦備を充実させていたことが論証されている。四一年に締結された日ソ中立条約は、自主的対ソ開戦までの時間かせぎにすぎなかったことが明らかにされている。

第三章では、独ソ戦開始後の日本の対ソ攻撃準備にあてられ、一〇〇万の兵力を集中した「関特演」が侵略的、攻撃的なものであったことを明らかにしている。こうして、開戦時機を狙った日本支配層の目論みを挫折させたのが、独ソ戦でのソ連人民の英雄的な闘いであったことが、第四章で示されている。しかし、この一〇〇万の関東軍こそが、ヒトラー・ドイツの最大の援軍であり、日本政府が日ソ中立条約を完全に無視して無数の敵対行為をとりつづけていたこと、事実上破棄していたことの論証に第五章があてられている。

本書の論争的記述の中で、ソ連の中立条約破棄通告が、日本軍国主義の敵対政策の必然的な結果であったこと、ソ連の対日参戦が、日本のポツダム宣言の拒絶の結果であり、第二次大戦の終結を早めたことを本書は明らかにしている。

『熟柿戦略の破綻――日ソ中立条約を破ったのは誰か』は四六判二六二ページ、定価一五〇〇円。発行所は、にんげん社（〒101東京都千代田区神田神保町1―28―9松本ビル5階、電話03・291・7588）。

オリガ・リーさん夫妻を招待

日ソ協会長岡支部長　**中野　貞吉**

昨年の夏、当協会が実施した訪ソ親善旅行「夏のモスクワ・レニングラード・コーカサスの旅」（一行23名、団長・中野貞吉）の際、ハバロフスク市で団員が4名程腹をこわし、その折、ハバロフスクのインツーリスト・ホテル職員オリガ・ニコラエブナ・リーさんに大変献身的な看護をしていただきました。



長岡市役所を表敬訪問したオリガ・リーさん夫妻（前列右から夫妻、中野貞吉さん）



▼歓迎パーティーであいさつするリーさん

そこでこのたび、そのお礼にと、リーさん御夫妻を8月2日から10日まで日本へ招待しました。

リーさん夫妻は8月2日午後、飛行機で新潟空港に着き、同夜は長岡祭日本一花火を見物。翌3日には長岡市役所を表敬訪問し、応対に出た内藤忠一助役に「長岡の花火は最高、世界一です」と語り、「長岡市とハバロフスクの隣のコムソモリスク・ナ・アムーレ市と姉妹都市関係を結ぶよう話を進めてほしい」と要望しました。

リーさん夫妻はこのあと、4日には寺泊水族館見学と海水浴を楽しみ、5日には日ソ協会員20名が参加して開いた純日本式歓迎パーティーに出席しました。また、7日には奥只見ダムを、8日には新潟祭を見物したりして、10日の朝、アエロフロート機で帰国しました。

なお、オリガ・リーさんは朝鮮人を父に、ロシア人を母にして生まれ、戦前の朝鮮にあった羅新高等女学校で日本人と共に学びました。「今日のソ連邦」一九八四年2月15日号の「羅新高女の一卒業生の運命」という記事でリーさんのことが詳しく紹介されています。

本誌を見て思い出した13年前のソ連旅行

浜松市　**雨森　康男**

先日何気なく入ったロシア料理店で「今日のソ連邦」という雑誌を見つけ、大そう面白く読みました。私がソビエトを訪れてからもう十三年になろうとしますが、そのときの想い出は今も鮮烈に心に刻まれています。私と私の妻との出会いもその旅行中のことなので、謂わば私たちの仲人をしたのはソビエト連邦ということになります。

私のソビエト旅行は僅か十八日間の短いものでしたが、機会があったらもう一度訪れたいと思っています。私の夢はソ連製のサイドカー「ドニエプル」でシベリアを横断したいことです。むろん妻と二人でです。実現出来るかどうかは別にして、日本の人たちがもっともっとソビエトの人々のことを理解出来、仲良く出来、親しい隣人として平和なおつき合いが出来る……いやそんな日の来ることを本当に心から願っています。

ソビエト大使館の広報部の方々にお願いしたいのはもっともっとソ連邦の姿を日本国民に知らせて欲しいのです。今日は偶然「今日のソ連邦」を手に取ることが出来ましたが、もっと多くの人がソ連邦を知るよう、これからの御活躍を祈ってやみません。







タペストリーの下絵の力作

ソ連美術アカデミー会員グリゴル・ハンジャン（59歳）は画家、デザイナーとして著名だが、アルメニア教会教長バズゲン１世からエチミアジン聖堂のタペストリーの下絵の制作を依頼された。ハンジャンはその２点の下絵の制作に５年をかけた。右に紹介したのはそのうちの１点『バルダナの戦い』。紀元451年、アルメニア民族がペルシャ人に勝利した戦いを主題にしたもの。画家は大胆にも、すべての時代のアルメニア文化の巨匠たちをバルダナ戦の参加者として描いている。

文化トピックス

ネクラーソフを記念する全ソ詩の祭典

ヤロスラブリ市（ソ連欧州部の中心）から15km離れたカラビハ村の丘の上にある公園の木立の中に、白い2階建ての建物が立っている。これは偉大なロシアの詩人ニコライ・ネクラーソフ（一八二一—七八）の旧宅記念館だ。一八六二年から七五年までほとんど毎夏ネクラーソフはここで休養した。当時ペテルブルグ（現レニングラード）で二つの指導的な雑誌の編集長を務めて多忙だった詩人にとって、この村での休息は何よりの楽しみだった。

毎年7月のある日曜日、カラビハ村で全ソ・ネクラーソフ詩の祭典が行われる。今年は7月7日だった。祭典にはモスクワ、レニングラード、ウクライナ、ベロルシアの作家、詩人、社会主義諸国の文学者が参加した。公園の空き地や並木道ではロシアの優秀なフォークロア・アンサンブルのフェスティバルが催され、詩人の詩に作曲した歌や詩人が愛した民謡が演奏された。大書籍市と陽気な市も開かれた。



モルダビアのモード



モルダビアのデザイナーたちが新しいコレクション——綿とニット製のスポーツウェア、絹のフォーマルウェアを発表した。これらの作品はいずれもことしの夏・秋シーズンのモードの一般的傾向を反映している。



自然と人間――相互関係のプラスとマイナス

生態系の状況はすべての人にとってますます高まる不安の種になっている。世界の工業はいぜん大気中にメタン、炭酸ガス、一酸化炭素、亜硫酸ガスを放出している。酸素と窒素の量が減ってきている。地質時代の初めにあった大気の原始的組成へ大気が逆戻りするプロセスが始まったかのような印象を受ける。

ソ連の汚染防止措置

ソ連ではこのプロセスは停止されなければならないと考えている。一九八三年にソ連の工業が大気中に放出した有害物質は、一九七五年に比べて九〇〇万tも少なくなった。同じ期間に工業生産高が38%増大したにもかかわらず、である。空気の質はソ連の四五〇の大都市でチェックされている。うち三五〇の都市でじんあい、亜硫酸ガス、硫化水素による大気汚染の減少傾向がすでにはっきりと認められている。

生態学者の勧告に従ってモスクワから市外へ三〇〇以上の企業が移転させられた。国はそのための費用を度外視した。こうしてソ連の首都は大きな代償と引き換えに、世界の大工業都市の中で最もきれいな（この言葉の直接の意味で）都市の評判をかちとったのである。

ソ連では生活条件が整備され、開発された地域を流れている河川の流量は、国全体の河川流量の16%にすぎない。この水量の半分を工業企業や農業企業が消費している。しかも今日ではこれらの企業は30年前の3倍以上を〝飲んでいる〟。しかしソ連では工業企業の水需要の約70%が、排水を回収し再利用するシステムによって賄われている。このようなシステムのおかげで年間二二〇立方kmの水が節約できる（これは日本の全河川の年間流量の約$\frac{1}{3}$である）。全体の数字は、もちろん、強い印象を与えるが、しかし河川をきれいにする闘いは終わっていない。

イワノ・フランコフスク州（ウクライナ共和国）で鉄筋コンクリート部材工場がルジカ川へ工場排水をたれ流し、数人の技術者が罰金を取られた。しかし企業側は、汚染の後仕末を急ごうとはしなかった。そこで副工場長、技術長、輸送職場の技師が裁判にかけられた。彼らはポストから外され、刑罰を受けた。工場の新しい管理部は事態を改善した。

環境汚染の最良の予防は生態学教育である。この分野で大きな仕事をしているのは自然保護団体で、これらの団体にはソ連全国で約六〇〇〇万人が参加している。会員の労働者、職員、学生、生徒たちは森林へ出かけ、掃除をし、植樹をする。このような行事は通常土曜日に行われるので〝森の土曜日〟と呼ばれている。

昨年の〝森の土曜日〟だけで自然保護団体の会員たちはモスクワ郊外の森林で一五〇万haの区域を掃除した。モスクワ市民のアイデアはレニングラード、スベルドロフスク、その他の工業中心地の人々にも広がった。

〝自然の騎士〟運動の参加者は青少年に特に多い。三〇万人の青少年が青年林区で勤労奉仕活動をしている。ここで彼らは夏休み中、専門家の指導を受けながら、生態学の素養と自然に対する積極的な保護の経験を身につける。

ソ連の一部の都市と共和国では（たとえばエストニアでは）、普通教育学校のカリキュラムに生態学コースが設けられた。ソ連の大学は毎年環境保護と合理的自然利用の専門家を四万人ほど養成している。

昨年メンデレーエフ記念モスクワ化学工業大学に工業生態学講座が開設された。この講座では生態化学技師を養成している。彼らは生態学的にきれいな生産の計画を作成し、産業廃棄物から無害な成分を抽出し、有毒物質を無害な物質に変え、環境への新化合物の影響を予測することを学んでいる。

ソ連では国民経済で使用される農薬のリストがたえず改善されている。使用認可の下りた農薬のリストから、一部の先進諸国ではまだ使われている毒性の強い一連の化合物が削除された。利用される農薬類の毒性は減少している（一九六〇―七〇年の間に農薬では$\frac{1}{2}$、殺虫剤では$\frac{1}{4}$に減っている）。

電力産業では有害廃棄物の主要排出源は火力発電所と熱併給発電所である。ますます大量の燃料が燃やされているこれらの発電所の煙突は、日夜煙を出している。電力と熱エネルギーの需要はたえず増大している……

まだ最近のことだが、モスクワの最大の熱併給発電所の一つ、TEC16（重油使用）の煙突から出るすすがモスクワ市民に少なからぬ不快感を与えていた。熱工学研究所の専門家たちは、灰とすすを除去するだけでなく、貴重な金属原料――重油の燃焼生成物に含まれている五酸化バナジウムを回収する装置の開発に成功した。この4年間に〝無駄に〟放出された灰の量はモスクワだけでも25%減った。

しかし一〇〇%減ったわけではない。保護フィルターを付けた場合でも、まだ大気中に有害物質が放出される。ソ連では空気を汚染しない水力発電所が電力のますます大きな部分を生産している。しかし水力発電所は別の種類の生態学問題を起こしている（広大な地域の水没、およびこれに伴う土壌の水分状況、その地方の微気候などの変化）。これに関連して原子力発電所が生産する電力の比率は高まり（一九八五年度で約14・1%）、非伝統的なエネルギー源――太陽、風、地熱、潮汐、生物のエネルギー源の利用規模が拡大している。

ソ連ではガスで動く自動車の台数が年々増えている。シャシと荷台の間にガスボンベを配置したユニークな構造のトラックが開発された。液化ガスのストックを増やすこのような簡単で独創的な解決策を考えたのは、自動車工業省の専門家たちである。

というわけで、環境に害を与える各経済部門はそれぞれ自分で自分を〝制御〟しているのだ。経済学者たちはこの〝自己との闘い〟が国民総生産のコストの2―3%になると計算した。このような代価を払えば、人間の経済活動が自然に加える損害を少なくとも増やないですますことができよう。それでも生物圏へ入る有害物質の少なくとも$\frac{1}{10}$はソ連からの分である。

世界の工業生産高に占めるソ連の比率は19・2%である。西欧の工業生産高はほぼ同じ位だが、有害廃棄物の排出では西欧は20%を占める。世界の汚染のリーダーは米国だ。世界工業生産高の$\frac{1}{4}$を占めるこの国は、文明の廃棄物の31%を〝生産〟している。

企業と公害防止費

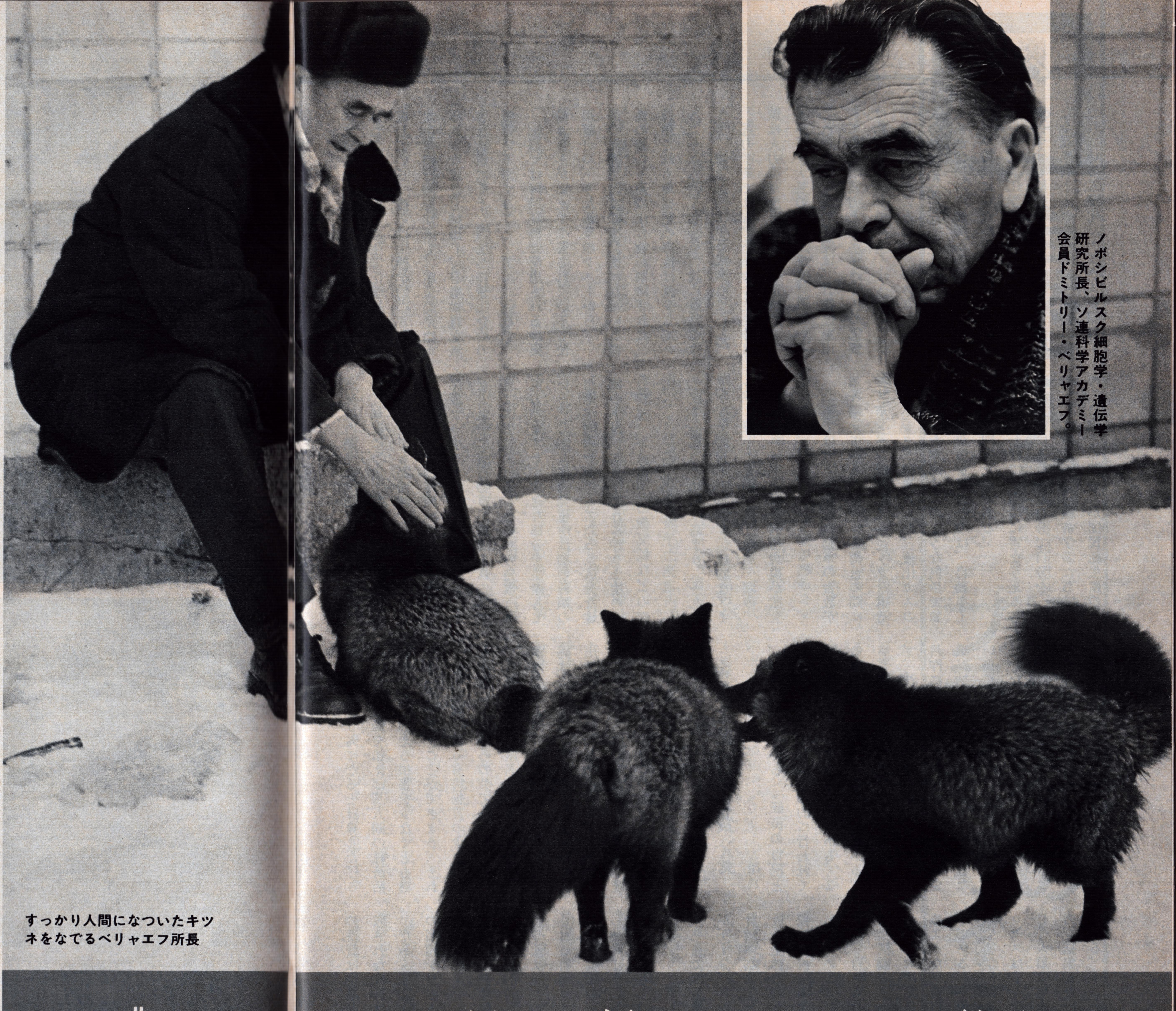
これらの数字から、〝経済の自己との闘い〟が必ずしも精力的に行われているとはかぎらないことが分かる。この闘いには少なからぬ費用がかかる。さまざまな種類のフィルター、トラップ、沈殿池、廃棄物の処理、土地の再耕作に企業が使うかねは、すべての企業が納めることができるとはかぎらない自然への年貢である。生態学的にきれいな、つまり廃物を出さない生産の開発は、必ずしも個々の企業の利益にかなうとはかぎらない。自然に害を与えないためには、投資が必要だが、その投資は企業が採算のとれるように回収されなければならないからだ。

だがもし社会全体の立場から収益性の問題を見るとすれば、どうなるか？工場は収入をもたらすことができるが、工場の影響地帯での小麦の収穫率は時として40―60%減少し、小麦のたん白含有量は25―30%減る。大気中に放出される有毒ガスの多くは、付近に茂っている樹木の寿命を数分の一に縮め、しかも好ましからぬ環境内の工場設備そのものもその耐用年数が著しく短くなる。

ソ連では企業活動の従来の評価方法が不十分だという認識が高まっている。計画体制によって個々の企業の利益と社会全体の利益とを結合できるような戦略を打ち出すことができる、と考えられている。このような戦略からは経済も、自然も共に利益を得る。特に、経済活動とすべての環境および広大な地域における自然保護措置を調整できるようなソ連自然保護総合計画が作成中である。ソ連では現在、科学と生産の生態学化が進められており、このプロセスは広く深く進まなければならないし、人類は生物圏を保護するための努力を結集しなければならない、と考えている。

シベリアの自然と管理された進化

──ベリャエフ・アカデミー会員の研究と実験



ノボシビルスク細胞学・遺伝学研究所長、ソ連科学アカデミー会員ドミトリー・ベリャエフ。

すっかり人間になついたキツネをなでるベリャエフ所長

ドミトリー・ベリャエフは68歳。ボルガ川流域の生まれだが、シベリアに住みついてそろそろ30年にもなるので、いまでは完全なシベリアっ子と言えるだろう。彼は40歳のときノボシビルスクへやって来た。それまでは毛皮獣飼育企業で働き、理論と実践を身につけていた。ファシスト・ドイツとの戦争にも参加した。これらの経験は学問上の出世とは関係なかったが、実務的でエネルギッシュな人間の性格を形成する上で影響を及ぼしている。このような性格と研究者としての才能は、当時活動を開始したばかりのソ連科学アカデミー・シベリア部の仕事にはうってつけだった。やがてドミトリー・ベリャエフはアカデミー準会員に選ばれ、次いで正会員、シベリア部幹部会副議長に選ばれた。現在はノボシビルスク細胞学・遺伝学研究所の所長として、一般生物学、進化、品種改良、細胞、遺伝機構、生態系の問題に取り組んでおり、その上、学生たちに講義もしている。ベリャエフの学問的関心の範囲は広く、またシベリアの自然も実践的な研究と理論的な総括のための極めて豊富な資料を提供している。

シベリアでは、人間と原始の自然の地球上で最も急激な接触が行われている。自然開発のプロセスは、すでにかなりの規模に達しており、少し前までは未開だったシベリアは、文化圏に変わりつつある。ドミトリー・ベリャエフはそのために多くの貢献をしている。

自然は発展法則を無視した乱暴な干渉には耐え切れず、人間が開拓した畑や牧草地をだめにしたり、種の多様性を減少させるという形で復讐する。唯一の方途は、人間と生物圏が共に進化することである。だが、具体的にはどういうことか？

ルソーの有名な〝自然に帰れ！〟の呼びかけが一定の原則になるべきなのか（この場合、〝進化〟は否定的な意味合いを帯びる）？

それとも、ロシアの自然科学者ウラジーミル・ベルナツキーが提唱したように、人間は自然を管理する労を引き受けるべきなのか？

ドミトリー・ベリャエフはベルナツキーの説を取る。ベリャエフは人間の意思によって管理される進化についてのソ連の遺伝学者ニコライ・バビロフの言葉を好んで引用する──「管理された進化によって、世界の現在の食糧を保障する植物と動物のすべての種が作り出されたのである。科学が発展するにつれて、進化は人間に必要な結果をますます多くもたらす」

たとえば細胞学・遺伝学研究所では、ベリャエフの指導のもとに、秋播き穀物の耐寒性品種が開発された。小麦の〝シビルスカヤ67〟の開発はセンセーションを引き起こした。この品種は天候不順に強く、病気にもかかりにくく、1haあたり0・2─0・3tの増収をもたらす。すでにシベリアでは数百万haで栽培されている。〝シビルスカヤ67〟は突然変異法によって得られた。特別な薬品を使って小麦の遺伝機構に働きかけ、望ましい変異を起こさせたのである。研究所では遺伝子工学によってシベリアの農業に必要な植物を作り出す方法を精力的に探求している。

新しい品種の開発で数々の成功を収めたとはいえ、ドミトリー・ベリャエフは自然そのものが与えてくれたものを最大限に利用することを呼びかけている。彼は自然淘汰によって蓄積されて来た遺伝的な富を無視すること、幾世紀にもわたってそれぞれの土地の育種家によって作り出されて来たものを無視することは、浪費であると考えている。一方、シベリアの経済開発はまったく病的な結果をもたらしかねない。文字通りわれわれの目の前で、野生の動物だけでなく、家畜まで含めて、多くの種が消えかかっている。

たとえば、ヤクート牛はほとんど姿を消してしまった。この牛は寒さに強いことでは他に並ぶものがなく、マイナス70度の厳寒にも耐えられる。この牛はホルスタインその他はるかに生産性の高い品種に駆逐されてしまったのである。しかし、どこでもかしこでも新しい品種がもてはやされると、それはやがて退化につながる。在来種を駆逐することによって、"新来種"は実質的に他種から隔離され、新しい遺伝的資質を取り入れることができなくなってしまう。

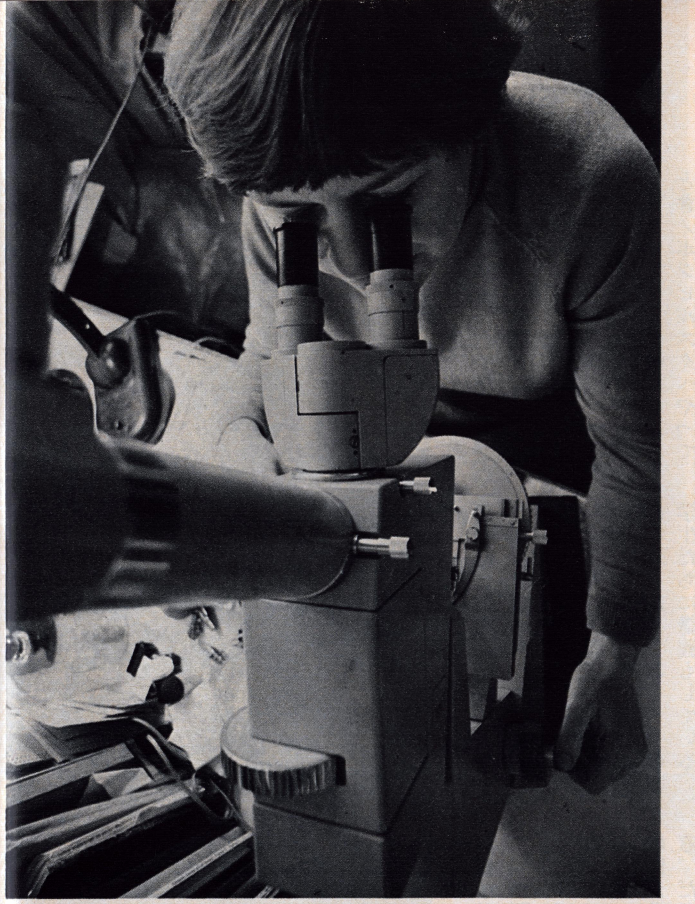
だから往々にして、新しい品種は病気に対して弱く、厳しい気候にも耐えられない。一方、在来種、野生種は強い遺伝的資質を持っており、病気に対して強く、生育条件を選り好みせず、動物なら乳の脂肪分が濃く、植物ならアミノ酸の含有量が多い。ドミトリー・ベリャエフはこうした優れた遺伝子を守る——冷凍保存ではなく、生きた個体とともに——という重要な課題に取り組んだ。それはシベリアの自然を守るためだけでなく、人間がシベリアの自然の進化を管理するためにも必要なのである。

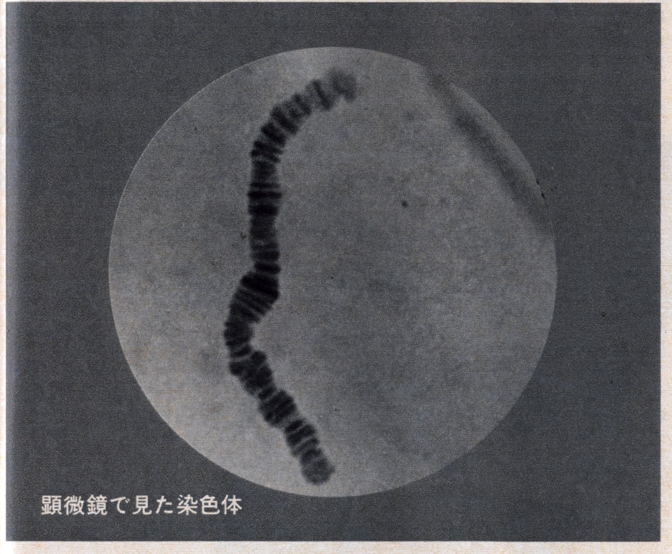
アルタイ山中のチェルギンスキー・ソフホーズの森林に、八万haにわたって、ベリャエフと彼の同僚たちは生きた"遺伝子バンク"を作っているところだ。それは動物の一種のストックであり、ここから人間はシベリアの動物界と植物界の維持あるいは改造に必要な材料を取り出すことができる。アルタイ山地のこの一角は、自然のあらゆる多様性を示している。ここには針葉樹林もあれば広葉樹林もあり、高原草地もあれば万年雪の峰もある。このような条件の中ではタイガの多くの動植物はもとより、ツンドラの動植物でさえも生育できる。

細胞学・遺伝学研究所の研究員たちはチェルギンスキー山中の森にヨーロッパバイソン、マウンテンシープその他、ソ連レッド・データ・ブックに記載されている珍しい動物を送り込む一方、毛皮獣飼育場でさまざまな毛色（ホワイト、ブラック、ブルー、パール）のミンクの飼育に取り組んでいる。そのさい、毛皮の質を落とさずにミンクの成長を1カ月速める方法が発見された。研究員たちはまた、近い将来、カワウソの工業的飼育に移行することも考えている。カワウソの毛皮は、毛皮の強さを測る基準にされているが、毛皮獣飼育業者はカワウソをチェルギンスキー山脈の水系に広めており、カワウソを家畜化する実験を始めた。

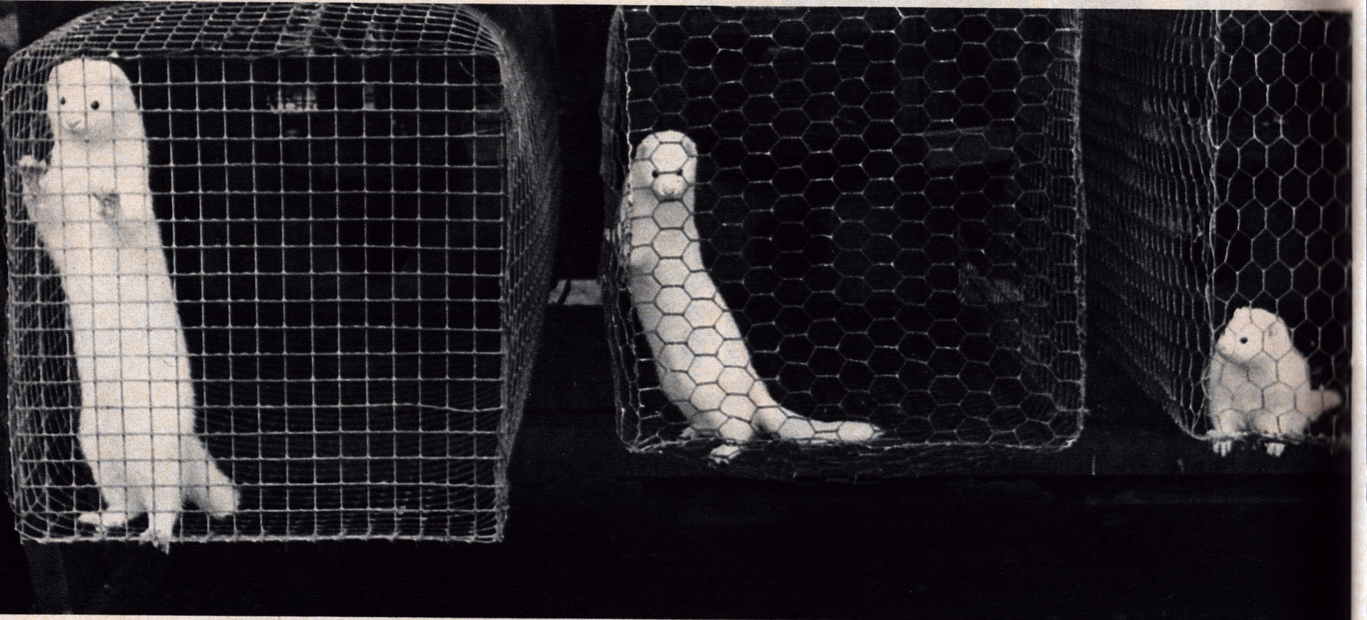
研究所の毛皮獣飼育場には人間の手から餌を食べたり、人間がなでても平気なキツネたちがいる。ドミトリー・ベリャエフが指導する専門家たちが開発した家畜化の方法が有効なことを裏づけている。

人間と自然が調和して生きていた"黄金時代"を思わせるこのほほえましい光景を、シベリアの学者たちは明日の現実であると考えている。彼らによれば、野生の動物を保護する最良の方法は、動物たちを経済的に"順化"し、家畜化して、工業的に飼育することである。地球を禁断の惑星にするものではなく、生きとし生けるものへの愛を倍加する経営の理性的な方法、自然に対する思いやりのある人間的な態度が、自然を豊かで多様なものにするだろう、と学者たちは考えている。





顕微鏡で見た染色体



細胞学・遺伝学研究所の実験飼育場で飼育されているミンク

右上　染色体の研究をするアリピナ・イストミナ生物学博士候補

ノボシビルスク細胞学・遺伝学研究所では世界で初めてカワウソを家畜化する実験が始まった。



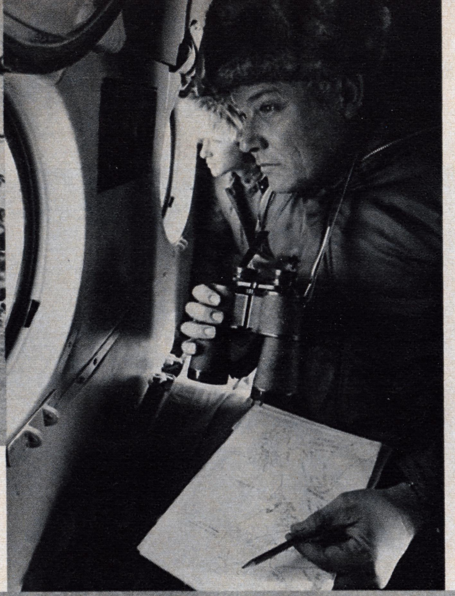
カスピ海の水鳥の楽園

本誌記者　ビクトル・ルデンコ

カメラ　V・ボブコフ

秋が深まると、トルクメン砂漠に深く入り込んだカスピ海のクラスノボツク湾と北チェレケン湾へ、ユーラシア大陸の北部から数十万羽の鳥たちが飛んで来る。その中には、ソ連レッド・データ・ブックに記載されている極めて珍しい種類の鳥も多い。これらの湾は世界的な意義を持つ水鳥と水辺の鳥の越冬場所として、ユネスコの国際自然保護連合のリストにも記載されており、ソ連のクラスノボツク自然保護区に組み入れられている。

「一九八一－八五年度のソ連の経済・社会発展の基本方向」では、ユニークな自然を保護するための仕事を継続する必要があることが強調されている。


飛行機から越冬する鳥の数を数えるウラジスラフ・ワシリエフ自然保護区長


クラスノボツク自然保護区には毎年数十万羽の鳥が越冬しにやって来る。


底生動物のサンプルを採集する水生生物学者のビクトリア・ナザレンコ（左）と巡視員ニコライ・ワシン。

その仕事はソ連に約一五〇ある国立自然保護区の一つ――クラスノボツク自然保護区でも行われているが、急速に発展している工業中心地と境を接していることから来るむずかしさもある。カスピ海がしばしば水位を変えることもむずかしさの一因である。

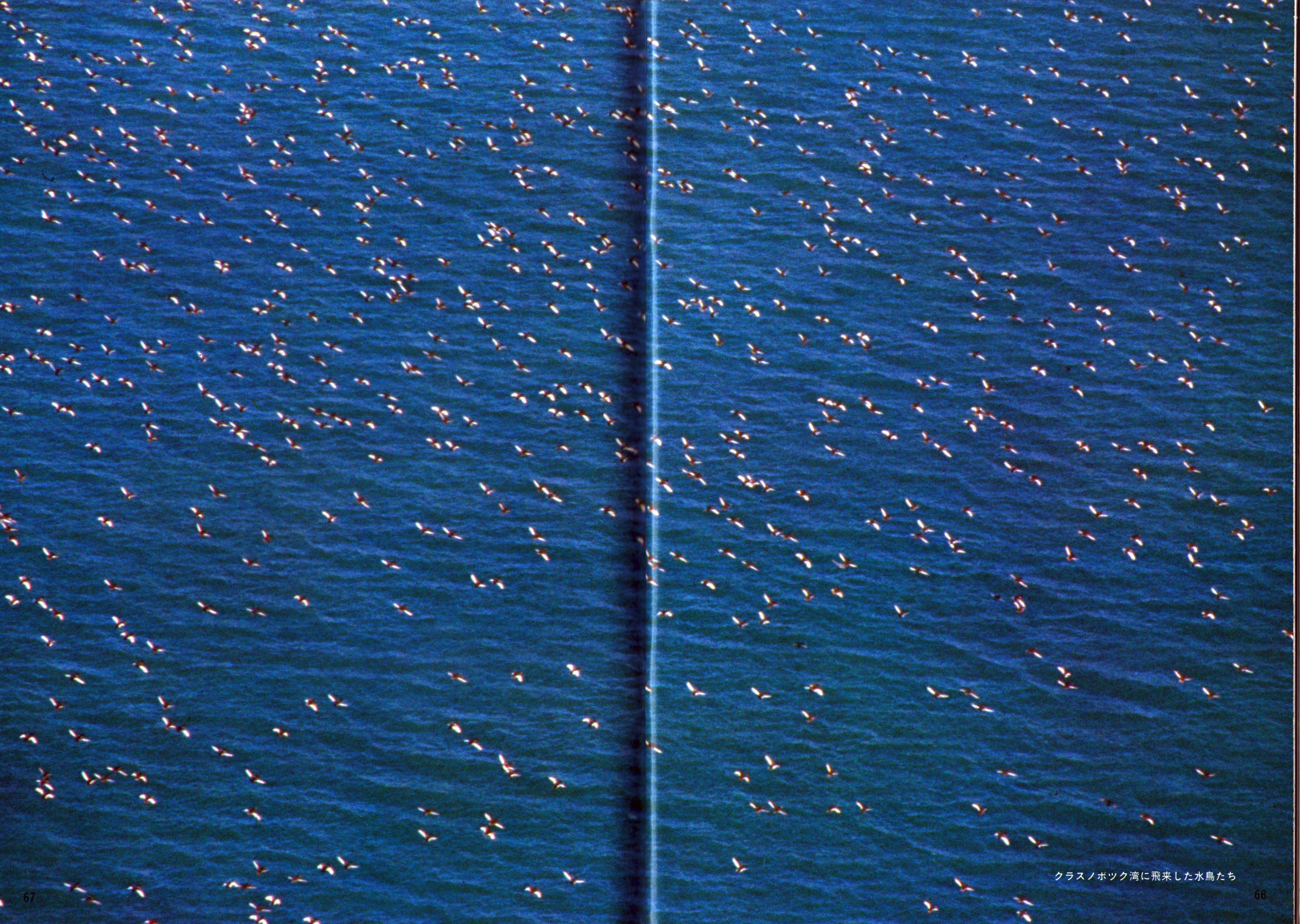
われわれはジェット推進式の高速艇で湾を走って行く。われわれが近づくと、オオバン、ハクチョウ、カモ類の大群が騒々しい音を立てて舞い上がり、クバダグ山脈の上にかかる太陽を覆い隠してしまう。

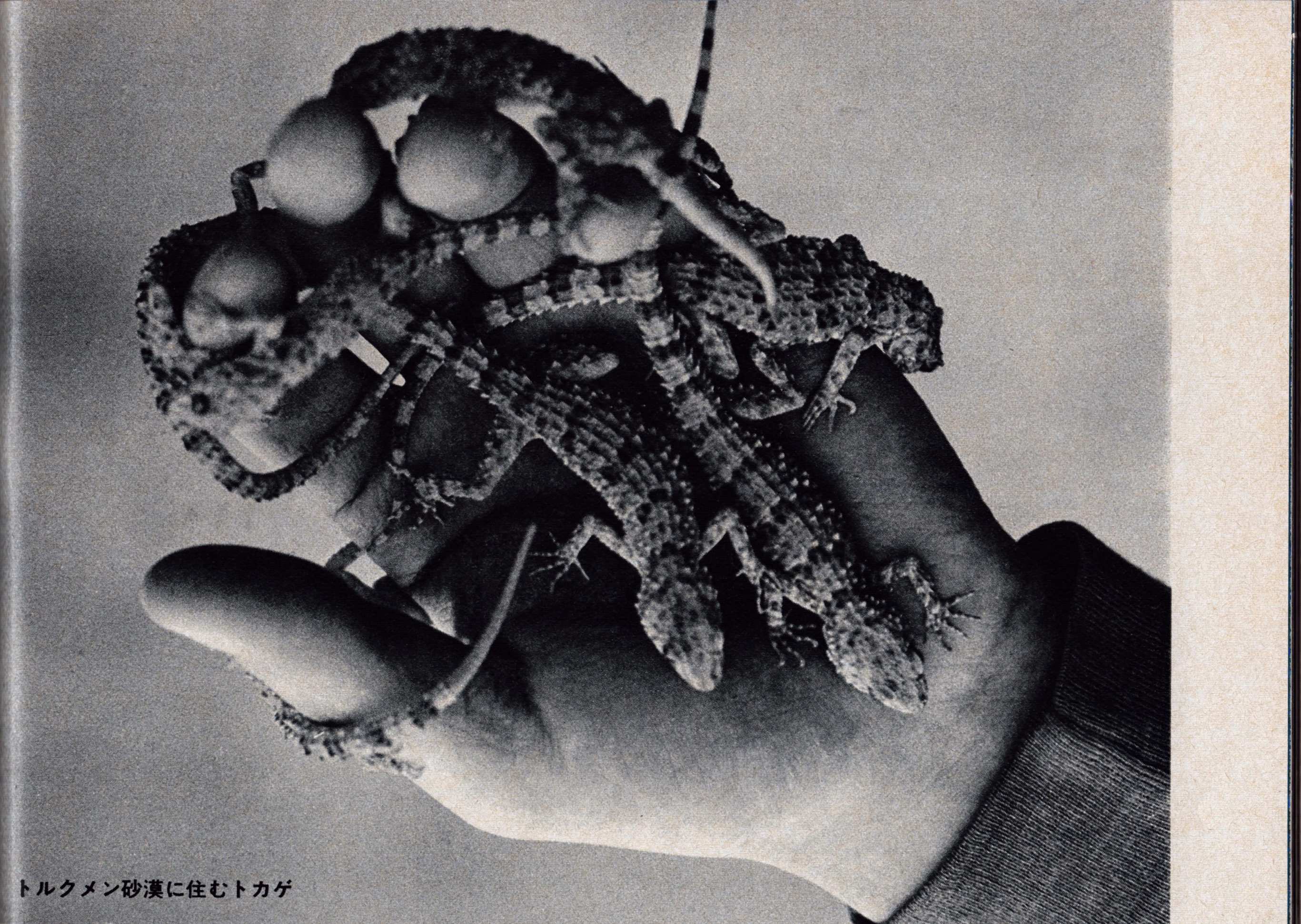
見渡すかぎりの水がわれわれのまわりで波打っている。だが、水深はせいぜい０・５ｍから１・５ｍ。キジルスー村に近づくと、高速艇のジェット推進装置に藻が詰まってしまった。藻があるからこそ多くの鳥を養うことができるのだが。

機関手が船尾から身を乗り出して藻の始末をしている間、自然保護区の水生生物学者ビクトリア・ナザレンコは水底のサンプルを採集した。採集したのはゴカイ、端脚類、エビ類、小さな軟体動物など。学術用語では、これらはすべて底生動物と総称され、その量と質、活発さが越冬地の生物学的状態




カスピ海南東岸のガサンクリ地域


クラスノボツク湾に飛来した水鳥たち



トルクメン砂漠に住むトカゲ

の指標になる。だからナザレンコは3—4日ごとにサンプルを採集する。

水生生物学者には研究室での調査と総括のための資料としてのサンプルが必要だが、われわれは一刻も早くフラミンゴを見たくてたまらない。この珍しい鳥の営巣地の一つがベコビチ湾にあるのだ。人間の背丈ほどもあるアシが茂った岸に近づく。アシの茂みの中を通って、風下からこの用心深い鳥に接近しようというわけである。岸に近づくためには、平底のモーターボートに乗り替えなければならない。長靴をはいて歩けるほどの浅い海が砂洲を取り巻いているからだ。このような浅い海でないとフラミンゴは採餌しない。

アシの茂みを注意深く進む。と、あたりが明るくなり、目の前にすばらしい光景が開けた。夕日の光を浴びた紫色の水の中を、フラミンゴが長い足で歩きまわっているのだ。

……われわれは夕方遅く引き返した。しかし、暗闇も少しも不気味ではなかった。真っ正面にはクラスノボック市が光を散りばめて水際まで半円形に迫っていた。ホテルの緑色のネオンが見えた。自動車の走る音が聞こえて来た。それでも、われわれの高速艇はまだ自然保護区から抜け出していないのだ！

一〇〇年以上も前に生まれたクラスノボック市は、いまではトルクメン共和国最大の工業中心地の一つであり、鉄道と海路を結ぶ最も重要な港の一つでもある。この埠頭から、中央アジアとカフカズ地方、ソ連欧州部を結ぶ最短航路が始まる。

クラスノボックは石油のまちでもある。砂漠の地下に油田があり、市は石油の精製を専門に行っている。市は発展して、新しい居住区ができ、海岸の砂浜が開発された。まだ40年前までは、クラスノボックが時と共に発展して、世界的な意義を持つ鳥類の越冬地と直接隣り合わせるだろうなどとは、だれも想像できなかった。

こんなことになったのは、水鳥の越冬を保護するために一九三二年に自然保護区に指定された、四〇〇km南のカスピ海のガサンクリ湾が浅くなり、その機能を果たさなくなってしまったからである。一九六〇年代の中ごろにクラスノボック湾と北チェレケン湾の状態が水鳥の越冬に必要な条件を満たすようになった（藻が生え、底生動物が住みついた）ので、当時すでにクラスノボックは現在と同じくらいに発展していたにもかかわらず、鳥たちはここへやって来るようになった。そこで一九六八年に自然保護区域は、クラスノボック湾と北チェレケン湾を編入して広げられた。その面積は現在二六二・〇三七ha。二つの部分から成る。面積一九二・三〇〇haの北半分は、一八〇haがクラスノボック湾、北チェレケン湾、ミハイロフスキー湾、バルハンスキー湾といった水面で、残りはその周囲の幅1kmの岸とオスーシヌイエ諸島である。南半分は面積六九・七〇〇haで、幅7km、長さ80kmのカスピ海の浅瀬とその沿岸、かつてのアトレク川の河床に近いカラデギシ地区、小デリリ湖、干上がった大デリリ湖の湖底、かつてのガサンクリ湾域がこれに含まれる。

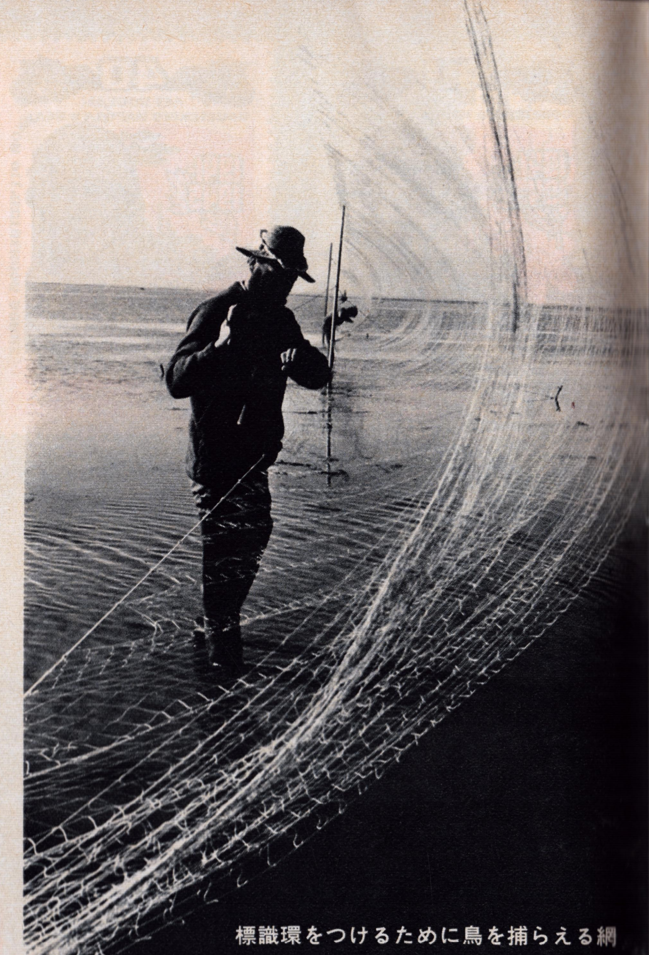
カスピ海域で越冬する鳥全体のおよそ2/3がここで5—6カ月を過ごす。ソ連に住むフラミンゴの多数がミハイロフスキー湾と北チェレケン湾で冬を過ごす。クラスノボック湾の広い水域には、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ツクシガモ、マガモ、コガモ、オナガガモ、アカハシハジロ、ホシハジロその他多くの水鳥が数十万羽集まる。いちばん多いのはオオバンである。

ウラジスラフ・ワシリエフ自然保護区長は語る——「市は海岸の一部を越冬地のために譲りました。クラスノボック湾の航行は限られた狭い水路でだけ許されています。個人用の船は、手漕ぎボートといえども、自然保護区へ入ることが禁止され、銃を持って侵入すれば、たとえ一発も撃たなくても、刑事犯罪として罰せられます。

工業廃水の浄化工程の違反に対しては、たとえ汚染がひどくなくても、場合によっては刑事責任を問われます」

一九八〇年代には1回だけ、潟の生態系に重大な損害を与えかねない事故があった。湾に一〇三ℓの石油が流出したのである。その後始末のために、市は一万八〇〇〇ルーブル以上支出しなければならなかった。

自然保護区では大々的な調査活動が行われている。餌場の状態がつねに調査され、コントロールされている。ここではどのくらいの鳥を養うことができるか？ 鳥学者たちは年に2回、飛行機で水域をまわって、一〇〇羽の単位まで正確に鳥を数える。自然保護区の研究員は鳥の行動学や大群の中での相互関係も調べている。年間三〇〇〇羽以上の個体を捕獲し、大きさや体重を測り、渡りの経路と営巣地を明らかにするために、標識環をつけて放す。そのほか、自然保護区内で起きるすべての自然現象が記録されている。



標識環をつけるために鳥を捕らえる網



弱ったフラミンゴの世話をする自然保護区の先任研究員ミラ・ガウエル（左）とアレクセイ・カラバエフ。

戦勝40周年記念切手

ソビエト軍の栄光

全ソ切手収集家協会員
イーゴリ・ザハロフ











ソ連通信省はすでに昨年から大祖国戦争勝利40周年を記念する切手シリーズを発行しており、本誌の今年の第9号でその最初のシリーズについて紹介したが、本号では今年の4月に発行されたシリーズを中心に紹介しよう。

シリーズは5枚の切手と小型シート1枚から成る。上段右の切手は一九四一年の秋から冬にかけてモスクワ近郊の戦いでファシスト・ドイツ軍が撃滅されたのを記念するもの。レーニンの肖像と攻撃するソビエト軍兵士がモスクワ・クレムリンの宮殿や塔を背景に描かれている。

上段中央の切手には第2次世界大戦中のソ連の兵器と兵士が描かれている。

上段左の切手のテーマは〝銃後は前線のために〟。

上から2段目の右の切手はパルチザン戦士の貢献をたたえたもの。

同左の切手にはベルリンのトレプトウ公園にある有名な解放戦士像（彫刻家E・ブチェチチ作）が描かれている。これはファシズムを壊滅させたソビエト軍をたたえたもの。

その下の小型シートには祖国戦争1級勲章と、ソビエト軍の剛勇と栄光を象徴する連隊旗のリボンが描かれている。

これらの切手と小型シートはアート紙にグラビアで印刷されている。切手はいずれも額面5コペイカ、小型シートは50コペイカ。目打ち12×11・5。

5月初め、戦勝記念日の直前に、ソ連通信省からもう一種類の切手が発行された。大判の正方形を45度傾けたデザインで、銀色の地に勝利勲章が描かれており、その周囲を「一九四一－一九四五年の大祖国戦争におけるソビエト国民の勝利40周年」の文字が取り巻いている。グラビアと金属版による印刷。目打ち11・5×11・5。





地球を子どもたちに！

——東方諸民族芸術博物館付属児童アトリエの子ども絵画展

本誌記者 リュドミラ・ルブツォワ
カメラ V・ザマラエフ　V・アキモフ



『朝』アーニャ・アタエワ（5歳）

『カラダグ山』オレグ・モシコフ（6歳）



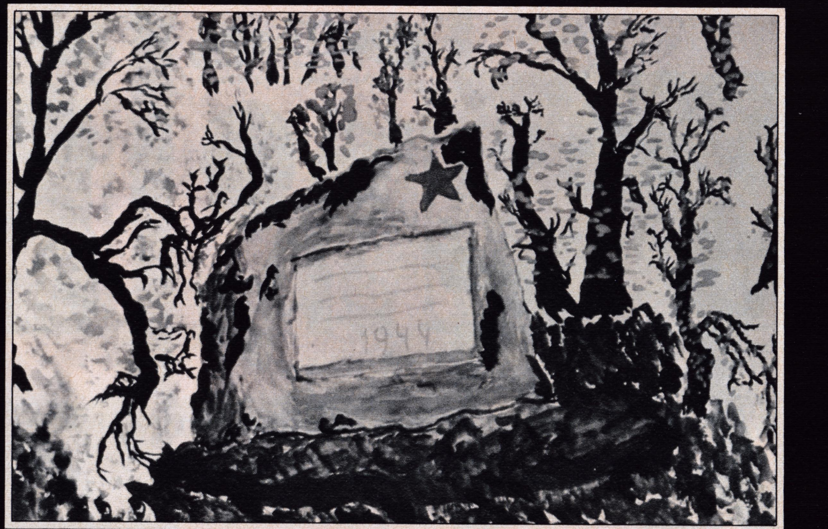


『村にサーカスがやってきた』マーシャ・ポゴシャン（5歳）

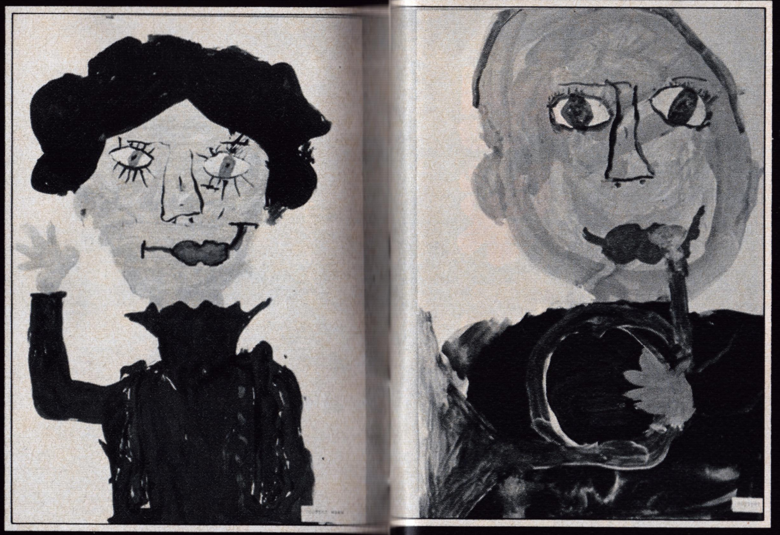
▶『レーガンさん、ぼくたちは平和を望んでいます！』セリョージャ・クリュコフツェフ（6歳）



一九八五年7月12日、モスクワの国立東方諸民族芸術博物館のふだんは静かなホールに、子どもたちの甲高い声や明るい笑い声が響き渡った。この日ここで、国立東方諸民族芸術博物館のアトリエの子ども絵画展「地球を子どもたちに！」が開幕したのだった。こ



『パルチザンの墓』オレグ・モシコフ



『パパとママ』セリョージャ・クリュコフツェフ



『春』アーニャ・アタエワ



▶第3回カナガワビエンナーレ国際児童画展で銀賞をもらったときのオレグ・モシコフとおばあさん。



第8回子ども絵画展「地球を子どもたちに！」の会場で

の絵画展は毎年開かれるもので、今年は第8回目。絵画展は感動的である。というのも、参加するのは3歳から6歳までの幼児だからだ。興奮しているのは出品した子どもたち自身なのか、親やおじいちゃん、おばあちゃんなのか、分からない。

この展覧会は参加した幼児たちの大部分にとって、自分の作品が展示される初めての展覧会となった。

展示された作品はエンピツ画、水彩画、グアッシュ画など二〇〇点以上。子どもたちはどんな絵をかいているのだろうか？ 太陽、小鳥、自分自身、ママ、草、花、海……言ってみれば、自分のまわりにあるものすべてだ。世界を描いているのだ。だが、6歳ともなれば、その世界で起きていることの冷淡な目撃者ではいられない。だからセリョージャ・クリュコフツェフは『レーガンさん、ぼくたちは平和を望んでいます！』をかいたし、コースチャ・トルブコビチは『戦争はいやだ！』を、オレグ・モシコフは『パルチザンの墓』をかいたのだ。これらの子どもたちは絵の中で、善と悪、戦争と平和といった複雑な道徳的、倫理的問題に取り組んでいる。

東方諸民族芸術博物館付属の児童アトリエは8年前、ボランティアによって組織された。子どもに絵を教えるのは、それを委託された博物館の学芸員の仕事（勤務）の一部となっている。

子どもたちに絵を教えたいという人は、はっきり言って、多くはない。責任の重い、めんどうな仕事で、時間も取られるし、何よりもまず、子ども好きでなければならないからだ。これに対して、絵を習いたいという子ども——というよりも親——は非常に多い。週に1回、3時間の授業に送り迎えしなければならないにもかかわらず、である。当然、すべての希望には応じかねる。授業は無料である。

最初のころ、子どもたちは泣いたり、教師が要求することをかたくなに拒むこともある。だが、アトリエの指導者ゾーヤ・ガブリリャチェンコ（30歳）は一人ひとりの子どもをつかむことができる。生徒は3歳から6歳までの幼児15人。ゾーヤはロストフ・ナ・ドヌー市の国立教育大学美術・グラフィック科の卒業。生まれつきの教育者である。ゾーヤの授業は毎回、おとぎ話を読んだり、博物館（アトリエは東方諸民族芸術博物館の中にある）の展示ホールを見学したり、ママたちが差し入れてくれるお菓子を食べながらお茶を飲んだり、子どもたちにとってはお祭りである。子どもたちは授業の最後に絵をかく。だから、絵にはいちばんよく覚えているものが描かれる。新年のお祭りの準備も楽しみの一つだ。子どもたちはそれぞれ自分のコスチュームを考え、デザインして、ママやおばあちゃんにそれを縫ってもらう。



『子ギツネ』オレグ・モシコフ



▶第8回子ども絵画展「地球を子どもたちに！」の開会式





左　第12回世界青年学生祭でモスクワに来ていた被爆者の江種祐司さんに広島への折り鶴を託すアトリエの子どもたち

左端　子どもたちが折った折り鶴

ゾーヤ・ガブリリャチェンコは何よりもまず、子どもたちの心を開かせるための雰囲気づくりが大切だと考えている。彼女は、子どもたちの大半は本格的な画家になるわけではないことを理解しており、肝心なのは子どもたちに自分でものをつくり出すこと、仲よくすることを教え、彼らが立派な市民になるのを助けることだと考えている。

絵画展の開会式にはそれほど大勢の子どもたちはやってこなかった。何しろ夏休み中なので、多くの子どもたちは親と一緒にバカンスに出かけてしまったからだ。私たちはアトリエの生徒のひとり、6歳のオレグ・モシコフと知り合った。彼の作品『蛇を退治する騎士』は他の子どもたちの作品5点とともに今年3月に横浜で開かれた第3回カナガワビエンナーレ国際児童画展に出品され、銀賞を受賞した。これはアトリエが開設されてから獲得した2つ目の国際的な賞である。

オレグは3歳半のときにアトリエに連れてこられた。とても活発で、感受性の豊かな子で、周囲で起こるあらゆることに生き生きと反応する。彼の母親はモスクワのある工場の技師だが、オレグと一緒にモスクワ近郊を旅行したとき、ソ連国民がファシスト・ドイツと戦った大祖国戦争（一九四一—四五）当時パルチザン部隊が陣取っていた場所に立ち寄った。母親はファシストたちが不意を襲ってパルチザンの基地を攻撃し、負傷者まで残忍に殺したことを話して聞かせた。パルチザンたちの墓の前に立って、オレグは泣いた。翌日、オレグはみんなに自分の新しい絵を見せた。『パルチザンの墓』という題だった。

絵のほかにオレグはピアノと英語も習っており、両親と一緒にしばしば劇場や博物館、展覧会へ出かける。

オレグ・モシコフの絵は何よりもまず力強さで迫ってくる。どの絵にも静的なものは感じられず、すべてが動きに満ちている。グラフィックの手法を好んでいるので、絵ほどには色に重きを置いていない。

「きみが描く花は太陽の方を向いているのに、木が風に曲げられているのはなぜ？」と私が聞くと、オレグはまるで大人のように、「ぼくには世界がそう見えるのです」と答えた。将来何になりたいか、という質問に対しては、宇宙飛行士になって、宇宙から見たものをかきたい、と答えた。

第12回世界青年学生祭の直前に開幕した子ども絵画展「地球を子どもたちに！」は、この祭典の児童文化プログラムの一部になった。アトリエの子どもたちは折り鶴を一〇〇〇羽折って、手紙とともにそれを広島の子どもたちに贈ることにした。この手紙の中には次のような一節がある――「地球のすべての子どもと大人に晴れた青い空を心から希望します」



国立東方諸民族芸術博物館付属児童アトリエの指導者ゾーヤ・ガブリリャチェンコとオレグ・モシコフ（中央）、コースチャ・トルブコビチ。

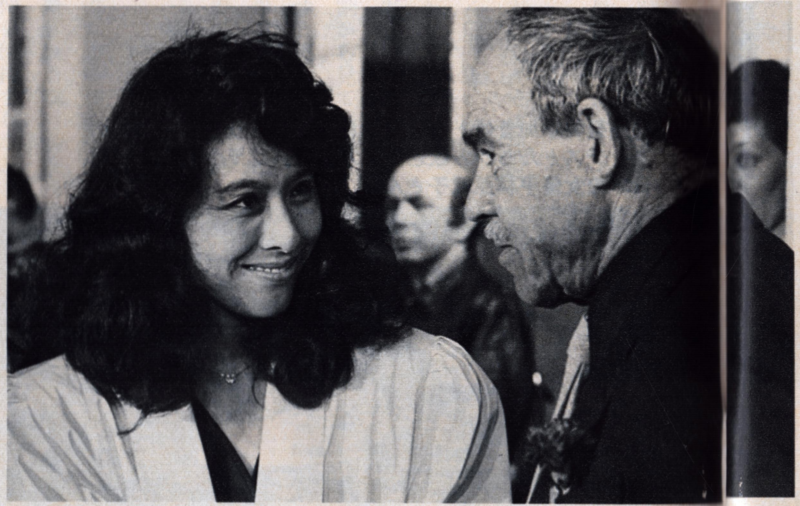
モスクワ映画祭がうつし出した時代と世界

本誌記者　ボリス・ベルマン

ЧЕТЫРНАДЦАТЫЙ МЕЖДУНАРОДНЫЙ КИНОФЕСТИВАЛЬ 1985 МОСКВА



長編劇映画部門の金賞を受賞した（左から）フリストス・ショパハス（ギリシャ）エレム・クリモフ(ソ連)、ノーマン・ジュイスン（米国）の3監督。





上右　フランスのリノ・ベントゥーラ監督とメキシコの女優ブランカ・ヘラー

上左　〝モスフィルム〟で俳優のミハイル・グルズスキーと談笑する栗原小巻さん

6月28日から7月12日までモスクワで開かれた第14回モスクワ国際映画祭には一〇七カ国の映画人が参加した。これほど多くの国の参加者を集めた映画祭は世界に前例がない。モスクワ映画祭の上映プログラム（三つのコンクール、三つの回顧展、審査対象外作品と参考作品の上映）を構成した五〇〇本以上の映画は、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が第14回モスクワ国際映画祭の参加者・来賓へのメッセージの中で述べた〝血の通った精神的交流〟に疑いなく貢献した。

長編劇映画部門では『行け、そして見よ』（ソ連）、『ソルジャー・ストーリー』（米国）、『9人は消えた』（ギリシャ）がそれぞれ金賞を授与された。『ソルジャー・ストーリー』の土台になっているのは、数年前にピューリツァー賞を受賞したチャールズ・フラーの有名な戯曲である。ノーマン・ジュイスン監督が語ったところによれば、彼は「人間的な映画を製作し、人種差別の悪を示そうと努めた」。この映画のスタッフは、人種差別主義の害毒が米国の一部の黒人——この人類憎悪の思想に自らが苦しんでいる人々——の意識をもいかに狂わせているかということを、高度の技術と深い心理描写によって示している。

ノーマン・ジュイスンは世界の映画界で著名な人だが（『ジーザス・クライスト・スーパースター』、あるいはそれより以前の三つのオスカーを受賞した、シドニー・ポアティエ主演の『夜の大捜査線』を挙げれば十分だろう）、今回のモスクワ映画祭で金賞を受賞したもう一人の監督、ギリシャのフリストス・ショパハスはわずか4年前に映画大学（因みに、モスクワの）を卒業したばかりだ。

『9人は消えた』は彼のデビュー作だったが、誇張なしに輝かしいデビューとなった。この映画は四〇年代末のギリシャの悲劇的な出来事を物語っている。当時イタリア、ドイツのファシストとの戦争に代わって内戦が始まっていた……生き残った9人のパルチザンは正規軍の追撃を逃れようと試みる。彼らのうち8人が戦死し、最も若いパルチザンが一人生き残る。そのパルチザンが追撃を逃れようとしているのは単に生きるためだけではない、それは、自由と正義の理想を裏切らずに死を選んだ人々のことを話すために、将来に向かって、今日のわれわれに向かって逃れようとしているのだ、とショパハス監督は観客に語りかけているかのようである。

崇高な道徳律への忠誠は、金賞を受賞したもう一本の作品でも主要な思想になっている。アレシ・アダモビチの『ハティニ村物語』を原作にしてモスクワのエレム・クリモフ監督が製作した『行け、そして見よ』は、第2次世界大戦中にドイツ軍に破壊されたベロルシアの六二八の農村の一つで展開された地獄図を見せることだけが目的なのでは決してない。この映画のスタッフが憑かれたような情熱で追求しているのは、「このようなことを体験しても精神的に屈しなかった」（監督の言葉）ほどの旺盛な精神力を民衆が備えていたという真実なのである。

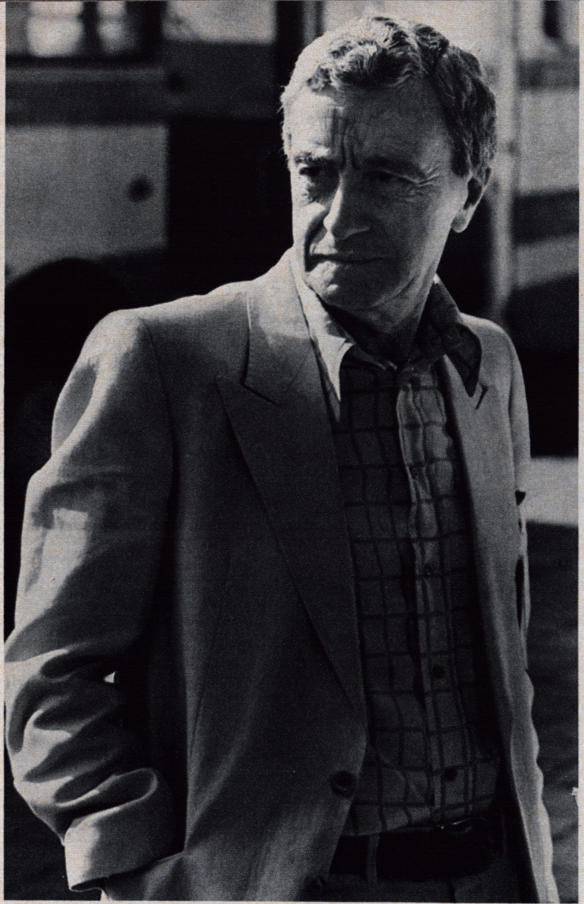
作品の価値と歴史的なスケールの大きさは、この作品が過去よりもむしろ将来に向けられており、原作者アレシ・アダモビチに言わせると、ベロルシアの村々で「広島がリハーサルされていた」ということをこの映画がわれわれに警告している点にあるのだ。

人類が体験している社会的、

道徳的病変の原因を正確に芸術的に分析した多くの参加作品は、迫りくる危険についての警告になった。たとえばそれは、ある多国籍企業の利益のためにアメリカ・インディアンの部族が残酷に殺りくされる過程を描いたブラジル映画『復しゅうの種子』(銀賞)であり、人種差別政策との闘争のテーマの輝かしい芸術的表現により特別審査員賞を授与されたフランス映画『地獄の列車』である。それはまた、児童映画部門で金賞を授与されたカナダ映画『戦争をやめよう!』であり、短編映画『戦争。子供たちの遺言』である。

現代世界の大パノラマとなった短編・記録映画部門で金賞を受けたのは、反戦映画『それはテレジナのことだった』(チェコスロバキア)と『ピラミッド』(ソ連)である。後者は重いケガを治して舞台にカムバックしたサーカス俳優が、難病と闘う7歳の少年を励まし助けるドキュメントもの。銀賞受賞作の中にはニカラグア、米国、ユーゴスラビアの映画がある。

いつものように、ソ連の社会団体も第14回モスクワ国際映画祭のために賞を提供した。たとえば、「平和と諸国民友好のための報道」をモットーとするノーボスチ通信社の賞は、カナダのアニメ作者トム・グレイブストックの風刺映画『平らな世界』と、劇映画『死の場所』でジャーナリストの役を演じたポルトガルの俳優ペドロ・オリベイラに贈られた。



劇映画部門の審査員として参加したイタリアのジュゼッペ・デ・サンティス監督

映画祭の参加者はドゥーロフ動物劇場を訪ねて四つ足のアーチストたちから歓迎された。写真はラクダに乗った日本の女優平林亜紀子さん。



本だな

神道——ソ連の学者の新しい研究テーマ



ゲオルギー・スベトロフ著『神々の道』の表紙

このほどモスクワのムイスリ(思想)出版所からゲオルギー・スベトロフ著『神々の道——日本史における神道』(二四〇ページ、三万部)が出版された。本書は副題が示すとおり、神道の発生と現状について論じている。

スベトロフは日本の宗教問題についてこれまでに幾つかの論文を発表しており、一九六八年にモスクワで刊行された『日本の古い神と新しい神』の執筆に加わったし、日本年鑑やソ連の雑誌にも論文を書いている。こんどの神道の本は彼の最初のモノグラフである。

ソ連の日本研究書では神道はあまりよく取り上げられていない。しかし日本の社会、思想・政治生活や文化生活での神道の役割から見て、神道は十分検討する価値がある。

現代日本の現実は、神道に対して数々の新しい問題を提起している。実のところ、コンピューター、ロボットなどのハイテクずくめの日本社会と、迷信や神がかりの一歩手前の古代信仰を保持することとは、両立するものだろうか? 大学入試の受験地獄を無事乗り切るために、受験生が学問の神——天神様の境内の木の枝にぶら下げる沢山の絵馬は、一体何と言うべきだろうか?

神道は現代にも十分適応している。地鎮祭なるものをやらねば、住宅であれ、宇宙基地であれ、着工しないのが現実である。しかし神道が「生命力」を保っている秘密は、他の多くの宗教同様単純である。日本の歴史を通じてずっと神道は、日本社会の支配階級の政治と密着し、支配階級の利益を表明してきた。スベトロフが指摘しているように、この結びつきは何百年も昔の日本統一国家の形成期に始まる。

日本の大和古代国家時代に、土着信仰に仏教、儒教、道教といった″外来″の要素を加味して、最高の政治的、宗教的権力の象徴である支配者の権威を根拠づける単一の公式の宗教——神道が形成された。さらにスベトロフは、日本の封建的分割時代に神道が国内の統一回復をめざす勢力の宗教的旗印となっただけでなく、思想的・政治的旗印にもなった過程を示している。徳川時代に神道は中央集権的封建国家の思想的とりでとなった。

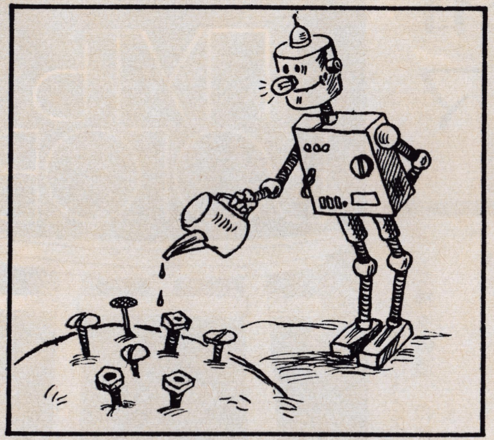
明治維新後神道は徐々に国家宗教(天皇のすべての臣民は必ずこの宗教を信仰しなければならない)となり、日本人の生活における神道の役割はますます高まった。

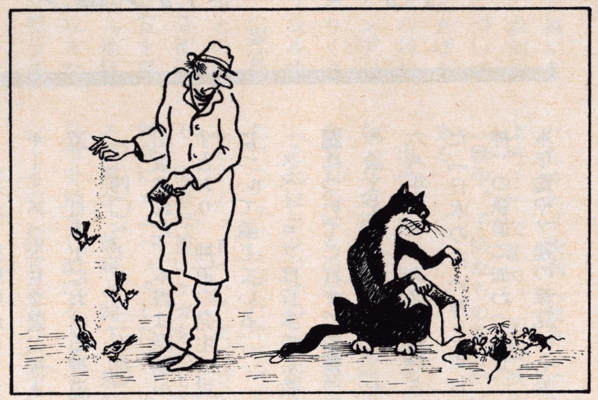
スベトロフは、国家神道が存在していた時期は、日本宗教史の特別なページであったと見ており、この時期に神道は国家主義的、人種差別主義的目的に広く利用されたとしている。

日本の戦後の憲法は信教の自由を唱え、国の宗教活動を禁じ、国がいかなる宗教組織にも特権を与えることを禁止した。しかし現在、神道と国との緊密な結びつきを復活させようとする動きが見られる、と著者は書いている。

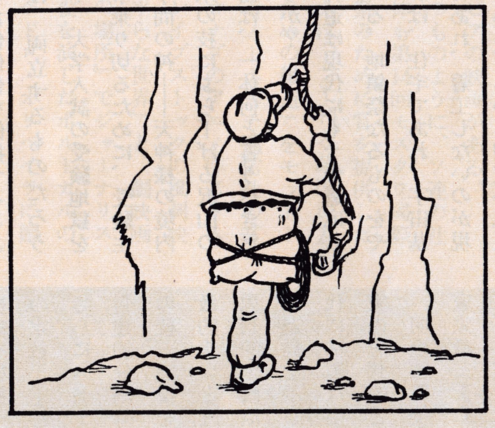
スベトロフは現在の日本にとって緊要な問題を論じ、神道と関連した諸問題をめぐるさまざまな政治勢力の抗争は続いているとの結論を出している。本書が行ったこれらの過程の科学的分析が、ソ連の日本研究ににとって興味深いものであることは、まちがいない。

ユーモア











今日のソ連邦
一九八五年10月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可 発行人 加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03・447・3536）
定価 一五〇円





